奴隷迎合 — The Servant above Slaves

紙谷米英

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美少女メイド・ブリジットとの出逢いから一年半。自らの贖罪に落としどころを見いだした特殊部隊兵士・ヒルバートは、戦火の鎮まらぬ中東において国家に仇為すテロリストの排除に奔走していた。身も心も渇く戦場で、ある事件を元にブリジットは死地への随伴を願い出る。最愛の恋人の自殺志願に、ヒルバートは当惑するが……。相変わらずひねくれた主人公を中心に織り成す、バイオレンス＆ちょっとえっちな冒険アクション。

筆者Ｔｗｉｔｔｅｒ（基本的に下品なので、ご注意下さい）

ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／Ｃｐｔ_Ｔｉｓｓｕｅ

※拙作『奴隷邂逅』の続編ゆえ、そちらを先にお読み戴けますとスムーズにお楽しみ戴けます。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／３６０４２／（旧版：Ｒ―１８）

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１４９７８９／（改訂版：全年齢）

目次

本編

奴隷迎合【1】 1
奴隷迎合【2】 11
奴隷迎合【3】 19
奴隷迎合【4】 27
奴隷迎合【5】 37
奴隷迎合【6—1】 44
奴隷迎合【6—2】 56
奴隷迎合【7】 71
奴隷迎合【8】 82
奴隷迎合【9】 88
奴隷迎合【10】 92
奴隷迎合【11—1】 105
奴隷迎合【11—2】 109
奴隷迎合【11—3】 112
奴隷迎合【11—4】 114
奴隷迎合【11—5】 116
奴隷迎合【11—6】 118

雑記ほか

登場人物 120
奴隷迎合【1】（改訂版） 124

本編

奴隷迎合【1】

【1】

　眠りを知らぬ都市では拝めぬ青く澄んだ空に、半月が無数の星々と輝いている。植物の死滅した広大な荒れ地。一般に砂漠と称されるこの土地の一点、吹き抜ける激しい気流で堆積した小高い砂丘の稜線に、西洋人ふたりが息を潜めていた。

「チャーリーよりアルファ・ワンへ。所定の位置に着いた」

　片割れが顎先のマイクに囁き、もう一方は狙撃銃に装着した熱探知スコープの映す像に目を凝らす。しばらく間が空いて、アルファ・ワンの返答が男のイヤープラグへ伝達される。

〈アルファ・ワンよりチャーリー、他に異常はあるか〉

　通信機で暗号化された男声に、男は無感情で応じる。

「ネガティブ、事前情報以上の事は何も。テントが八つ、二列で設営されている。一つだけ、他のテントから離れた位置に建っている。それから、幌張りのトラックが三台。立哨が四人。士気はお世辞にも高く見えないね、呑気なもんだ」

〈そんなろくでなしでも、銃弾ひとつで俺らをアッラーに謁見させてくれるんだ。しっかり見張ってろよ〉

　チャーリー――砂丘の二人組の前方には、言明された通りの光景が広がっている。縦横百メーター程の平地に、地面と同色の四角いテント群が整然と並び、内ひとつが他と隔絶して構えられている。区域の四隅では、警衛が小銃を無気力にぶら付かせていた。

　砂丘の二人組へ軽口を発した男は、彼らの位置から数百メーター離れた窪地にいた。巨大な岩が散在する月影に、男まみれの集落がひっそりと営まれている。湿った窪地で、四台ののオフロード車輛が物々しい円陣を組んでいた。ヘッドライトには分厚い布が被せられ、そのものの機能を意図的に殺されている。現代の遊牧民と言われれば、そんな気もする。だが、そこには山羊ならぬ四輪バギーが複数停車し、

男衆は杖の代わりにアサルトカービン（歩兵銃の銃身を短縮したもの）を手にしている。軽口の男は、装甲を施したランドローバーの運転席で、衛生通信機に繋いだマイクへ語り掛ける。
「アルファ。チャーリーが位置に着いた。目標に動きはあるか」
『アルファ』とコードを振られた作戦本部が、芯のある官能的な女声で応じる。
〈アルファより全部署へ。上空よりチャーリーのＩＲストロボを確認した。敵影は四つのまま変わりない〉
彼女の言う「上空」は文字通りの意味ではなく、地上数千メーターを飛翔するＵＡＶ（無人航空機）の熱源映像を指す。監視映像には、高熱を発する人間が白い亡霊の如く映る。同士討ちを避ける為、同盟勢力は電池駆動のＩＲ（赤外線）灯を明滅させるのが通例だ。天上から愛国者とならず者を区別するには、それしか術がない。
〈各チーム、命令があるまで待機せよ〉
冷淡な女声が通信を切る。運転席の兵士はヘッドセットを外して助手席――指揮官の席で車載機銃の整備に腐心する男へごちた。
「まさか今度もハズレじゃないでしょうねえ、ボス？」
通信担当は眉根を寄せ、無臭のボディシートで顔の砂を拭きつつ語を継ぐ。
「既に三回も空っぽが続いてる。これ以上は、部隊の戦意に関わる」
「俺ら現場はお上の使いに走って、やつらが手に負えない用件を片付ける。それだけだよ。水は残り少ないんだ、文句で舌を回すんじゃない」
指揮官たる小隊長は部下をなだめすかし、銃の点検に目を光らせた。依然と唇を尖らせる舎弟――ダニエル・パーソンズ伍長は、その若さ故に際立つ戦果に飢えていた。目に見える収穫とは、敵勢力の重要人物の拿捕である。彼らはここ二週間で三度、敵の巣窟を襲撃したが、何れも価値ある目標の存在は確かめられなかった。
〈チャーリーより全部署へ、孤立したテントで動きがある……テントから誰か出てきた……左足を引きずってる。間違いない、『ズールー』だ〉

砂丘の偵察班からの通知に、集落の全兵士――十四人に緊張が走った。各自が銃の点検に躍起になり、装備品が正しい場所にあるかと確認作業に駆けずり回る。昂るアドレナリンの抑制に、小隊長はチョコレートバーの封を切って齧り付く。日中の熱気で溶けたチョコレートが、口周りをべとべとに汚す。その顎に、ぎざぎざの傷跡がのたうっていた。

岩陰に潜む男ら――ＳＡＳ（英国陸軍特殊空挺部隊）の一個小隊がズールーと呼称するのは、『アラビア半島のアルカイダ』（以下：ＡＱＡＰ）の軍事顧問が一人、ハミド・イブン＝ハーディ・ジャラールなる人物である。当人物は都市から離れた地図の空白、ネフド砂漠のど真ん中でテロリストの養成を生業としていた。ジャラールの拿捕、並びに不透明な敵情の調査。それこそが、この場におけるＳＡＳ分遣隊の存在理由である。

傷跡の小隊長は微弱な光を発する腕時計へ視線を落とし、出来の良い脳味噌――本人は否定する――で複数の演算を処理した。この小隊を率いる陸軍少尉、名をヒルバート・クラプトンという。彼は部下を自らのランドローバーへ集め、塗装の剥がれたボンネットに作戦地図を広げた。

「現時刻が〇二四三時、事前に顔の割れている敵は二八人。順調にいけば、奇襲から周辺地域の確保まで十五分も掛からない。

事前の段取りに従い、四人がキャンプの西側から徒歩で接近、敵勢力を隠密に無力化する。内訳はダニー、スタン、オスカー、俺だ。あとの者はここで待機、非常事態が生じたら車をすっ飛ばして掩護に回る。最初から車載兵器でテントを吹っ飛ばすのもありだが、どうやらお上はジャラールに相当ご執心らしい。勢い余ってやつを殺そうものなら、俺らの首が飛びかねん。本部からは、殺害対象の確認を強要されている。まあ、およそ不可能だがな」

方々で、乾いた笑いが上がる。戦闘中に月明かりで敵の人相を識別するなど、常軌を逸した離れ業である。小隊長の右腕たるダニエルは衛生通信機を弄くり、作戦本部と偵察班へ以後の行動計画を告げた。

「万事上手く運べば、事後処理の部隊の到着まで三時間も掛からん。

そうすりゃ、二週間振りのまともな食事にありつける。万が一に窮地に陥っても、七十人のＱＲＦ（即応部隊）が一時間で飛んできてくれる。それに、我々はあんな付け焼き刃の連中におくれなんか取らない」

小隊長の言に部下は一様にかぶりを振り、落ち着いた表情を向ける。互いの判別が利かないまでに伸びた髭面を見渡し、ヒルバートは作戦地図を畳んだ。

「全員、通信回線を開けておけ。雑兵とはいえ、何が起きるか分からん。攻撃のタイミングは無線で連絡する」

それだけ言い残すと、彼は自分のカービンを抱え、選定した三人を率いて潜伏地点を発った。

遮蔽物の一つもない砂礫の畝を、屈強な兵士が菱形の隊形を取って進む。各自が割り振られた方角を厳戒し、不意の攻撃を期して銃口を振る。巨大な砂丘の月影に自ら呑み込まれると、その姿形はヒトの認識から消え去った。特殊部隊の祖と崇められるＳＡＳは、その根元を第二次大戦中の北アフリカの砂漠地帯で発足した部隊に端を発する。生命を否定する劣悪な環境は、黎明期より彼らの敵であり、そして己を隠匿する味方であった。二一世紀を迎えて尚、砂の海は彼らにして絶好の狩り場であり続けている。

鋼鉄製の武器を携えた四人が、敵キャンプの西側五十メーターの砂丘に身を屈める。ダニエルが秘匿性の高いバースト通信で偵察班へ連絡を入れると、四人の赤外線ストロボを確認したとの報せが返された。ヒルバートはカービン上部に装着した赤外線レーザーを起動し、敵キャンプへと不可視の矛先を向けた。

「アルファ・ワンより全部署へ。立哨さえ片付けば、いつでも攻撃出来る」

〈全く、待ちくたびれたよ〉

連絡から程なく、偵察班の返答が寄越される。砂漠に「ぱしん」と空気の千切れる音が立て続けに静寂を破り、四人の立哨が糸の切れた人形の如く崩れ落ちる。

〈対象の無力化を確認。新たな脅威、なし〉

偵察班の二人が、まだ発砲の余韻の残る身で通信を入れる。作戦本部からも同様の報告を受けると、ヒルバートらの分隊は血液が沸き立つのを感じた。
「二手に分かれて掃討する。ダニーは俺と来い。俺達はチャーリーから遠いテントから攻撃する。スタンとオスカーは逆からだ。音を立てるなよ」
指揮下の三人は頷き、各自のヘルメットに装着したＮＶＧ（暗視装置）の電源を入れた。これより、彼らの仕事は佳境を迎える。不気味な双眼を装備したスタンとオスカーが、テント群へ向けて先に歩き出す。続いてダニエルも腰を上げると、ヒルバートがこれを制した。
「おい小僧、忘れ物だ」
彼は茶目っ気を露わに、脇腹のポーチから小型のビデオカメラを取り出した。ダニエルは不承不承にこれを受け取り、自分のヘルメットの側面に取り付ける。実際の戦闘映像を兵士の視線から撮影し、戦術の改善に発展を促す事由から支給されたものだ。ダニエルはその栄えあるカメラマン役に抜擢されていた。
「戦場ってのは、最前線だけが覗ける聖域じゃあなかったのかい？」
カメラの暗視録画モードを起動するダニエルに、指揮官は苦笑した。
「お偉方を喜ばせて同胞の扱いが良くなるなら、悪い面ばかりじゃないさ」
「それが反映されたためしはないが」と付け加えたところで、師弟は悪戯っぽく笑んだ。
弾倉が銃へ確実に挿さっているのを確認し、師弟は先行したスタン軍曹らのバディ（二人組。或いはその片割れ）と距離を空けて前進する。各々の銃から眩い赤外線レーザーが延び、光芒が絶えず敵キャンプを横切る。彼らが携える制式小銃――Ｌ１１９Ａ１は優れた兵器だ。羽の様に軽く、剛健で如何なる自然環境にも耐える設計で、精度が群を抜いて良い。使用する弾薬はアメリカが新設計したＭ８５５Ａ１で、これは弾丸が対象の体内で複数に断片化する事で、大きな殺傷能力を発揮する。ヒトの腹部に命中すれば、まず助からない。

〈アルファ・ツー、スタンバイ。テント内部に動きはない〉
スタン軍曹のバディが、偵察班に近いテントの入り口の真横に控えた。ヒルバートらが、その真逆の位置のテントを担当する。ダニエルが足下に転がる敵兵の骸を検分するも、既に体躯は熱を失ってぴくりとも動かない。弟子が安全確保に親指を立てるのを確認し、ヒルバートはＰＴＴスイッチを押し込んだ（Ｐｒｅｓｓ　Ｔｏ　Ｔａｌｋ：押している間だけ、マイクが音声を拾う）。
「アルファ・ワン、スタンバイ。いつでも行ける。ダニー、お前が先だ」
月光を反射するＮＶＧのレンズに頷き、ダニエルは銃のセイフティ（安全装置）を解除した。
〈アルファ・ツー、了解。タイミングはアルファ・ワンに一任する〉
ダニエルが、すぐ背後に控えるヒルバートを一瞥する。小隊長は首肯で応じた。導火線の着火役は、ダニエル・パーソンズ伍長に委ねられた。強烈な重責に汗が滲む手で銃を握り直し、彼は砂で乾燥した唇を舐める。
「了解、俺の合図で侵入してくれ。三……二……」
銃口がテント入り口を塞ぐ垂れ幕に差し込まれ、テロリストのねぐらに蒼白な月明かりが割り入る。
「……一……始めろ」
ダニエルの身が垂れ幕を押し退け、布の内側へと滑り込む。ヒルバートがそれに続き、ナイロンの擦れる音だけがかすかに響いく。
テントに侵入したダニエルは、三人のアラブ人が寝袋で寝入っているのを視認した。ＮＶＧの緑色の視界でそれらを具に観察し、重要人物が紛れていないのを確認した。セイフティは既に解かれている。カービンをしっかと構えると、赤外線レーザーを敵の胸へ重ねて発砲した。老爺の咳に似た、籠もった音が連続する。抵抗はおろか目覚める素振りもなく、三人は着弾の衝撃で僅かに姿勢を変えただけで、そのまま眠り続けた。
「アルファ・ワン、一つ目のテントで三人を排除」
〈アルファ。三人を排除、了解〉
本部の復唱を合図にダニエルはバディへ振り向き、今度は彼を先駆

けにしてテントを去った。
　彼らが第二のテントに向かう途中で、スタンのバディから四人の敵を処理した報せが入った。これで、七人のならず者が地上を去った事になる。ダニエルと配置を交代したヒルバートが二張りめのテントの垂れ幕に手を掛け、舎弟へ目配せする。舎弟は間を置かず頷き、バディは内部へ突入した。襲撃を知らずに眠る敵兵らを視界に入れるなり、ヒルバートは小口径高速弾で心臓を穿ち、腹部に風穴を空けた。くぐもった銃声の他に音はなく、キャンプ全体は沈黙を保っていた。
「アルファ・ワンより全部署へ。新たに五人を無力化」
〈アルファ、了解〉
　清らかな女声と共に、ヒルバートのバディは再びダニエルを斥候に任務を続行する。それからスタンが三人を無力化し、勢いに乗じてダニエルは第三のテントへ足を踏み入れる。先の二つと同様、寝袋に包まれたテロリストの卵が、自らの最期を知らずに寝息を立てていた。
「楽な仕事だぜ」
　経験の決して多くない舎弟に小言を囁こうと、ヒルバートが肘で小突こうとした。彼が左腕を伸ばしかけたその時、大気が弾けた。夜のしじまを引き裂く破裂音は彼らから三十メーター離れた場所で生じ、テロリストのキャンプが息を吹き返した。
　緊急事態に寝袋から這い出ようともがく男らへの対処を、脳では理解していながら、ダニエルは唖然と立ち尽くしていた。呆然とする肩越しに突き出された銃身が、芋虫めいた敵へ目覚めの死をばら撒いた。
「ぼさっとするな！」
　ダニエルは上司の怒号に正気を取り戻し、残った一人を殺害した。形勢が覆り得る状況に、冷たい汗がその首筋を伝う。
〈こちらアルファ・ツー、便所に起きたやつがいる！今いるテントで四人を無力化したが、隣がえらい騒ぎだ！〉
　スタンの叫びと同時にヒルバートはダニエルとテントを飛び出し、手を入れていないテントを視界に捉えた。着の身の乱れた若者の集団が銃を手に戸外へ転げ出て、侵入者を狩り出そうと虚空へ銃弾を

放っていた。その内の一人が、人体に困難な動作で砂へと崩れ落ちる。一拍を置いて、彼方より鞭の打撃音が空を裂いた。影に潜む偵察班は、白兵戦で最も影響力のある狙撃部隊へと変じていた。
「アルファ・ワンより全部署。すぐ傍のテントの敵が起きちまった。我々の所在は露見していないが、まだ四人が暴れてる」
ヒルバートの無線連絡の最中にもう一人が喉に大口径弾を受け、すぐに訂正が為された。「……いや、三人がパニくってる」
アルカイダ見習いが続々と倒れるこの時、一張りのテントで動きがあった。顎髭を奔放に伸ばした男が一人、この騒ぎから密かに脱走を試みていたのだ。だが、お忍びの逃亡は死神の目にしかと捉えられていた。
〈アルファより全部署へ。件の孤立したテントからズールーと思しき人物が脱走。東へ向けて走っている。手に自動小銃らしき存在を確認〉
〈アルファ・フォア、了解。とっ捕まえる〉
落ち着き払った女声に、軽薄な男声が返された。その軽い応対に、ヒルバートは目頭を押さえてうな垂れた。
「……ジェロームの野郎、間違って殺さないだろうな?」
「イタリアのブロンド野郎は、脳味噌がチーズで出来ている」という我流ジンクスを否定し切れず、彼はＰＴＴスイッチに手を掛けた。
「アルファ・ワンより全部署へ。あの馬鹿が貴重な情報源を台無しにする前に、衛生要員を派遣してくれ」
〈アルファ・スリー、了解〉
美貌の少尉・ヴェストの応答が早いか、目標地点後方、ＳＡＳの潜伏地点で一両ランドローバーが砂煙を巻き上げた。その後ろを、一人乗りの四輪バギーが後を追う。
また一人、狼狽えるテロリストの頭が狙撃に弾けた。これで、残りはジャラールと雑兵が二人である。ヒルバートは今一度、ＰＴＴスイッチに手を掛けた。
「アルファ・ワンよりアルファ・ツーへ。残敵は俺らがやる。偵察班も手を出すな」

ＰＴＴから手を離し、ヒルバートはダニエルの肩を叩く。
「おい相棒、今度はしくじるなよ」
彼はテントの陰から身を乗り出すと、残る敵兵へ銃を向けた。得物は相も変わらず、棒立ちで見当違いな方向へ弾幕を張っている。砂にめり込んだ死体から噴き出す血液が、粒子の細かい砂に吸われていた。
「俺はちびの方をやる。タイミングはお前次第だ」
舎弟に有無を言わせず、ヒルバートの赤外線レーザーが低身長の男の胸にびたりと張り付いた。煌々たる輝点は、位置を定めたまま微動だにしない。相方の言動に固唾を飲み込み、ダニエルは照準をそうと標的に重ねた。
合図は不要であった。ダニエルはただ、訓練の通りに引き鉄を絞った。それからコンマ数秒の内に、ヒルバートの放つ四発の弾丸が銃身を飛び出し、鋼鉄の飛翔体は国家の敵の胸骨を、筋肉を、心臓を引き裂き、命を貫いた。柔らかい砂に二十数年のちっぽけな歴史が沈み、埃が舞い上がる。
「よっしゃ、上出来！」
小隊長の口許の傷跡が、不敵に歪んだ。
〈アルファより全部署へ。アルファ・フォアによる捕虜の確保を確認。周囲に敵影はない〉
「アルファ・ワン、了解。残敵の捜索、及び孤立したテントの捜査に移行する。アルファ・ツー、掩護してくれ」
死体が散在し、数分振りの沈黙が再来したキャンプを横切り、アルファ・ワンは最後のテントへ踏み込んだ。麻布の編み目から月光が透過する内部には五人分の寝袋、木製の家具が散らかり、アルコールの臭いが充満していた。ヒルバートは中央のテーブルに置かれた白いポリタンクの蓋を開け、すぐに「おえー」と顔をしかめてみせた。
「アセトンだ。飲めば、けちな爆弾になれるぞ」
ロシアの浮浪者さえ口にしない化学薬品を再び封印し、彼らはテントを出た。
アルファ・ワンがテントから出ると、ズールーを追った先のランド

ローバーとバギーが、砂の軌跡を伴って戻ってきた。孤立したテントに横付けされたバギーは、フランシス・エイリー上等兵が運転していた。ウィルフレッド・ケージ伍長の駆るランドローバー後部には、元々バギーを運転していたアルファ・スリーことヴェストと、手足を拘束された『ズールー』・ジャラールが座していた。包帯に巻かれた右腕が、首で吊って固定されている。ＳＡＳの手に落ちたＡＱＡＰ幹部の右眼は激怒に引きつっていたが、左眼では諦観が暗い渦を巻いている。その顔の左半分は、鉄拳の殴打でグロテスクに腫れていた。

「上層部への手土産は無事らしいな」

ＮＶＧのをヘルメットとを接続するアームを跳ね上げ、ヒルバートは銃のセイフティを掛けた。

「全部署へ告ぐ。捕虜をズールーと断定。各自の被害を確認し、作戦本部より次の指示が下るまで敵キャンプ周辺を固守せよ。野郎共、お疲れさん」

同様の報告を幾分かフォーマルな形式で作戦本部へ通達すると、ヒルバートはダニエルの背中をばしと叩き、走りくる自分の車輌を迎えに駆けた。その貌は先程まで殺人に携わっていた人間に似つかわしからず柔和で、そして舎弟への叱責は欠片ほども残っていなかった。

奴隷迎合【2】

【2】

砂塵が縁取る地平線の向こうで、雲ひとつない空が白み始めていた。感動的な情景には違いないが、それを題材に小っ恥ずかしいポエムを排泄する趣味はない。そんなものが囁けるのは、最愛の異性に迫られた時くらいである。そもそも周りがこうも五月蠅くては、物思いに沈むのも容易ではない。

――時は遡って二時間前。現地語で読んで字の如く「砂礫が広がる」ネフド砂漠のど真ん中で、ハミド・イブン＝ハーディ・ジャラールを捕らえた我々はアルカイダのキャンプを占拠し、英国空軍の応援を待っていた。ジャラールは我らがクラプトン家末弟・ジェロームからぼこぼこに痛め付けられ、顔面がジャガイモの如く変形していた。鼻も拳骨で粉砕骨折を起こし、鼻の穴には止血の脱脂綿が詰められた。我々の機密保全と精神衛生を考慮して、やつの顔には分厚い麻袋が被せられた。先の襲撃に気付いた時こそ脱走を試みた当人だが、今となっては密かに窒息死しているのではと危惧するまでに大人しい。

ジャラールの拿捕後、我々は数人を立哨に命じ、テロリストの死体を一箇所に集積してから、敵キャンプの捜査に取り掛かった。武器もそうだが、主要な回収目標は文書や携帯電話、帳簿や暗号が記録された端末等である。区画毎に分担して汚いテントをガサ入れしていると、東の空から鋼鉄の怪鳥がでかい翼を羽ばたかせた。

テントを出ると、澄み渡った空の彼方に鳥の正体を認められた。ＲＡＦ（英国空軍）の認識標を吹き付けた二機のＭＨ―４７チヌークが、その前後に護衛のＷＡＨ―６４アパッチ・ロングボウ攻撃ヘリ二機を伴い、未だ陽光なき砂漠で彼らなりのヘビーメタルをがなっていた。〈ルミノクス〉の腕時計に視線を落とせば、時刻はまだ五時を少し過ぎたばかりだ。どうやら今回の事後処理を担当する部隊は気力に満ち満ちているのか、でなければ発狂するほど暇らしい。三十ミリの機関砲に誤って吹っ飛ばされない様に、胸に着けた敵味方識別のストロボを頭上で振った。分厚い風防（キャノピー）越しには分からなかった

が、アパッチの操縦手が手を振り返した気がした。
沈みゆく月の残光の中、キャンプ中央に輸送ヘリの編隊が着陸した。高価な航空資産と働き蟻の防衛に、アパッチが上空を旋回する。砂嵐を生む輸送ヘリの後部ランプ（傾斜板）から、機付長の指示でフル装備の兵士が飛び降りる。周辺は我々が事前に掌握していたものの、彼らは標準作戦手順に則って防御陣を展開し、腹這いになって全方位へ警戒を投げた。上層部の取り決めた段取りを終えると、腹の砂をはたき落とし、ようやくで我々と軽い挨拶を交わした。装備や部隊章を見るに陸軍の工兵隊らしいが、どうも青い世代が目立つ。中には高校を卒業直後に入営し、初めての敵地に挙動不審な兵士も見受けられる。チヌークから合計約四十名の陸軍兵士が産み落とされたが、三十路に達していそうな者は二割に満たない。そのくせ、支給されている銃は使い古された個体ばかりだ。可哀想に、彼らの多くは若くして、このくそ壷で純真な感受性と可能性を殺されるだろう。
経験浅い兵士達はＳＡＳ――我々は単に『連隊』と呼ぶ――から作業を引き継ぎ、使いかけの鉛筆から汚れた衣服に至るまで輸送ヘリへ積み込んだ。蝿のたかるゴミ袋の搬入を敢行した若者は空軍兵士の叱りを受けていたが、経験からして右も左も分からないのだろう。とはいえ、愛機を汚される空軍としてはたまったものではないが。
連隊はランドローバーの許で休息を摂ったが、俺は小隊長として空軍の御仁と今後の取り決めを話さねばならない。機体前後に二つのローター（回転翼）を持つチヌークへ向けて歩いていると、幼い顔立ちの陸軍兵士らがこちらを目に耳打ちし合っている。彼らがホモかは知る気もないが、話題の内容は予想が付く。大方、俺の所属がＳＡＳかＳＢＳ（特殊舟艇部隊。英海兵隊に所属）かで討議しているのだ。通常、英陸軍の兵士は制式小銃であるＳＡ８０（Ｌ８５Ａ２）を装備するが、我々は〈コルト・カナダ〉Ｃ８カービンをマイナーチェンジしたものを支給される。また、通常部隊は官給品たる銃に迷彩を施す事は許されないが、我々は作戦地域に応じて自由に銃を塗装出来る。指定外の装身具も業務に支障がなければ大概は黙認されるし、新たに開発された装備品も優先的に配備される。まあ、新装備に関しては

我々を人柱に試験運用している節が濃厚だが。
羨望だか嫉妬の視線をいなし、せわしなく荷の積み込みが行われるヘリに近付くと、どうやら目的の人物を見付けた。チヌークのランプ脇で書類にペンを走らせる機付長は、色あせたフライトスーツに身を包み、陸軍兵士への指示に四方へペン先を向けていた。
「失礼します、少佐殿。陸軍のクラプトン少尉です。この様な辺境まで御足労戴き、恐縮です」
地元・ヘリフォードの街では、絶対に払わない敬意を以て敬礼を作る。同じ陸軍ならともかく、相手は面識のない空軍の飛行機乗り様だ。下手な態度は取れない。裕に三十年は軍籍に身を置くと見える空軍将校は、変色したクリップボードから視線を上げ、真っ直ぐに下級の士官を見据えた。
「それが我々の仕事だよ、クラプトン少尉」
バークレイと名乗る少佐は〈メカニクス・ウェア〉の右手を差し出し、それを握り返す。長らく大荷物と戯れた、力強い手だ。白髪の少佐はクリップボードをこちらへ向けて見せ、自己が負う任務の要旨を語る。
「我々は『ズールー』なる男と押収品を積み次第、アパッチのエスコートで帰還する命を受けている。テロリスト狩りで消耗しているところ申し訳ないが、この積み荷に君達は含まれていない」
「承知しております。我々は自力で帰投しますので、お構いなく。それよりも、我々の同胞の無事に感謝致します」
すぐ傍を、麻袋を被るジャラールが二人の兵士に引きずられていった。一番大事な荷物の引き渡しが、滞りなく済んだ。少佐は僅かに眉根の緊張を解き、クリップボードにペン先を着けた。
「死体の中に、ＨＶＴ（高価値目標）は含まれていたかね？」
「いいえ、事前に確認したズールー以外には。そちらも運ばれますか？」
少佐は静かにかぶりを振り、自分の搭乗するチヌークを見やる。
「見ての通り、我々のヘリに余分な死体を積む余裕はない。鹵獲した武器と証拠品を突っ込むだけで精一杯だ。敵の死体は、この場で処理

しておきたいが……」
老紳士は言い淀み、逡巡の後に伏し目で語を継いだ。
「……我々が運んできた兵士は若過ぎる。敵とはいえ、その身に多大な心的外傷を被るだろう。正規の手順も踏まず、こんな申し出を告げるのは虫が良過ぎるのだが……」
老紳士が目下にかしこまって、余計な汚名を浴びるべきではない。大空を支配する輝かしい戦歴に傷が付いては、陸軍としても忍びない。少佐が語を紡ぐ前に、俺は少しくだけた口調で応じた。
「承知しました。あれは我々で何とかしますので、ご心配なく」
少佐殿は弱り目で頷き、何か必要な物があるか尋ねてきた。その問いに頬を掻いていると、例の白いポリタンクを運ぶ童顔の兵士を視界に捉えた。――あれは使える。
「では、あのポリタンクを戴きます。良い燃料になりますので」
中身の想像が付いたのだろう。少佐は疑いもせず、兵卒が持つポリタンクを譲ってくれた。彼としても、爆薬の原料を自分の機に積みたくはないだろう。こちらから軽く別れを済ませると、少佐は敬礼と共に職務へ戻った。
陸軍兵士の働きで敵キャンプは正しく更地となり、不要な物品とアルカイダの死体を除く一切合切が輸送ヘリに収容された。もう、太陽が砂丘から頭を覗かせる時分であった。二機のチヌークは眩い朝焼けを受けて上昇し、空飛ぶ戦車のエスコートで飛び去った。
砂地獄に残された我々は、早急にこの場を去る必要があった。とうに夜が明けているし、キャンプの襲撃を知ったテロリストが報復に来る可能性がある。チヌークと違ってアパッチの支援がない我々は一刻も早く車輌のエンジンを吹かせたいのだが、ＲＡＦに託された仕事があった。
砂漠は二重人格だ。日中と夜間で、気温が様変わりする。額を流れる汗を拭い、手にしたシャベルを地面へ放った。足下には見張り以外の総員でこしらえた、すり鉢状の穴が掘られている。まるで地獄の釜だ。
「そろそろ頃合いだ。ゴミを投げ込むぞ」

熱を帯び始めた砂にまみれて穴掘りに勤しみ、グロッキーに陥った仲間が唸る。皆が一様に砂漠迷彩の上着を脱ぎ、タールみたいに黒いサングラスを掛けていた。慣れた手際で、ウジの湧き始めた死体が次々と大穴へ放られる。その次には、解体したテントの帆布とゴミが投げ込まれる。最後に友軍から譲り受けたポリタンクの中身――多分、マニキュアの除光液だ――を撒き、穴から距離を取る。常識ある文民は、我々の行動に理解を示さず非難に走るだろう。イスラムの教義的にも、火葬は死者への冒涜に当たる。だが、これが現状で為し得る最大の弔いである。第一、無償で大好きなアッラーの膝元へ届けてやるのだから、こんな親切は他にないだろうに。

ヴェストの合図で数人が黄燐手榴弾のピンを抜き、穴の中心へ投擲した。様々な放物線を描いて落下した手榴弾は、数秒の内に「ぼうん」と炸裂し、焼痍剤を散らして激しく燃え上がった。息を吐く間に穴が白っぽい炎に呑まれ、濛々たる黒煙を吐き始める。うわあ、本当に地獄の釜になっちまった。業火の渦が巻き起こり、全方位に熱風が押し寄せる。これだけ火勢が強ければ、結果を見届ける必要はない。大穴自体も数日中に、風でならされて塞がるだろう。

各班の運転手がランドローバーのエンジンを掛け、四輪バギーが先頭を往く。タイヤが砂を巻き上げて尾を引き、陽炎を生む炎の舌が地平線の彼方へと消えた。

潰れた助手席の座面を通じて、砂の海の感触が尻を走る。この二週間、我々ＳＡＳ第一六航空小隊は、アラビア半島に巣くうテロ組織の撃滅に砂漠を駆け回っていた。昨晩の襲撃を含めて計三箇所の敵拠点を攻撃したが、報告に足る収穫はジャラールが初であった。我々の以前にも他のＳＡＳ戦闘中隊が敵幹部の拿捕に臨んでいたが、情報部の怠慢だろうか、何れも労に見合わぬ結果に終わった。昨今、中央アジアやアフリカに蔓延るイスラム系過激派組織は、末端の兵士を排除したところですぐ三倍に増殖する。まるでネズミかゴキブリで、きりがない。

英国女王もとい政府は、地球上のテロ組織殲滅を標榜している訳ではない。だのに、我々はこうして日夜砂漠を東奔西走し、ジハーディ

ストと銃火を交えている。この理由の説明には、まっこと複雑かつ柔軟な思考が要される。

時は遡って今年の五月。パキスタン国内にて、かのアルカイダ首領ウサマ・ビンラディンは、米海軍特殊部隊の銃弾に倒れた。９．１１より実に十年を費やしてアメリカは面子を取りし、国民は歓喜に湧いた。しかし、『国家最大の敵』の排除がアメリカに新たな課題を強いた事実を、平穏を疑わぬ民はつゆ知らなかった。少なくとも、二一世紀初頭に一度破られているのに。

米海軍のアザラシ――『シール』の辞書通りの意味だ――がビンラディンを殺害した事で、イスラム世界が如何に変じたか。結論を述べれば、ホワイトハウスは他民族やっとで保っていた均衡を、分別ある首脳陣があえて触れなかった楔を、浅い目論みで破壊したのだ。指導者を排除した後、アメリカを宗主に集約する予定であったムスリムは、有史以来最大の敵意をエセ英雄へ向けた。イラクに圧政を敷いたフセインと同様、ビンラディンは存在こそ厄介であれ、問題児をカリスマで惹き付けていた実力に疑いはない。簡単に言えば、ビンラディンは血気盛んな部下が、余計な喧嘩を余所へ吹っ掛けない様に監督していたのである。そのブレーキやらヒューズの役目は、もういない。

ビンラディン亡き現在、手綱の切れたアルカイダ系テロリストは統制を失った。かつて上位組織の懲罰を恐れていたごろつきが、上司の死を端に方々へ戦火を撒いた。テロリストがテロリスト相手にメンチを切り、コーラン（クルアーン。イスラム教の聖典）に明文のない思想が無限に増長した。平和を盲目に愛する市民は、神託を歪めた政治犯に傾倒した。エゴ・イスラムの煮えた油は、今この瞬間も不毛の地を拡大している。衛星写真に、銃砲の煙が写らぬ日はない。これこそが無法地帯、神の虚像を楯に人類が生み出した第三世界である。

下らぬうんちくが過ぎたが、ここでようやくＳＡＳの遠征理由へ繋がる。フセイン麾下（きか）のバース党政権崩壊を契機に、周辺の独裁国家で反乱の気勢が爆燃した。中東全土に紛争の火が回り、根本の原因であるに世界の警察を名乗るアメリカは、治安維持部隊の投入を余儀なくされた。イギリスも表面上の盟友に賛同しない訳にもいか

ず、現地民の目を避けて小規模の特殊部隊を派遣した。アメちゃんと違ってなけなしの予算で頑張る我が軍は、本件に最小限の出費で対応したかった。そう、したかったのだ！イラク発の火種は広域に飛散したが、その着弾地点にはサウジアラビアも含まれていた。英国の石油輸入先であるサウード家の不経済は、我々にとっても好ましくない。おまけにすぐ南には、イギリスの中東支部と呼んで差し支えないＵＡＥ（アラブ首長国連邦）が控えている。ここにクーデターが感染するのはまずい。非常に、まずい。断腸の思いで英政府は大飯食らいの陸海空合同軍を編成、広大な砂漠で勃発する小競り合いの鎮圧と手製爆弾の除去、並びに現地民の保護と、イギリスの国益保守という大任を負わせたのである。……これ、無理じゃない？

つまらない情報整理で疲弊したおつむを労るのに、溶けて包装にくっ付いた飴玉を口に含む。今後も偽ジハーディストはＮＡＴＯを悩ませるだろうが、現場組が頭を捻る事柄ではない。書類仕事はお偉方に任せるのがよかろう。

乾いた眼にぬるい点眼液を垂らし、幾度かしばたたく。張り詰めた視神経が、穏やかに弛緩する。間抜けな欠伸を一つかいて、イスラム社会にまつわるペーパーバックを開いた。黄ばんだ紙が反射する、朝の陽光が眼球に容赦ない。地面の起伏で時折身体が浮くのを感じながら、ウズベキスタンの情勢に視線を這わせる。本来であれば、真っ昼間から我々の様な小規模部隊が、遮蔽のない地域を走るべきではない。かてて加えて指揮官がのんびりと読書に耽るなど減俸ものだが、その心配は杞憂である。確かに、数年前まで特殊部隊の移動は夜間に行われるのが常だったし、今もそうだ。だが、現代の技術発展は著しい。単に基地に帰るという秘匿性の薄い業務であれば、こうして日中に車輌で移動し、大した警戒を配らなくとも済む様になった。ひとえに、ＵＡＶのお陰で。

ＵＡＶは無人機と銘打っておきながら人間の管理下で運用され、精鋭の斥候さえ持ち得ぬ空の眼を備える。４Ｋテレビの画質は約束出来ないが、ＵＡＶの操作者が映像を監視している限り、我々は神に匹敵する視力を持てる。凄い！そういう訳で、ダニエルに代わって運転

を受け持つまで、俺は物知らずがこぞって叩く、神秘的かつ極めて世俗的なイスラムの海に身を委ねた。

奴隷迎合【3】

【3】

ハンドルを握ってから一時間が経過した。赤道付近では憎悪の対象でしかない太陽が、その頂に位置する。我々の車列は未舗装の砂の海から、文明の手が入った道路へと上陸した。一キロ前方に、アラビア半島では異彩を放つ、直方体の建造物群が整然とそびえる。その玄関口には、星条旗と国連旗が微風にはためく。この高壁から一歩も出ず、果たしてお上はこの国の何を知っているのだろう。

米兵による三重の検問を通過し、壁の内側、広大な敷地を徐行する。米兵が屋外でグリルで肉を焼いたり、バスケットボールに興じるのを横目に、幾つものカーブを経て奥まった区画へ進入する。後続のランドローバーから、遠慮ない欠伸やお喋りが発せられる。「家に帰るまでが作戦」ではあるが、十四日も神経を張っていた彼らを戒めるのは無粋だ。視界から次第に米兵の姿が消え、閑散とした区画を進んでいると、またしても検問が現れる。だが、我々の帰還に慌てて煙草を踏み消した兵士は、米軍の所属ではない。警備要員の職務怠慢に目を瞑って手続きを済ませると、後ろの車輌で歓声が上がる。休暇の到来だ。鉄筋コンクリートのガレージへ乗り入れてエンジンを切ると、前方のエンジンから「ばふっ」と熱っぽい咳が漏れる。車輌整備を受け持つダニーが、隣で物憂げに唸った。この愛弟子は本国に残した恋人の代わりに、このランドローバーを相当に可愛がっているのだ。連隊の他の車輌と見比べても、うちの攻撃車輌は群を抜いて手が入っている。

降車して滞った血流を促し、疲労の排出に背筋を伸ばして喘ぐ。――キング・ハリド軍事都市。アラビア半島北東に横たわる、地面から決して動かない米空母の名だ。毎日長大な滑走路から航空機が離陸し、城塞めいた格納庫で整備員が戦闘機を磨いている。綺麗な八角形の敷地は六万人以上を収容可能で、北側に将兵の居住区、南側に娯楽・商業施設が完備されている。我々は北側の、寂れた兵舎を間借りしていた。湾岸戦争の時と比べれば、基地のインフラも随分と進化したも

のだ。今日では、太ったネズミもそんなには出ない。
連隊長――ＳＡＳのトップ――のオフィスで簡易なデブリーフィング（帰還報告）を済ませ、カマボコ兵舎の自分のベッドへ向かうと、留守番の連中がすれ違い様に声を掛けてくる。現時点でこの国に派遣されているＳＡＳは、我々のＤ戦闘中隊、そして付随する第二六四通信中隊と情報部署の一部だ。残りはパキスタンやイラク、特にカダフィ追放で目下てんやわんやのリビアに分散している。英陸軍精鋭の殆どが、この中東で身を焦がされている。本国では、テロに備えて最低限の人数が居残りを喰らっている。それでも、慢性的な人員不足から、組織運営は円滑と程遠い。選抜訓練（ＳＡＳ流のどぎつい入団試験）の基準を下げるべきとの意見もあるが、現場の猛反対で議論は平行線である。そりゃあそうだ、こっちは命が掛かってる。
寄宿先の兵舎は、最後に見た時と何ら変わっていなかった。パイプ組の粗末な二段ベッドが壁際に列を成し、リノリウムの床は所々でタイルが割れている。凝り固まった首を鳴らしつつ、自分に割り当てられた寝床へベルゲン（フレーム入りの大きな雑嚢）を放り、中身を全て取り出す。本来は倉庫として設計された兵舎に窓はなく、高い天井で今にも息絶えそうな空調が呻いている。帰投して真っ先にシャワーを浴びた連中が各々のベッドに腰掛け、寝そべって娯楽に興じる。俺のベッドの対面では、補給物資の木箱をテーブルに、カードの席が設けられていた。どうやら既にうちの末弟がやらかしたらしく、大損に金色の頭を抱えている。愚かな涙目が、物言いたげにこちらを向く。砂漠の外れに捨ててくるべきだったか？
俺のベッドの上段には、アラビア語の教科書がメモ用紙を栞に残されていた。メモを開くと、静流の如き筆記体で「お帰りなさいませ」と記されている。が、肝心の持ち主が見当たらない。年甲斐もなく、一抹の寂しさが胸を吹き抜けた。
一旦は置いた荷物を拾い上げ、正面シャッター脇のドアから戸外へ出る。時刻は正午を過ぎたばかりで、地面の反射光が眼球を刺す。イギリスでは拝めない洗濯日和だ。ブルーシートを兵舎前に広げ、その上に遠征で使ったベルゲンや裏返した寝袋、ごてごてとポーチの着い

た戦闘ベストを脱いで並べる。野郎の汗を四六時中吸ったナイロンは、誇張ではなく臭っていた。近くの蛇口にホースを取り付け、装備の汗と砂を洗い流す。どうせまたすぐに汚れてしまうのだが、路地裏のゴミみたいな臭気を撒いていたら、風下の敵に気取られる危険がある。それに、遠征の最初の数日くらいは、臭わない寝具で息を止めずに休みたい。

装備を何度かひっくり返し、隅々までずぶ濡れにする。兵舎の玄関は南向きだ。一時間もすれば、こいつらは魚の干物みたいになるだろう。最後にほつれがないか検めて、再び兵舎に戻った。

自分のベッド脇に空の木箱を置き、その上でＣ８カービンを分解する。Ｃ８は、〈コルト・カナダ〉が先発のＣ７ライフルを短縮した銃だ。米軍制式のＭ１６が原型で、五・五六×四五ミリの弾薬を使用する。誕生より五十年の歳月を経て尚も寵愛を受ける逸品ではあるが、第三世界での戦闘には向かない。確かに、高い命中精度と脅威の軽量は秀逸だ。リュングマン方式と呼ばれる発射機構は部品点数が少なく、新兵でも容易に整備出来る。だが、特殊部隊の荒っぽい用途に適しているとは言い難い。

何を隠そうこのリュングマン方式、堅実性に重きを置く軍用銃に導入されながら、汚れにめっぽう弱いのだ。第二次大戦まで主流であった、大都市部での戦闘であれば問題はない。であるが、昨今の歩兵が直面する第三世界は密林と泥濘、砂礫に覆われた風土である。特に砂漠では、部品が大小の砂粒を噛んで動作が滞り、カタログ上の性能は望めない。昨晩の襲撃でもスタンが動作不良に見舞われ、ＲＡＦの到着までずっとぶつくさ言っていた。「愛が足りないんだ」と冷笑してやったが、この遠征で俺も三度ほど動作不良に見舞われている。その都度、弾倉を外し、可動部をがちゃがちゃやるのだ。イラクやアフガニスタンとに派遣された同胞には、優先的に最新装備である〈ヘッケラー＆コッホ〉のＨＫ４１６カービンが支給されていた。個人的に好みの見てくれではないが、Ｄ中隊の玩具より頼もしいのは間違いない。うちの予算もアメリカくらい潤沢なら……と夢想したところで、かぶりを振って泣き言を霧散した。ううっ、貧乏が憎い。

分解したＣ８に製造番号とメーカーの刻印はなく、茶色で「１４」の番号が振られている。ソルベント（銃の洗浄溶剤。猛毒）で銅や鉛の残渣を浮かせ、水を張ったバケツですすぐ。表面を磨いて水気を切ったら、銃の心臓部たるボルトに、大量のドライオイルを吹き付ける。米軍のお偉方は「ボルトは常にウェットな状態に保て」と仰せになるが、これは誤りだ。通常のオイルを塗布すると、べたべたのボルトに砂が付着して、まともに動かなくなる。砂漠でなくとも、寒冷地ではオイルが凍結する恐れがある。だからこそ、我々はドライタイプのオイルを塗ったくる。それでも、動作不良が生じるのが現実だが。

砂の一粒に至るまで洗い落とし、組み直した銃を見下ろすと、感嘆に吐息が漏れた。三種の茶色で施した迷彩塗装が、過酷な労働環境で剥げている。諸所で地金が顔を覗かせ、絶妙な機微を醸す。うふ、格好いいじゃないか。

しばし仕事仲間の機能美を堪能して木箱を片付け、ベッド下から個人の荷物を収めたコンテナを引き出す。銃の次は、自分の番だ。ダイヤル錠を解除すると、中には着替えと二足目のブーツ、娯楽品やお気に入りのウィスキー等が収められている。清潔な下着と洗面用具、今着ているのと同じ戦闘スモックを取り上げ、最寄りのシャワー施設へと向かった。

連隊の仲間がうろうろする敷地を小走りに歩み、時に軽やかなスキップまで交えてシャワー施設……という名目の改造トレーラーへ接近する。砂埃にまみれた車輌の傍らには、年代物の〈日立〉の洗濯機が四台並び、「お楽しみ中」の車みたいに揺れている。空いている洗濯槽に汚れた衣類を突っ込み、無臭の洗剤と柔軟剤を投入する。周りに誰もいないのを確認してから、そっと全裸になって、下着も放り込む。文字のかき消えた起動スイッチを押し込むと、魔物の雄叫びを上げて回り出す。ジェローム辺りに今の姿が見付かると後が面倒なので、タオルで前を隠して足早にトレーラーへ駆け込んだ。

脱衣所などと気の利いたバッファーもないトレーラーは、隣のシャワーとの間仕切りさえなく、男共のすえた臭いが充満していた。ほの暗い照明の中に第一六小隊の仲間が数人いたが、互いの調子を問うく

らいで、歓談はなかった。他人に紳士的でいるには、自身に余裕がなければならない。だからこそ、日々の衛生は重要だ。文化的な集団生活の円満には、相互の懐の大きさが問われる。かりかりしているやつと話すなら、そいつが落ち着くのを待つ辛抱強さが試される。

粗末なシャワーのバルブを捻ると、壁のヘッドから三十度台の液体が弱々しく降り注ぐ。二週間振りの貴重な水だ、存分に使わせて戴こう。水が身体を伝い、汚濁が排水溝へ殺到する。どんなに身体を擦っても、流れる水が一向に透き通らない。ブーツを脱いだ途端に酸っぱい臭いが立ち昇り、思わず涙が滲む。引っ張り出したインソール（中敷き）に石鹸を擦り付け、必至で汗と雑菌を揉み出す。ウレタンの板は激務に潰れ、駆逐戦車よろしくぺたんこになっていた。兵站係に申請して、新品を貰わねばなるまい。兵士の足には、恋人のおっぱいと同等の緩衝材が必要だ。

全身の石鹸を何度も流し、何とか毛穴が息を吹き返すと、全身が擦り傷だらけなのに気付いた。他のやつもそうだが、顔と腕に美味しそうな焼き目が付いている。来世はステーキ肉にでもなろうかと妄想したが、すぐに考えを改めた。連隊での勤務より趣ある暮らしはない。それに、今生が一番いいに決まってる。

砂が抜けて軽くなった身体にボクサーショーツを履き、おろしたての緑色の肌着に袖を通すと、やっとで人心地つく。唯一の心残りは、奔放に伸びた硬い髭の処理だ。一思いに剃ってしまいたくはあるが、皮脂が失われて砂漠の乾燥に弱くなるし、アラブ人の中でアルビノみたいに目立ってしまう。美男子でない自覚はあるものの、あるよりはない方が見苦しくない。

数分前と何ら違わぬ衣服に身を包むと、頭髪に残った水分が早くも蒸発し始める。仲間の前ではひた隠していたが、期待への胸の高鳴りを覚えていた。『ブリティッシュ・グレナディアーズ』を鼻歌に折り畳みの鏡を開き、間もなく仕事を終える洗濯機を前に髭を撫で付けていると、後方から軽車輌のエンジン音が窺えた。振り向けば、光沢を消したベージュのランドローバー・ウルフが、こちらへ向かってくる。助手席側のドアの「Ｉ’ｍ　ｃｒａｚｙ　ｉｎ　ＲＩＣＥＢＡＬＬ

！」の落書きには見憶えがあった。英陸軍の多用途車輌へるんるんと近付いて車内を覗き込み、そして落胆した。――ちくしょう、乗ってない。運転手を務める、顔をバラクラバ（目出し帽）とサングラスで覆う兵士が残酷にほくそ笑んだ。

「上司がこんな腑抜けのこらえ性なしと知ったら、小隊は瓦解するでしょうね」

白い肌を隠す女兵士にむっとしつつ、俺は助手席に尻を沈める中年男性へ無言の圧力を掛けた。男は脂の乗った頬を掻きつつ、女兵士の肩を叩く。

「弟を虐めるもんじゃないぞ、ニーナ。男の三十代は、まだまだ鼻垂れの餓鬼んちょだ」

二人まとめてぶっ飛ばしてやりたかったが、浮き足立っている我が身も明らかなので、紳士らしく溜飲を下した。それに、おっぱじめたら無事では済まない。男の方――我らが一女四男の養父、及びD戦闘中隊のボス、リチャード・クラプトンは問題ない。かつてフォークランドや湾岸を戦い抜いた手練れとはいえ、もう六十路も手前の老兵。体力的に、分はこちらにある。

問題は女の方だ。黒のバラクラバとサングラスの間から、真新しい絹糸と見紛う銀色が覗いている。この女こそ、我らが親父殿の隠し玉であらせられる、ニーナ姉様である。基地で素顔を晒そうものなら餓えた野郎共の精巣が即時に破裂、そのまま死に至らしめる美貌を持ち、その胸部にEカップ（イギリス基準）の爆弾ふたつをぶら下げる、恐怖のスラヴ系姉ちゃん。何より恐怖するは、こいつがクラプトンの五人兄弟の最年長であり、我らが中隊で最高性能を誇る殺人マシンという、知る人ぞ知る事実である。兄弟四人さえ預かり知らぬ『清掃業務』を請け負っているなどと、都市伝説めいた俗言が囁かれて長い前提を鑑みれば、その力量は想像だに躊躇われる。地元のおばちゃんの噂話でしかないが、歩く男性器・ジェローム君さえ手を出さないのを見るに、安易に否定も出来ない。本能の警鐘は、いつだって正しい。

「あの子なら射撃場にいる。教えてあげるなんて、なあんて優しい父親だろう！」

ビールと米でたるんだ腹を掻きむしり、親父は意地悪く目尻を歪める。残忍な夫人がいなければ、その頬を張っていた。腹の底に湧いた憎悪を胃腸で吸収させて、苦笑で場を切り抜ける。消化不良で、生活習慣病を患いそうだ。無言できびすを返し、ＳＡＳ専用に臨時で設けられた射撃場へ向かうと、後方で中隊長の嫌がらせが敷地中に炸裂した。

「小隊長が遅い青春を謳歌するぞーっ！」

嗜虐に満ちる女の哄笑がそれに続いた。ちくしょう、事故に見せかけて葬れないだろうか。半ば本気で軽装甲の切断に要する導爆線の長さを計算しつつ、洗濯済の衣類を回収して、親父夫婦から逃げ去った。

濡れた洗濯物とブーツを収めた袋をベッドへ放り、迷彩スモックを羽織りながら兵舎を駆け出すと、新たな汗が首筋に生じた。戦闘時より打ち震える心臓に、全身の筋肉がスペック以上の瞬発力を生み出す。ひび割れた地面に何度かつまずき、片手で地を打って持ち直す。

――あいつめ、どうして真っ先に顔を見せないんだ。独善的な苛立ちが先立つも、矮小な独占欲はそれを上回る感情に脇へと追いやられた。だらしなく緩んだ髭面から、歓喜が零れる。「長かったぞ……！」

――あの子との出逢いは、もう二年前になる。出生より後ろ暗い過去を引きずり、精神を腐らせた俺は世界屈指の特殊部隊に身を置きながらも、ガラス細工に等しい神経で生き長らえていた。日常生活さえままならず、肉付きばかりは良い、歩く死体と化していた。理性的な脳を失くした男が銃を振り回しているのだから、同僚は生きた心地がしない。

次男坊の人間味の欠落に業を煮やし、父親は「性奴隷と同居」と極めて狂気的な策を講じ、息子の癌細胞除去を試みた。血で血を洗う紆余曲折を経たが、親類と戦友の支援、何よりも一人の少女が手向けた慈愛が実を結び、ヒルバート・クラプトンは自らが造った牢獄を脱した。無益な贖罪に別れを告げ、己の欠陥を認め、残りの生を謳歌する、本来なら掴み得ない選択肢へと馬鹿な俺を導いた少女こそ――。

鬱蒼たるコンクリートの森が途切れ、視界が開けた。直後、乾いた

空気をカーン、と小気味の良い音が駆け抜ける。同じ衝突音が断続的に、前方から木霊する。何処までも澄んだ空の下、目前に広がる、砂山と土嚢を積んだだけの屋外射撃場。乱雑に配置した標的の円盤が、着弾の衝撃に揺れている。

陽光に鈍く輝く真鍮薬莢が、スエードのブーツの許に散らばっている。身に纏う砂漠戦闘服の生地が大分余っており、ベージュのキャップから延びる、灰色の強いブロンドが微風にたなびく。その手に握る、我々の官給品より長いカービンの銃身が、すうと地面へ向く。背後の荒い息遣いに気付いたか、はたまた女の勘か、小さな背中が時計回りに振り向く。中東へ派遣されて三箇月。我々と同じ日焼け止めを使っているにもかかわらず、その肌は赤子同然に透き通ったままだ。眠たげな目蓋に縁取られた碧眼は、湖水地方より深い蒼をたたえている。ようやく、自分が収まるべき場所に戻った実感があった。

酷暑の射撃場にひとり佇んでいた彼女は、腕に獲物を抱えたまま、自然な微笑みを投げ掛ける。傾き始めた陽を背に、桜色の唇が柔和な音色を奏でる。

「……お帰りなさいませ」

僅かに首をかしげる少女の表情に、それまで抱いていた感情全てが抜け落ちた。ふらり、と身体が少女へと引き寄せられる。戦場に似つかわしくない、あどけなさの残る卵型の美貌へ歩み寄る。万感の思いで、自分の胸にまでしか届かぬ、小さくもかけがえない存在を抱いた。歳に不相応で、穏やかな声音が囁く。

「お疲れ様です、ヒルバート様。ご無事で何よりです」

――この少女こそがブリジット。瀕死の馬鹿野郎を絶望の淵から引きずり上げ、そいつに生きる道筋を示した、うら若き水先案内人。そして、俺にとってただ一人の恋人だ。

奴隷迎合【4】

【4】

ブリジットは弾倉二本分のライフル弾を標的に叩き込むと、足下に散らばった空薬莢を片付けて兵舎に向かった。たすき掛けしたカービンが、程良く熟れた双丘の谷間で揺れる。戦闘ベストを身に着けていないので、被服の向こうの影が容易に窺える。うーむ、罪な女だ。

兵舎への道中、半月越しの再会を喜びつつ、他愛ないお喋りに花を咲かせる。これがイギリス郊外の街並みであれば、単にかなり年の離れた男女の談笑に映るだろう。無論、ここはサウード家の庭に位置する軍事基地で、俺達はいかめしい迷彩服を着込み、傍らの恋人は〈バーバリー〉ではなく〈ナイツ・アーマメント〉を携えていた。およそ、和やかな交際風景からは掛け離れている。

そも、世間的に見れば美少女、身内からは次男坊が妻、俺個人としては可愛い奥さんとしての社会的認識しか持ち得ぬ彼女が、如何なる理由から国家の最大機密を担う特殊部隊の職場に紛れ込んでいるのか。前提として、ブリジットのイギリスでの身分は奴隷以外の何者でもなく、まして軍籍など有している訳がない。……筈なのだが、現に彼女の迷彩スモックの裾には英軍のＩＤカードがピン留めされてるし、陸軍のデータベースを参照すれば、彼女の認識番号と氏名が出てくる。『兵卒　ブリジット・クラプトン』と。いみじくも口惜しいが、この原因を蒔いたのは他ならぬ、彼女の旦那である。

時を遡上して三箇月前。我々Ｄ戦闘中隊は、本国のヒースロウ空港に駐機するＲＡＦ（英国空軍）所属のＣ―１３０輸送機の積み荷となり、サウジアラビアへ向けての航行に備えていた。第一六航空小隊の貸し切りと化した固定翼機キャビンに、機付係の手で我々の装備や食料のコンテナが整列駐車させられる。遠征の度に見る光景だが、機械めいた御業に感嘆せざるを得ない。職業病とはいえ、極限までこじらせた作業工程はモナ・リザの横に展示されても見劣りしない。

コンテナがうず高く積み上げられたキャビンへ小隊が乗り込み、各々の居住スペースを確保して――階級に関係なく、五月蝿い機材が

ない場所が取り合いになる――壁面に設けられたフックにハンモックを展開する。これで、幾分かは航行中の酷い揺れから逃れられる。俺はコンテナに囲まれた閉塞感の強い場所に追いやられたが、どうせ読書に耽るか目蓋を閉じるかなので、気にも掛けなかった。それよりすぐ近くに備え付けの電子レンジがあるので、調理係を押し付けられそうなのが気に病まれた。うやうやしく不味いレトルト食品を温めてやったところで、「美人の客室乗務員を連れてこい」と野次られるのが目に見えている。おっきいおっぱいとマイル・ハイクラブ（高度一万メーター以上での性行為）がやりたいなら、首相か外交官にでもなってくれ。

離陸前からハンモックに揺られてペーパーバックを読んでいると、機内の機器が騒々しく喚き始める。大出力のエンジン四機が暖気を始め、別のC―130が滑走路へとタキシングするのが、コクピットの風防越しに見えた。不快な空の旅を乗り切る為に、耳栓を装着して強力な睡眠導入剤を取り出した時分であった。雑多なチェックシートを留めたクリップボードを空軍中尉が、ペンの尻で上腕をつついてくる。怪訝な顔の彼の機嫌を損ねない様、大人しく耳栓を抜いてハンモックを降りる。空軍中尉は無言で、小型のヘッドセットを渡してきた。やかましい機内で会話する為の必需品だ。ヘッドセットを装着してプラグを壁面に埋設されたジャックに挿入すると、三十代と見える中尉は神妙に尋ねてきた。

「もう一人はどうした？」

――はて。最近、うちの小隊で異動などあっただろうか。指差し確認でハンモックの数を検めたが、頭数は確かに十六人いる。ジェロームをサルと見なせばヒトは十五人だが、理性的な長兄ヴェストが二人分として計上されるので、十六で数は合う。ひょっとすると、仕事が出来る中尉殿がジェロームを本当にヒトとしてカウントしていない可能性もあるが、冗談を言っている風ではない。まあ、股間を隆起させたまま〈プレイボーイ〉を顔の上にいびきをかいている輩を、自分と同族と考えたくないのは同感だが……。

「うちの連中は足りている筈です。書類に何か齟齬が？」

優秀なエアマンは、豊かな眉をひそめた。
「そんな訳がない。確かに君らの人数は合っている。陸軍兵士が十六人……ああ、所属は言わんでいいぞ、分かり切ってる。荷物の数も正しい……数字は間違っていない。足りないのは、通訳ひとりだ」
通訳ひとり。少なくとも、小隊長である俺が初耳のイレギュラーだ。遠征を前にして、数週間に渡る座学を受講したが、我々のアラブ社会に対する見識が浅い事実は否定し得ない。語学の修得具合も各人によって開きがあるし、お上が急場で専門の人員を派遣しても不思議はなかった。だが、機付長の書類に「通訳――一人」以外の記載はなく、階級どころか氏名さえもが空欄である。民間人を雇った可能性も高いが、それなら追記なりがあってしかるべきで、そもそも当事者に事前連絡がないのは大問題である。
正体不明の通訳殿の解明に、歳の近い機付長とうんむん唸っていると、視界の隅に、駐機場を駆ける小さな人影を認めた。上下に砂漠迷彩の戦闘服を着込み、見憶えのある革張りの巨大な旅行鞄を提げた人物は、真っ直ぐこちらへ向かってくる。自爆テロには見えないが、どうにも胸騒ぎがした。
きっかり五秒後、その理由が知れた。年季が入った鋼鉄のランプ（傾斜板）を勢い踏み越え、革鞄の人物が我々の輸送機に跳び込む。徽章のない深緑のベレー帽を頭に乗せ、真新しいぶかぶかの戦闘スモックを着込んだ『彼女』は俺に尻を向け、落ち着き払った調子で陸軍式の敬礼を空軍士官へ差し向けた。
「規定時刻を超過してしまい、申し訳ございません、中尉殿。当小隊の通訳を務めますブリジット・クラプトン兵卒、ただ今参りました」
頭のてっぺんから爪先まで、俺は真っ白になった。灰と化した脳味噌が、彼女をこの機の積み荷として送り込んだ人物を演算、過たず弾き出す。ちくしょう、くそ親父め。
厚底のブーツを入れても高校生くらいにしか見えぬ少女に、空軍中尉殿は面食らった様子であった。が、すぐに機械的に平静を取り繕い、書類にチェックを跳ねさせた。第一六航空小隊のプライベート機に、「小隊長の恋人」という荷物が承認された瞬間であった。

現地語の通訳という体でＳＡＳに潜り込んだブリジットであったが、そんなものはあくまでカバーストーリー、こいつが寄越された真の企図は明白である。不肖ヒルバート・クラプトンが抱える心的外傷には、完治という概念が存在しない。それ故に些事で調子が狂い、小隊長の責務を投げ出さないとも限らないのだ。取引先との商談中、重役が金星人と交信し始めたら、翌朝からそいつの部下はオフィスではなく職業安定所へ顔を出す必要に迫られる。

金星人が俺を地球最初の窓口に選ぶ可能性は限りなく低いとして、第一六小隊は『指揮官の精神的脆弱性』という、致命的なリスクを孕んでいた。正直、どうして俺が未だこの役職を負っているのか判然としない。幸か不幸か、有事に最も効果的に作用する人材が、組織外にいた。「だから呼んだのさ」親父なら、そう言ってのけるだろう。連隊長は眉こそひそめたがお咎めはなく、Ｄ中隊にブリジットは好意的に受け入れられた。少なくとも、俺は輸送機で電子レンジをチンチンやらずに済んだ。

数度の着陸と給油を経てキング・ハリド軍事都市に到着すると、彼女は本当にアラビア語の通訳として働き始めた。親父が隠れ蓑として用意したと思われていた肩書きは、偽りなく彼女の武装として機能していた。現地の欧米人よっか遙かに流暢かつ機知に富んだ語句を発し、彼女は基地で勤務するアラブ人とすぐに打ち解けた。アッラーを排斥しない・キリスト信仰を強要しない・素肌の露出が少ない通訳の存在は兵士の間で噂になり、米上層部と連隊の耳へフィードバックされた。この有能な通訳を飼い殺しにする行為は資本主義に反するとして、現地米軍将官は連隊に脅迫めいた打診を持ち掛けた。「うちの無能なボス共が中東に作った穴を、塞ぐ手伝いをしてくれないか」彼が生粋の大英帝国人であれば、こう言っただろう。「俺らの首領はいつだって間抜けだが、今度のは側近の意見も聞かねえ。ツケが回ってくるのは、いつだって現場だ。……ところで、そのお嬢ちゃんは中々優秀らしいじゃないか」で、相手から上申を引っ張り出す。少々回りくどいが、嫌味は時として気乗りしない交渉を円滑に欺騙してくれる。独立を勝ち取った米と、彼らに敗れた保守的な英。どちらの種

族が優れているかではない。互いが自陣にとって、都合の良い選択を為してきた結果だ。

さて、有能な米軍将校が経歴の不透明な英軍兵卒を、自国の愛国者に代わって重用する理由とは何か。ディープでナイーブな社会情勢が、この決定に関わっている。ニューヨークでの９・１１直後、米国はアフガンとイラクに報復戦争を仕掛けたが、見切り発車の逆襲は周辺社会に禍根を残す結果となった。テロとの戦いに息巻くアメリカは、ベトナム戦争での過ちを繰り返した。東南アジアの以上に煩雑を極めるイスラム社会の扱いを完全に誤った米国政府は、抱え込まずに済んだ筈の厄介を被った。当初は国連の支援へ期待を寄せた現地住民であったが、国連の無策振りに、彼らは早々に見切りを付けた。彼らにとって「闖入者」でしかない多国籍軍は憎悪の対象となり、次第に国内のテロリスト勢力を支持する傾向が現れる。村社会の排他主義はウィルス性の病として爆発的に感染し、無辜の民は資本主義国家へ血の贖罪を求める暴徒へ変じた。自国の平和を愛した市民は今や、芸術的に不安定な均衡を崩したアメリカへの、潜在的なテロリスト細胞を内包している。他でもなく、アメリカが不注意にばら撒いた病原菌のせいで。

ここで、アメリカの失態からイギリスの流儀へ話を移そう。アルマダ海戦でスペインの無敵艦隊を破ってからこっち、二十世紀の国家独立ブームまでイギリスが植民地大国でいられた根本には、単純かつ合理的な仕組みがあった。強大な兵力を有していれば、弱小な敵国の蹂躙は容易い。とはいえ、武力のみで数世紀に渡る栄華を維持出来るなら、現地政府は無用の存在である。戦争はあくまで領土を獲得する手段に他ならず、保護国の事後管理を怠れば、革命による政権転覆が待っている。革命の火種の早期な鎮火、或いは、そもそも保護国民に上位国家への不満を抱かせない仕組み。この情報操作めいた戦略を、英軍では『民心獲得工作』と呼ぶ。何だか無駄に格式張った聞こえだが、要は大英帝国が植民地に対して無害、かつ有益な存在であると、保護国の民に認識して戴く為の『お付き合い方法』である。げに、政治・経済は堅苦しくていけない。

民心獲得工作の段取りだが、いきなり他国の大部隊が街に展開されては、何処の国とていい気はしない。アメリカは正にこの失態を犯したのだが、英軍は歴史的にこの類の任務に熟達していた。アメリカの要請で軍を動かしたイギリス――政府は軍の派遣自体を渋っていたのだが――は、通常部隊を海上運輸する間に、ＳＡＳを含む小規模の特殊部隊を空輸した。娯楽作品の影響でどんぱちと暴言が役割とされているＳＡＳだが、強面の裏では知的な活動を展開している。第二次大戦後、東南アジアに共産ゲリラが跋扈するマラヤ連邦が存在していた時期には、密林の奥深くの小村を訪ね、栄養失調や御産に難儀する現地民を援助して良好な関係を醸成した。魔女狩り等の歴史遺産を鑑みると不可思議に映るが、西欧の変態らを森の民は手厚くもてなし、化学薬品による治療と給水設備を歓迎した。現地民と親交を重ねる内、彼らは圧政を強いるテロリストの束縛を脱し、政治犯の資金源や幹部の居所を授けてくれた。我々の先達は現地民と同じ物を口に入れ、彼らの言語で交流する事で、戦闘のみならず戦争に勝利してきたのだ。変態には、変態の強さがある。

目下のサウジアラビアはオイルマネーでインフラが整っており、そもそもマラヤ連邦とは時代が違う。よって、適用される支援の形は異なるが、健全なムスリムとしてもテロリストは身内から摘みたい芽である。我々が極めて紳士的な態度で接すると、情報は自ずと向こうからやってきた。街中に潜むテロリストが網羅されると、特殊部隊は複数の根城を同時攻撃し、都市部のゴキブリの巣を壊滅させた。これ以降、少なくとも英軍は、キング・ハリド軍事都市近辺の市街から敵意を向けられる事はなくなった。これぞイギリス流の戦争である。小難しい話は嫌いだ。

さて、ここでようやくブリジットの価値に理解が及ぶ。彼女は兵士である以前に女性であり、現地の女性の相手をする際に、反発される危険が低い。イスラム文化に対する造詣が深い事から市民の協力も得易く、簡便な諜報員としての運用が可能だ。民心獲得工作の肝要は、民衆を穏便に懐柔するところに置かれている。傀儡政府の機嫌を取るのは、時間と資産の無駄でしかない。

――と、そんなこんなでブリジットは連隊の台所を司り、基地で通訳に走り、最近では近隣の街の子供に座学を説く日々を送っている。護衛には米兵に加えて連隊からも最低ひとりを付けているが、それでも甲斐性なしの恋人としては心配だ。兵舎から一歩も出ずにいて欲しいが、彼女自身はこの生活をいたく気に入っているので、強く言えないのが実情である。正直、辛い。とは言うものの、ぼろぼろになって基地に戻れば、可愛い奥さんが夕餉を用意してくれているというのは、手放しに喜びたくはある。あの出来た嫁さんが、どうして俺に着いてきてくれたのだろう。付き合って一年半になるが、未だに真意が知れないままだ。

可愛い嫁さんと兵舎へ戻ると、第一六小隊の仲間は、殆どが各々のベッドにいた。数人は読書など個人の趣味に耽っているが、一人として活発に動いている者はいない。女の匂いを数キロ先からでも嗅ぎ付けるジェロームまでもが、茶ばんだ枕を抱いて涎を垂らしている。目蓋が半開きのまま充血しているので、軽くホラーだ。化け物は銃弾が効かないから嫌いである。

ブリジットは、起きている連中の紅茶を淹れに給湯室へ向かった。手伝いを申し出ても許して貰えないのは明白なので、手持ち無沙汰に兵舎をぶらつく。万年物資不足にあえぐ我が連隊は、宿の設備も米軍と水をあけられている。個人空間を保つカーテンのあるベッドは、数えるだけしかない。その内の一つに、クラプトン兄弟が三男、ショーンの寝床が含まれていた。やつは弟子のマシュー・ギネスと、二段ベッドを共用している。上段で眠るマシューを起こさない様、下段の白いカーテンの内を覗き込む。果たせるかな、我が弟は胸で両手を組んで寝入っていた。末っ子に比べて三男坊の寝相は大人しいが、こちらは両眼から涙を流している。何が悲しいとかではなく、このショーン君は大変優秀な狙撃手である為に、お目々を大事にしなくてはならない。枕元に置かれた目薬の容器が、頬を流れる川の正体を物語っている。昨晩はこいつとマシューの狙撃だけで、十人近い敵を片付けている。よもや、人間が歩く脳味噌とか心臓に見える領域に達しているのではないか。視界に収められたが最後、何だかよく分からない内に

脳幹をすっ飛ばされる。隣で仲間が肉塊に変わるのを見て、敵の士気はだだ下がりである。だが、ショーンという青年を誤解してはいけない。広い顎と黒い巻き毛で粗暴な印象を抱かれるが、その心は些細な事で自分を責めてしまうガラスで出来ている。決して、「むさい面に涙が似合わない」などと心ない侮言を発してはいけない。初めて付き合った女の失言で、彼の顔は半年間曇ったのだから。

三男のベッドから移動して、長兄のヴェストを訪れる。奴隷出身というのが嘘の様に、何とまあ良家の息子然とした様子で、厳かに腹部を上下させている。他の隊員と同じく髭は伸びっ放しだが、ブラウンの毛に白いものは一本もなく、小綺麗に撫で付けられて艶がある。こうも容姿端麗かつ頭脳明晰な我がお兄様であるが、女好みのする彼にも、過酷な幼少期が故に歪んでしまった部分が存在する。胞子生殖の大型菌類――俗にキノコという名で親しまれている不思議生命体に、彼は魅了されている。中でも致死毒を有する種を好んでおり、暇を見付けては分厚い図鑑を開いている。ハンサムな外見に反して実に湿っぽい趣味だが、その根源は根深い。俺と同じく、北アイルランドでＩＲＡの奴隷として暮らしていた頃、兄上は地下室に幽閉されていた。学校に通って健全な交友を持てなかった彼に、ある時初めて友達が出来る。床の隅からにょっきり生した、キノコであった。じめじめと暗い地下室で、夜な夜なキノコ――与えた名前は正しく『マッシュ』――に語りかけ、談笑していたらしい。おお、涙なくしては語れない！運命の出逢いから数日後、マッシュ君は幼い兄貴が看取る中で溶けてしまったが、それ以来ヴェストは彼らの魅力に取り憑かれ、地下室へ度々現れる同居人との暮らしに、日々の光明を見出していたとの事である。十五歳で親父に引き取られてからもキノコへの好意は変わらず、ヴェストは色々と煩わしい女性と関係を持つより、余計な口を利かないキノコとの対話に心の癒しを求めているのだ。そんな訳で、キノコの生えない乾燥した中東への派遣が決まった時は、この世の終わりみたいな目をしていた。

ヴェストが色鉛筆で綴るキノコ日記帳（閲覧自由）を眺めつつ、自分のベッドに尻を落とす。緻密に描かれたドクツルタケのイラスト

と、普段の兄貴からは想像出来ないふわふわポエムを読み進めていると、左隣のベッド下段から呻きが訊こえた。首をもたげれば、愛弟子のダニエル君が眉間に山脈を浮かべ、自分の汗が染みた枕を噛んでいる。おまけに、恋人の名を絶えず唱えている。痛ましい限りだ、見ちゃいられない。可哀想なやつ！俺もこうなっていたかもしれない！

キノコ日誌の更新分を読み終えるのと同じタイミングで、ブリジットが湯気の立つ紅茶を配り始める。起きている全員に紅茶が行き渡り、それから自分と旦那のマグカップを持って、彼女は俺の隣にちょんと腰を下ろす。安物のアールグレイの水蒸気の合間を縫い、一つ結びの御髪から女の子の匂いが立ち昇る。二週間越しの麻薬に、とろけた脳髄が鼻腔から零れそうだ。

肘が触れ合う距離で団欒しつつ、陳腐な味を誤魔化すのに大量の砂糖が沈んだ紅茶を啜る。舌根にえげつない苦みが走り、思わず吐き捨てそうになる。漢方薬の方が、まだましな味だ。中東へ来る時に持参した大量の〈フォートナム＆メイソン〉の茶葉は、到着から一週間と経たずに底をついた。小隊全体にたかられた為だ。紅茶もどきに肩を落としていると、脇から〈ＭＲＥ〉の包みが差し出される。英軍のよっかは食べられる味に改良された、米軍お馴染みの戦闘糧食だ。圧縮されたビニール包装には、「チキンシチュー」と記されていた。

「今はこんな物しかご用意出来ませんが……」

至極いたたまれぬ面持ちで、ブリジットは専用の使い捨てヒーターを手渡してくる。「こんな物」しかない環境に愛妻を置いてしまったのは、その不出来な夫が原因だ。無言で彼女の頭を掻いてやると、幾らか表情を和らげてくれた。シチューや堅いパン、クラッカーをヒーターと一緒に付属のビニール袋へ放り、少量の水を注ぐ。すぐにヒーターから蒸気が生じ、袋の内側に水滴を作る。不味い紅茶を飲み終える頃には、お手軽ランチが湯気を立てていた。

茶色っぽい包装を破り、シチューがアルミのトレーに落とされる。料理というよりは、油の固まりを食べられる様に加工した塩梅だ。樹脂製のスプーンで肉の欠片をすくい、無心で啜る。考えたら負けだ。

決して美味しくはないシチューをひた掻き込み、クラッカーにタールじみたピーナッツバターを塗り、高野豆腐みたいなパンを水に浸して飲み込む。ブリジットと暮らす事で、心的外傷から距離を置けた。が、料理上手な嫁さんは、旦那の舌を肥やしてしまったのだ。傍からは幸福な懊悩に、頭痛を覚える。俺はもう、一般的なイギリス人と同じ物を食べられないのだ。

トレー上のカロリーを胃に収め、ＭＲＥの粉末ココアをブリジットから受け取る。水から淹れたココアだ、牛乳なんか入っちゃいない。薄いカカオ汁を飲み終えると、疲労と満腹感から、睡魔が脊髄を撫ぜる。示し合わせた様にブリジットは食器を片付け、ベッドシーツを正した。周囲を見渡すと、起きているの隊員は自分だけであった。

「少し、お休みになられるのが宜しいかと。無理がお顔に出ています」

「そうする」

促されるまま、ブーツを脱いでマットレスに身を横たえる。スモックをブリジットが器用に脱がして畳み、その手が俺の掌を包んだ。周りが寝入っているからこそ、許される行為だ。砂漠でさえしっとりと潤った温かさに、殺人で尖った神経がほだされる。

「今は何も考えずにお眠り下さい。雑務でしたら、私が処理しますので」

ぼやけ始めた視界の角に穏やかな笑みを捉え、目蓋を下ろす。まどろみの奥底に落ち込むまで、ひび割れた手に優しさが残っていた。

奴隷迎合【5】

【5】

まだ疲労の残る身を、喧噪が覚醒させる。焦点も定まらない眼で腕時計を見れば、眠りに落ちてから三時間も経っていない。陽はまだ、水平線に重なっている。数台のフォークリフトが、荷物の運搬に右往左往している。他のベッドでも、騒ぎに仲間が起き出していた。ブーツを履いて、早々に身支度を整えていたヴェストに駆け寄る。

「何があった」

兄貴は神妙にかぶりを振った。

「分からん。警戒の命令がない辺り、基地が襲撃を受けている訳ではないらしいが」

誰かを情報収集へ遣ろうと思考を巡らせたその時、D中隊付准尉のティモシー・ベックが、シャッターの下りていない玄関口に現れた。この顔面の青白い男が用件を持ってくる時は、決まって俺の白髪が増える。

「すぐに中隊を集めて会議室へ向かえ。緊急ブリーフィング（要旨説明）だ」

「航空小隊もか？休養中だぞ」

「中隊全員だ。急げ」

俺が呼集を掛けるまでもなく、各自が兵舎から建造物群へと勢い駆け出した。二四時間は傷んだ身体を労る予定が、完全に狂ってしまった。二段ベッドの上段で、ブリジットが不安げに眉を下げている。

「心配しなさんな。どうせ大事にはなるまいよ」

そうは言ってみせたものの、どうも支援部隊のざわめきが常軌を逸している。女性の勘は侮れないもので、ブリジットに誤魔化しは利いていなかった。話術の拙い我が身を呪い、心細げに見送る彼女へ背を向け、兵舎を後にした。

無味乾燥な廊下が戦闘服の砂色に埋め尽くされ、男の激流が横に折れて一室へなだれ込む。ＳＡＳに用意された最寄りの会議室には、歪んだパイプ椅子が敷き詰められていた。奥の壁にくたびれたスク

リーンが垂れ、床の中央に〈ソニー〉のプロジェクターが鎮座している。各々が勝手に席を選んで座り、ダニエルが俺の左に腰を下ろす。急な召集に、皆ざわついていた。　四方の隊員と情報を交換するも、収穫はなかった。「何か聞いたか？」「いいや。お前は？」不毛なやり取りが、部屋中で為されていた。ざわめきを縫ってクラプトン少佐――親父が仕事の面構えで入室し、スクリーン脇の演壇に上がった。少佐に続いて濃紺のベレーを被る将校と、背広の中年男性が入室する。ベレーの色からして、気取った雰囲気の将校はＲＡＦ所属だろう。背広の男は、首に掛かるＩＤを見ずとも知れる。所属は分かる。外務省の諜報機関――ＳＩＳ（旧ＭＩ６）だ。イギリス国外の有事に際して、軍人でもないくせに連隊を手駒としてこき使う、鼻持ちならない集団である。大概が血色悪く幸薄い顔の人間で構成されていて、特筆される身体的特徴がない。たまに我々の現場へ着いてきては厄介を持ち込む、駄目なキャリアの典型がうようよいる。

　ＲＡＦ将校と背広が二言三言交わすと、部屋の照明が落とされた。プロジェクターが起動し、スクリーンに〈ウィンドウズ〉のデスクトップ画面が青く輝く。少佐は演壇から静まった会議室を軽く見渡すと、鼻息を漏らして口火を切った。

「Ｄ戦闘中隊諸君、貴重な休養を妨げてしまって申し訳ない。だが、君ら以外に動かせる部隊が残っていないのだ」

『リチャード・クラプトン』からは決して出てこない言葉に、噴き出すのを懸命にこらえる。右後ろから、鼻水が噴射する音が聴こえた。おおよそ、ジェロームだろう。初期設定のマウスポインターがスクリーンを走り、あるＰＤＦファイル上をダブルクリックした。数秒の読み込みを経て、黒い海と貨物船を俯瞰した衛星写真が映る。

「今回集まって貰った理由はこいつ……現在ペルシャ湾を航行している、イラン国籍の貨物船だ。この船舶はサウジアラビアのダンマーム港へ進路を取っており、数時間中に到着する予定だ」

　件の貨物船はかなりの大型で、原油タンカーにも見える。大量に積んでいるコンテナには、錆が浮いていた。

　一仕事を終えた少佐が会釈をすると、スクリーン脇に座していた眼

鏡の背広が立ち上がった。
「外務省のモリーだ、憶えなくても結構。この貨物船だが、名目上は薬や穀物を運んでいる。だが、詳細な目録を持つ者は現状皆無であり、担当業者とも連絡が取れていない。積荷が仮に良からぬものだとして、それがアラビア半島の何者かに渡るのは好ましくない。諸君らには、ダンマーム港にて停泊する当該船舶を偵察、平行して船荷の調査を実行して貰う。万一船員に発見され、彼らが攻撃意志を有していた場合には、反撃を許可する。
悪天候から貨物船の運航自体が遅れている為に、時刻は追って連絡をする。私からは以上だ」
訊いてもいない偽の自己紹介を脳内ミキサーで裁断しつつ、抑揚のない台詞から必要な情報の選別に掛かった。要はこうだ。俺らはサウジの港に飛んでいって、それから正体の知れないお船をガサ入れする。敵がいたら殺す。業務内容は、可及的単純に構成すべきだ。
背広眼鏡が元の椅子に戻ると、ＲＡＦ将校が憮然と立ち上がり、その口に蓄えた豊かな髭をさする。制服は糊が効いており、航空機乗りを生業にしている空気は窺えない。紛う事なきデスク組だ。深い色味のブロンドの下で、冷たい瞳が妖しく光っている。身分こそお偉方だが、まるでハイエナだ。身の丈一八〇センチの死肉食らいが、静かに口を開く。
「本作戦で諸君らの航空支援にあたる、ブレナン中将だ。我々はピューマ・ヘリコプター二機、それとリーパー無人偵察機を供与する。
作戦手順の説明に移る。第一段階では、停泊中の貨物船へ夜間の内に少数のＳＡＳ隊員が海上から接近、船室と船倉の捜査を行う。可能であれば、不審なコンテナをこじ開けてもいい。潜入中、大規模な戦闘が発生する事態に陥ったら、増援を乗せたピューマと車輌が貨物船へ急行、船舶を奪取する。
穏便に調査が済めば、その結果を作戦本部が査定する。積荷に危険性が認められた場合は、作戦を第二段階に移行させる。翌朝に貨物船から積荷が運び出される前に、強襲を仕掛けて船倉を制圧するのが目的だ。この際も、船員の攻撃を受けた場合に限り、反撃を許可する

第一段階においては、我々のピューマは非常事態以外には地面から離れない。そうなる事を祈る」
暗に「仕事を増やすな」と、連隊に釘を刺してきやがった。職業軍人らしからぬ言動に、今朝のチヌークの機付長が想起される。彼には組織・階級の隔壁を越えて、兵士としての敬意を示せた。あのハイエナは、部下の犠牲で行き永らえているに過ぎない。冷徹な双眸からは、現場の兵士を使い捨てる魂胆しか見えてこない。
ブレナン中将が腰を下ろすと、演台のクラプトン少佐はスクリーンに港の衛星写真を投影した。
「君達は、大きく三つの部隊に分けられる。第一に、船舶付近を監視する偵察部隊。第二に、海上から貨物船に潜入する部隊。これには二人が割り当てられる。残りはヘリと車輌による待機部隊に配置される。車輌部隊にあてがわれた者の待機場所は、現時点で二つ。ここと、ここだ」
少佐が赤色のレーザーポインターで、二つの建物をなぞる。
「待機部隊は何れかの部署から要請があれば、現地へ急行する。以上が本件の次第だ。第二段階に関しては、その時に再びブリーフィングを行う。詳細についての質疑は受け付けない。何しろ、こちらも言及した情報が全てで、それ以外は何も判明していない。敵対意思の有無、武装の程度さえも不明だ。事前情報で満足な支援は提供出来ないが、状況の開始後は総出で君達を支援するつもりだ。その点は保証する。
以上でブリーフィングを終了する。今から一時間後に、諸君を乗せたC―130が発つ。それまでに、小隊間での連携を確認を済ませて欲しい。各自、準備に取り掛かってくれ」
厳かに締めると、少佐とキャリア組はそそくさと会議室を退出した。直後に隊員全員がざわめきつつ、会議室のドアに殺到して、各々の装備の点検に走った。若い連中は戦意に満ち溢れていたが、俺の背中にぴったりと付いた舎弟が、不信を募らせていた。
「良い予感がしないんですが」
「大丈夫だ、分かってる」

肩にのし掛かる、恐らくはダニエルのそれより重い懸念に苛まれつつ、兵舎へと早足に戻る。首筋を、焦燥が痺れとなって噛み付く。まともな事前情報が不足する軍事作戦に、吉兆を見出せる道理があるものか。

連隊の戦闘員と兵站係でごった返す兵舎へ戻り、自分のベッド下から荷物を引っ張り出す。苦楽を共にしたＣ８カービンと、鋭利に研いだ〈クリス・リーヴ〉のナイフ。乾かし終えた戦闘ベストに、〈ブラックホーク〉のグローブと、ゴムの臭いがきついＳＦ１２レスピレーター（ガスマスクの英軍での呼称）を、樹脂製のカラビナでぶら下げる。土嚢みたいに重いセラミックの抗弾プレートをベストの前後に挿入し、胸のポーチに弾倉をこれでもかと詰める。通信機が正常に機能するかを確かめると、ショーンの携帯通信機がバッテリー切れに瀕していたので、すぐに交換した。狙撃手という性質上、彼は状況報告にしょっちゅう電波を飛ばさなければならない。ただの歩兵でよかった。さもなければ、ストレスで今頃はバーコードだ。

紀元前より幾度も世代を経て改修が為された、鋼鉄とナイロンの武装を纏う。昔の戦士は幅広の両刃剣とべこべこのバックラーを構え、大人数で団子になって敵陣へ切り込んだ。現代における彼らの末裔は、個人で五ミリの鋼板を穿つ突破力を有している。

黒煙を上げる頭脳に装備のチェックリストを生成させ、項目毎に設けたチェックボックスを赤ペンで引っ掻く。武器弾薬、よし。装備品、よし。長時間待機になった際の本、よし。〈トワイニング〉の紅茶葉、なし。チョコレートと飴ちゃん、よし。睡眠薬、よし。処方されている抗不安剤、こいつは持てるだけ。うん、よし。

荷物を詰め込んだたベルゲンを担ぎ、滑走路へと向かうマイクロバスへ歩みを進める。雑多な装備を要するショーンの脇を通る時に、凄く物騒な玩具が視界に入った。英陸軍制式狙撃銃――Ｌ１１８Ａ１。以前に地方議員のマーティン・アボット邸への襲撃で、俺が使用した狙撃銃の化け物バリアントだ。マーティン邸で警備員の心臓を抉ったのは、ＮＡＴＯでお馴染みの七・六二×五一ミリ弾であった。足許のこいつは違う。七・六二ミリよりもでかく・重く・極めて破壊力の

高い、完全に生物を破壊する目的で開発された、ラプア・マグナム弾を撃ち出すプロ仕様だ。こいつで撃たれるテロリストは、即死するだけまだ幸運だ。すぐ傍で人間が風船みたいに破裂する光景を目の当たりにして、発狂しないやつがいるとは到底思えない。

ポータブルＤＶＤプレイヤーとポルノ映画のディスクをベルゲンに押し込む愚弟のベッドを過ぎると、早々に支度を終えていたヴェストの背中が見えた。基本的な荷物は俺と変わらないが、小脇にヴァイオリンが入るくらいのケースを抱えている。彼は衛生担当として負傷者の応急処置にあたるので、大仰な救急キットを担いで走らなければならない。そうなると大きい銃は扱い辛いので、Ｃ８よりずっと小振りな〈ヘッケラー＆コッホ〉のＭＰ７Ａ２を現場で使用する。

兵舎を出ると、頭の隅へ追いやっていた疑念が襲い来る。これまでも全貌の見えない作戦はあったが、今回のそれは別次元だ。船荷を穏便に調査するのが目的なら、現地警察や多国籍軍を動かして堂々とやればいい。わざわざ特殊部隊を動員して、こっそりやる必要性など思い付かないのだ。しかも、休養中の第一六航空小隊まで使って。

英軍兵士が運転を受け持つマイクロバスは、既に座席が埋まっていた。仕方なく中央の通路でポールを掴んでいると、発進直前で一人の兵站係が滑り込んでくる。その腕に、真新しいベルゲンが抱えられていた。

「滑走路手前のヘリパッド（ヘリポート）で降ろしてくれ。届け物なんだ」

兵站係の要請に運転手は頷き、今度こそバスのドアが閉められる。一体、誰の荷物だろうか。

滑走路に近付くにつれて、同乗する隊員の昂ぶりが窺えた。反して、彼らを率いる我が身には焦燥ばかりが募る。お上の話が不透明なのは、作戦の前提に限らない。連隊が動く作戦に際しては、事前の情報は事細かに用意されるのが常だ。作戦を行う理由・攻撃目標の見取図・使用する火器の指定・予想される敵兵力と所属・現地の民間人の有無・気温と湿度……。こちらに寄越されたのは、「他国が所有する貨物船へ潜入し、大量の船荷から危険物を発見しろ」との命令だけだ。

その危険物が具体的にどういった危険性を孕んでいて、それがＮＢＣ兵器（核・生物・化学兵器の総称）なのか、横流しされたミサイルなのか、或いは極秘裏に製造された新兵器かも知らされていない。我々に霞を掴んでこいと言うのか？てんでお門違いだ、一休を呼べ。連隊に、お偉方のとんち大会に付き合うだけの余裕はない。時間も、おつむも。

全容が見えない任務への不安と格闘する内に、バスが鋼鉄の巨獣が待つ滑走路に到着してしまった。前方のヘリパッドで、ピューマの風防が妖しく輝く。二機のピューマは実働部隊に先立ち、リチャード・クラプトン中隊長を筆頭とした司令部・電子装備を作戦地まで運ぶ。少し離れた別のヘリパッドでは、英陸軍のリンクス観測ヘリコプターが大人しく駐機している。更に彼方には、Ｃ―１３０ハーキュリーズ輸送機の影が確認された。ヘリパッドを通り抜ける途中、例の兵站係が降車する。彼がピューマへ駆け出すとバスは再発進し、三六〇〇メーターある滑走路の脇を走り出した。

輸送機に横付けする形でバスが停車し、十数名の兵士が滑走路へ放たれた。ほぼ同時、先に通り過ぎたヘリパッドから、三機のヘリが轟音と砂嵐を伴って離陸する。息をのむ間に、黒い影が夕暮れの中へ消えてゆく。――なあ、親父。この作戦には、裏があるんじゃないか。Ｃ―１３０の風防越しに空軍の方々へ会釈しつつ、機付長にベルゲンを渡して適切な位置に積んで貰う。座席の取り払われた機内に、各々がハンモックや寝袋を展開し始めた。何もする事がない待機時間は、さっさと寝てしまうに限る。陽光の遮られたキャビン内で、腕時計の文字盤が微弱な光を放つ。離陸まで、まだ時間がある。〈シュアファイア〉の耳栓をはめ、睡眠薬を飲み込む。ついでに向精神薬――セロトニン再吸収阻害剤も服用して、寝袋に潜り込んだ。さっさとこの不安から逃れなければ。

奴隷迎合【6―1】

【6】

港に駐車したレンジローバーの車内は狭苦しく、清掃されていない空調も相まって、仲間の呼気で空気が籠もっていた。人気の失せた深夜一時とはいえ、物々しい戦闘装備の異邦人が衆目につくのはまずい。秘匿性を保つ為に、スモークフィルムを貼ったウィンドウは下ろせない。それに、この国の夜は酷く冷える。海際であれば、ひとしおだ。

もう何度目になるやも知れないが、膝の上の銃に点検の手を入れる。〈マグプル〉の樹脂製の弾倉は、ちゃんと挿入されている。〈レディマグ〉に取り付けた、追加の弾倉も同様だ。軽く振っても、部品同士の衝突音は立たない。それでは、喉にまとわり付くこの不穏な感情は何だ。こめかみを拳で押していると、左手からチョコレートバーの包みが差し出される。

「そろそろ、糖分が不足しているかと」

肩が触れるほどの距離で、フル装備のブリジットが微笑んでいた。お前だよ、不安材料！

さあて、どういった了見でこの小さな兵隊さんは我々『エコー・ワン』の攻撃車輌に同乗しておはしますのか。果たせるかな、やはりそこには彼女の姑たる、リチャード・クラプトンが一枚噛んでいた。

たかだか六百キロの空の旅は、一時間ほどで終わってしまった。瞬く間のフライトで夢を見る間もなくダニーに揺り起こされ、空港の滑走路へ降り立つ。水平線の向こうで、陽が沈みかけていた。現地の陸軍士官の誘導で使用されていない倉庫へと移動し、そこで作戦に使用する車輌を受け取った。防弾処理済のレンジローバー二台と、就役から八十年余りの重機関銃を載せたランドローバーが二台。これ程に強力な武装を目の当たりにしても、心臓を小突かれる様な不快感が続いていた。

そこに頭痛までもが加わった。我々に先んじて到着していた作戦本部に、見慣れた不審人物が紛れていた。小さな影は我々と同じ砂漠

戦闘服を着て、真新しいベルゲンを背負っている。そいつは俺を見付けるなり、一つ結びにした髪を揺らして駆け寄ってきた。「道中、何もお変わりありませんか？」なんて、気を遣ってきやがる。たった今お変わりだよ！

ただならぬ眩暈を覚え、携帯電話を取って親父を呼び出す。ワンコールが終わる前に繋がった通話に、語気荒く問いただした。

「どういう事だこの野郎」

〈追加で派遣した衛生兵だ。嬉しいだろ？〉

嬉しくねえよ、ばあか！問い詰めれば、ブリジットの強い希望に応じたとの弁だが、それならそれで引き止めて戴きたい。見れば確かに、彼女の上腕には赤十字の腕章があった。戦闘用の迷彩服に着けては、何の意味も為さないのに。そして、身幅より大きな背嚢を負ぶった彼女は、邪気のない微笑で手を振っていた。これで怒る気が七割失せるのだから、つくづく救いようがない。残る三割は、戦闘ベストに忍ばせたドライジンで揉み消した。どうも、クラプトンの男共は美女に弱い。

で、そのまま倉庫内に設けた即席司令部に残っていてくれればいいものを、こいつは我々の極秘作戦にまで着いてきたのだ。流石に少しは説教を垂れたが、本気になれないのが明け透けであり、彼女の何処まで本気なのか知れない意志を殺ぐには至らなかった。作戦行動には一切関与しないという事を前提に、部下も何も言わない。何てこった。

そういった経緯で、ブリジットはこの黒塗りのレンジローバーに我々と同乗している。何が「一切関与しない」だ。渦中に入っておいて、よくも言う。メンタルの脆弱な旦那の不安を知ってか知らずでか——魔性の女だから、分かってやっているんだが——彼女はサイズの合わないヘルメットの下で微笑んでいた。遊びじゃないんだよ、全く。

愛妻を危険な環境に置く不甲斐なさに、ため息をひとつ漏らす。快適性を根こそぎ取り払った車中には、楽しい玩具が詰まっている。ブリジット・クラプトン衛生兵が偽りなく持参した医療品・大量の発煙

筒・ボルトカッターと各種手榴弾。そして室内への突入に使用する多種多様の成形爆薬。順当に潜入調査が進むのであれば、こんな大荷物は要らない。大概の者が、この作戦を楽な仕事と軽んじていた。であるからこそ、尚更に疑念を抱く。――何かが異様だ。お気楽なブリジットが邪魔だとか、そういう問題だけではない。この任務自体に、不穏な気配を覚えずにはいられなかった。

中東に着いてからこっち、嫁さんに関しての心労は募るばかりだ。気を抜けば、肺で渦巻くストレスが顔中から漏れてしまう。緊張を殺しきれなかったのか、作戦中だというのに感傷に浸っていた。――なあ、マーク。どうしてこの場にいてくれないんだ。

マーク・ラッセル・ペイジとは、我々クラプトン四兄弟がＳＡＳ加入直後に派遣された、イラクで知り合った。俺より四つ年上のマークはネブラスカ出身で、口を開けば妻の事ばかり話すグリーンベレー（米陸軍特殊部隊群）であった。

その性質は温厚の一言で表され、逞しくも爽快で優れた容姿には、巻き毛の濃いブロンドがよく映えた。現在は三歳になったばかりの娘を溺愛しているが、最近になってグリーンベレーを除隊したとの報せが入った。娘の為にも安全な職を求めたのかと考えたが、どうもそうではないらしい。どうやら妻がイギリス人で、その実家近くに越してくるらしい。しかも当人は軍籍を捨てた訳ではなく、何とそのままＳＡＳに入隊するつもりらしい。ＳＡＳにも所帯持ちは少なくないが、まさかやつ程の家庭教信者でも、軍属を抜け出せないとは。この狂気の依存性こそが、特殊部隊から染み出る蜜の甘味を物語っている。

マークは我々兄弟の属するＤ戦闘中隊に編入される運びであったのだが、神様は意地悪を為される。彼が引っ越しやアメリカでの残務に奔走する間に、『アラブの春』が吹き荒れた。俺は二人目の兄の到着を待たずして、ベビーブームよろしく四方八方で爆発が起こるアラビア半島へと空輸された。妻という、最愛のお荷物を抱えて――。止せよ、胃がねじ切れちまうぞ。

車内のスモークガラスに呵々大笑するマークを思い描くと、脳味噌

が急激に萎む錯覚に陥った。グリーンベレーを除隊する直前、やつはＣＩＦ中隊にいた。ＣＩＦは精鋭集団のグリーンベレーでも、トップの精鋭を集めた究極の戦闘集団だ。米陸軍の最高峰に足を掛けていた男であるからして、その実力は安易に言表出来るものではない。その第二の兄貴分が、今ここにはいない。心労から、目頭を揉まずにいられなかった。

埠頭に詰まれた貨物コンテナの影に車を駐めて、一時間が経過していた。尿気を招く為に、不安を紛らわせる紅茶も飲めない。月明かりだけの夜間とはいえ、目標たる全長二百メーターに満たない小型貨物船から、三百メーターと離れていないのだ。小便を理由にこちらの存在が露見するくらいなら、このまま車内で漏らす。

何度目かの嘆息を口の中で殺し、煩わしい焦燥とつばぜり合いを続ける。〇一三〇時に、埠頭をボートで発った潜入班が、貨物船への乗り込みを開始する。予定時刻まで、七分と二十三秒ある。洪水みたいな冷汗が下着を濡らし、密閉された股間で蒸気が上がる。天津のせいろから湯気が溢れる様に、俺のトラウザスから毒ガスが吹き出した。運転席と助手席に座るパーシーとデイヴは、削れ落ちた心労の臭いにむせ返り、無辜の同乗人であるダニーの放屁だと嘲った。不当な糾弾を受けているにもかかわらず、愛する舎弟は口をつぐんで堪え忍んだ。実に良い弟分に育ってくれたものだ。

点眼液を両眼に注して、ぐうと眼球を押さえる。ヘッドセットの下の左耳に、不明瞭な音声が吐き出される。

〈オクトパスより全部署へ。右舷のケツに着いた。いつでも乗船可能だ〉

海上からの潜入を担当する『オクトパス』の報告が、波音と共に届けられた。

〈シエラ・ワン、船首側に動きはない〉

〈シエラ・ツー、船尾も異常なし〉

狙撃手を兼ねた偵察班――ショーンとマシューが、船上の警戒に高倍率の目を光らせている。

〈アルファより全部署へ。作戦を開始しろ〉

二十四時間前に砂漠で聞いたのと同じ、女声の命令が寄越される。この声の主だが、実はショーンの現恋人である。

〈オクトパス、乗船を開始する〉

いよいよだ。ここからは見えなくとも、潜入班の二人の動きが目蓋の裏で鮮明に描けた。ワイヤー製の縄梯子を貨物船の縁に引っ掛け、足裏にワイヤーが食い込む痛みを堪え忍んで、ゆっくりと船上に這い上がる。舟艇小隊はいつだって、冷たい海で歯を打ち鳴らす羽目を喰う。河童めいた黒いドライスーツで船内へひたひた侵入し、何らかの反社会的な物的証拠を押さえれば、潜入班の業務は終了である。ちょっと忍び込んで、写真を撮影するだけ。その最中に何者かの目についたとしても、彼らは対処法を熟知している。餓鬼のお使いめいた作業に、何を不穏に感じる必要があるのか。

〈オクトパス、乗船完了。船上のコンテナから調査する〉

ＳＡＳでの仕事は、これで何度目だ？夜間に襲撃を仕掛けて、それが想定外の展開に運ばれた前例は、今まで幾つある？被害の大小はあれ、今までこうしてやって来られた。何も心配は要らない。

〈一つ目のコンテナを解錠した〉

潜入班が貨物船に乗り込んだ理由は、殴り込みではない。単なる捜査だ。穏便に済めば、誰も傷付かずに事が終わる。現に、潜入班は彼らの仕事を進めている。食品に偽装された武器弾薬、或いは麻薬の類が見付かれば、それでほぼ終わり。証拠を握って、またひっそりと現場を後にする。我々も一旦撤収し、態勢を整え、薄明と同時に貨物船を襲撃する。押収品は、きっと通常部隊や米軍が処理してくれる。長く見積もっても、正午までには基地へ帰れるだろう。上手くいかない筈がない。

「この分だと、一時間もしないで帰れそうだな」

パーシーがレスピレーター（ガスマスク）を脇に放り、ハンドルに顎を預けた。すっかり一つ目のコンテナで不審物が発見されると、甘い見通しを立てている。緊急事態に車を走らせるのはこいつなので、正直なところ緩まないで欲しい。直帰するのに異論はないが。

車内で自分以外が緊張を和らげたその時、潜入班から入った通信は

意図しないものであった。
〈オクトパスより全部署へ。一つ目のコンテナは空だ〉
その言葉に、デイヴが大袈裟な落胆を示す。
〈無線口に愚痴りたくはないがね、特別手当は出るんだろうな――〉
無線と現実世界で、夜のしじまを割く破裂音が響き渡る。
〈全部署へ通達、船上で銃声！繰り返す、船上で銃声だ！〉
にわかに通信の波が押し寄せ、指示とがなり声が方々から飛び交う。全景が把握出来ていないとはいえ、懸念が現のものとなってしまった。
「車を出せ！」
面喰っているパーシーの座席を蹴り、すぐに車を発進させる。重装備のレンジローバーが低い唸りを上げ、コンテナの陰を飛び出した車体が貨物船へ猛進する。船上で赤白い光が瞬き、銃弾が我々のいる埠頭へ降り注ぐ。その一部が、エコー・ワンのレンジローバーの装甲を叩く。
「待機部隊は貨物船へ突入しろ！シエラ、状況報告！」
胸に装着したＰＴＴスイッチを押し込むも、偵察班の返答はない。助手席のデイヴはレスピレーターを慌てて装着し、ウィンドウを下ろしてフラッシュバン（特殊閃光音響弾）を前方へ投げる。化学反応の炸裂が起きると同時、ショーンが無線を寄越した。
〈シエラ・ワンより全部署へ！シエラ・ツーが負傷、貨物船から猛攻を受けている！〉
「冗談じゃねえぞ！」
罵声を撒いたパーシーが、ハンドルに顔を叩き付けた。フロントガラスが一瞬で白く染まり、運転席の辺りが丸く穿たれている。助手席のデイヴが操舵を取り戻そうと、ハンドルへ手を伸ばす。車体が左右に振れ、慣性に振り回された乗員が重力から引き離される。銃弾を受けるフロントガラスは更に白く濁り、視界が失われる。デイヴは開いているウィンドウから頭を突き出し、それから身震いしたかと思えば、だらりと窓枠に首を預けて脱力した。
制御を失ったレンジローバーはスリップし、正面からコンテナに衝

突した。クラクションが鳴り渡り、エアバッグの作動が聞こえた。額を前の座席に打ち付けた所為で、目の前が真っ暗で星が散っていた。調子の狂った四肢でドアを手探りしていると、腕を左へと引っ張られる。
「おい、ダニーか？無事か？……ブリジットは？」
車内から引きずり下ろされて数秒が経つと、網膜がおぼろげな像を結び始めた。俺の腕を引いていたのは、ブリジットだった。
「ダニエルさんはご無事です。少々、出血されていますが」
先に車内から這い出ていたダニーは衝突の影響が小さかったらしく、既に戦闘態勢を整えて、コンテナを遮蔽に貨物船へ警戒を投げていた。搦坐したエコー・ワンは敵の関心から外れ、もう一台のレンジローバー――エコー・ツーへ火力が集中している。打ち付けた頭を押さえると、額から出血していた。ブリジットが散乱する車内から医療バッグを取り出して、傷の具合を診てくれた。
「……縫う程ではない様ですね」
「俺の傷はいいから、パーシーとデイブを診てくれ」
小隊長の指示に、ダニーが視線を貨物船へ固定したまま首を振る。
「逝っちまったよ」
舎弟の言葉に、血の気が引いた。助手席のデイヴは最後に見た時と同じく、頭部を車外へ放り出していた。彼の顔に張り付いたレスピレーターを引き剥がし、そして元に戻した。デイブの顔面は鼻の部分から崩壊し、頭骨の破片が後頭部から飛び出していた。大口径弾の貫通銃創による、即死だ。奥歯を噛み締めて運転席に回り、パーシーの容体を確認する。我々の運転手は、萎んだエアバッグに突っ伏していた。上半身を起こすと、やかましいクラクションが止んだ。胸の中心におぞましい射入口が穿たれ、背中の抗弾プレートに弾丸が食い込んでいる。邪悪に変形した鉄塊は、対人間を想定していない口径であった窺い知れる。パーシーとデイブは死んだ。自分が死んだと気付く間もなく、最後まで連隊を守って散った。
「こちらエコー・ワン、二人やられた。敵は対物ライフルか、或いは重機関銃を装備している。防弾ガラスを抜かれるぞ」

デイブが最期の根性で運転を制御したお陰で、我々はうずたかく積み上げたコンテナの後ろに位置していた。遮蔽には事欠かないが、コンテナ群が邪魔で射界が狭い。ややもすると、スタックしたレンジローバーから燃料が漏れて、炎上する可能性もあった。ダニーを引き続き周囲の警戒に当たらせ、ブリジットと俺で爆発物を車内から取り出した。これで爆死の危険性はぐっと落ちたが、予断を許さない動勢に変わりはない。

間断ない発砲を割いて一際鋭い音の波が鼓膜を打つ。直後に〈一名負傷〉の報告がエコー・スリー――ヴェストの分隊から為された。奇襲による優位は、元より存在しなかった。我々の行動は、端から敵に筒抜けであった。

〈アルファより全部署へ。ロメオが偽装された重機関銃を確認。オメガがそちらへ向かった〉

ロメオは高空を旋回するリーパー無人偵察機、オメガは二機のピューマ・ヘリに割り当てられたコールサインだ。だが、作戦本部からの通信で背筋に悪寒が走る。

「ヘリを下がらせろ！」

〈こちらオメガ・ワン。心配するな、もう大丈夫だ〉

程なくして、聞き慣れた力強いローター音が飛来する。平生であれば、こうまで信頼の寄せられる代物はない。

〈敵影多数、吹っ飛ばせ！〉

ヘリ機長の勇ましい通信音声を皮切りに、四門のミニガンから猛獣の咆哮が吐き出される。一秒あたり百発射出される曳光弾が、赤い鞭となって貨物船の上甲板を襲った。船上からの発砲が途切れ、テロ支援集団の阿鼻叫喚が沸き起こる。頭上から降り注ぐ空薬莢が、スタックしたレンジローバーの屋根を叩いた。ダニエルが左腕を振り上げて、オメガに鼓舞を掛けていた。

「いいぞ、やっちまえ！」

〈ミサイル警報！〉

全てが一瞬であった。白煙の尾を曳いた飛翔体が、船尾から緩いカーブを描いて片方のヘリを追尾し、その脇腹へ勢い喰らい付く。舟

艇小隊のを載せたヘリは爆轟と共に火の玉へと変じ、空中で舵を失って錐揉みを始めた。炎の塊は見る間に高度を下げてコンテナにぶつかり、我々から数十メーター離れた地面に墜落した。テイルローターが落下の衝撃でねじくれ、機内は化学燃料の引火で溶鉱炉と化していた。ブリジットが医療バッグを抱えてそちらへ駆け出そうとしたが、ダニエルがその肩を掴む。墜落地点まで遮蔽物はなく、燃え盛る惨状から這い出る人影もなかった。無線では、陸軍の観測ヘリがＳＡＭ（地対空ミサイル）によるオメガ・ワンの墜落を繰り返していた。

業火の熱波が押し寄せるコンテナの陰で、俺達は完全に足止めを喰っていた。空の支援は、無人偵察機を除いて撤退した。低空の見張りがいなくなった為に、敵の銃火が息を吹き返す。やつらは我々を全滅させるつもりだ。

〈アルファより全部署へ。負傷した隊員を回収、即刻撤退せよ〉

作戦本部の指令はもっともだが、如何せん俺達エコー・ワンは現在地に釘付けにされていた。貨物船との距離は五十メーターと離れておらず、墜落したヘリが明かりとなって、こちらの動きはだだ漏れだ。対して敵は定点カメラの如く構えて、孤立した我々を高所から撃ち下ろすだけでいい。圧倒的優位を握られていた。車輌の撃破と同時に、エコー・ワンの存在がやつらの認識から外れた点だけが、唯一の救いであった。

「ダニー、車は使えそうか？」

救命の義務に駆られるブリジットをなだめすかす舎弟は、黒い目を伏せた。

「車体にもでかいのを貰ってます。まともに走らないでしょう」

この弾幕の中、死体を連れて遮蔽のない埠頭を走るのは自殺行為だ。おまけに重機関銃から身を守るとなれば、歩兵戦闘車並の装甲が必要となる。空からの脱出は断たれている。籠城戦をやるには兵力が足りないし、こちらは爆発物を一発食らうだけで全滅する。そこへ持ってきて銃こそ持っているが、非戦闘員であるブリジットまで抱えている。一触即発の危機的状況だ。

「こちらエコー・ワン、貨物船の付近で身動きが取れない。新しい車輌

を手配してくれ」
　燃え盛るヘリの墜落地点に、ダニエルが発煙手榴弾を投げやる。数秒後に白煙が灰色の缶から噴出し始めると、赤光を覆い隠す煙幕が展開された。
「死傷者も含めて五人を運べる車輛を――」
〈全部署へ次ぐ。撤退は許可出来ない。繰り返す、撤退は中止だ〉
　声は女声――ショーンの恋人たる、シェスカ・エヴァンズのものではなかった。毒蛇のように冷たく、人の気を感じさせぬ物言いの男声。記憶が確かであれば、ブリーフィングの時のＲＡＦ将官、ブレナンの口から出た音であった。そんな馬鹿な命令があるか。
「お言葉ですが、現時点で四名の死傷と、ヘリ一機の墜落が認められています。潜入班を即刻回収、速やかに戦闘区域を離脱するべきです」
　煙幕の粉塵に咳込みつつ、現場のあずかり知らぬところで指揮権限を強奪したブレナンに無線越しで詰め寄る。
〈敵の重機関銃の無力化を確認した。狙撃と車載機銃の掩護の下、貨物船を制圧せよ。撤退は認めない。貨物船の敵対勢力を無力化せよ。尚、ＮＢＣ兵器の存在が考慮される以上、ロメオによる空爆は不可能だ〉
　一方的に無線を切断されると、にわかに全通信網が静まった。隊員毎に脳の巧拙はあるが、誰もが一つの答えに絶望した。この作戦の操舵輪は、とうに失われている。
　アドレナリンが鎮火し、代わって底なしの疲労が血管へ押し寄せた。視界が不明瞭にぼやけ、視野も狭まった感がある。偵察機からの支援はなく、潜入班の脱出後に貨物船にロケットを撃ち込むプランＢもない。敵の武装の程度も不明。分かっているのは、少なくとも卓越した特殊部隊を消し炭にするだけの装備と気勢が、やっこさんにはある事だけだ。「楽な仕事」は、歩兵大隊をぶつけるべき局勢を呈している。傍らには、武器ばかりがでかいお荷物が一つ。ブリジットは、カービンを胸に抱いて唇を結んでいる。熟考の猶予は残されていなかった。
「……エコー・ワンより全部署へ。貨物船への突入を試みる」

ダニエルが目を剥いて振り向いた。普段は従順な猟犬が、合理を違えた上司へ反抗の意を示している。
「エコー・ツー、そちらのレンジローバーは動けるか？」
〈被弾はしていないが、どうする気だ？〉
野蛮の裏に潜めた、ジェロームの知性的な物言いが返ってくる。海風で、先の煙幕が散りかけていた。
「墜落現場にスモークを焚いている。俺達のレンジローバーは、重機関銃に撃破されて動けない。『通訳』を回収して、後方へ離脱させてくれ」
通信を繋いだまま、追加の発煙手榴弾を転がす。パーシーとデイヴの戦闘ベストから装備を抜き取り、ダニエルと分配する。装備を適切な場所に収め終える頃には、濃密な煙幕が再生していた。
「それから、こちらの分隊に応援を寄越してくれ。貨物船への突入に、二人では心許ない」
〈了解、三十秒待て〉
ジェロームとの通信を終えると、今度はショーンへ向けて確認を取る。
「エコー・ワンよりシエラ・ワンへ。状況は？」
〈シエラ・ワン、あと十秒で第二狙撃地点へ到達する〉
それでは意味がない。
「駄目だ。ブリーフィングで決めた場所は忘れろ。以後、狙撃地点の座標を口外するな」
生煮えの事前計画とはいえ、奇襲がこうも裏目に出る偶然は考え難い。情報が漏洩している蓋然性の否定材料もない。それに、これ以上監視の眼を潰されるのは避けたい。
〈シエラ・ワン、別の位置に着いた。狙撃支援を開始する〉
ショーンの通信とタイミングを一に、コンテナの合間を縫ってジェローム隊のレンジローバーが駆け付けた。コンテナに擦って塗装の剥げた後部座席から、ジェローム本人が飛び降りる。入れ替わりにブリジットの背中を押すと、衛生兵は強かに首を振った。
「状況が変わったんだ、大人しく避難しろ！」

逼迫した現状を目の当たりにして尚、ブリジットは嫌々を止めない。ジェロームの分隊から、退避の催促が叫ばれる。レンジローバーのフロントガラスを、小銃弾が連打した。彼女がこの場に留まっている限り、俺は動きが取れない。上から制圧の命が出ている以上、取り得る選択肢は一つだった。演算装置が限界を訴える身で、俺は恋人の肩を掴んだ。潤んだ瞳に何を秘めているのか、理性が失せて獣に移行しつつある脳では、理解に至れなかった。

「よく聞け、ブリジット。連隊はあのくそ船を黙らせなきゃならない。現場の指揮を執るやつが必要なんだ。お前を連れていく訳にも、ここに残してもいけない。……分かってくれるね？」

何かにつけて主人を優先させてきたブリジットが、双眸に大粒の涙を溜めていた。整った下唇が、無念に噛み締められていた。

「……心配するな、ちゃあんと帰るから。お前は後方で、やばくなってる負傷者を助けてくれ。お前にしか託せない仕事だ」

「早くしてくれ！」

跳弾で屋根に火花を散らすレンジローバーから、オスカー・ライトの悲痛な要求が叫ばれる。今一度ブリジットの小さな背中を押すと、後ろ髪を引かれながらも、恋人は車輌に乗り込んでくれた。――それでいい。文句は任務の後で、幾らでも聞いてやる。

戦線後方から五十口径の支援を受けて、ブリジットを護送するレンジローバーは走り去った。可能であればパーシーとデイヴの遺体も載せたかったが、敵の火勢をがそれを許す筈もなかった。二人の骸をそっと地面に横たえ、蒼白な目蓋を下ろしてやる。僅かに残した道徳心が、それを機になりを潜めた。やつらを壊滅させるには、ヒトではいられない。

奴隷迎合【6―2】

　最大の案件は解決していないが、ブリジットの後送は幾ばくかの復調をもたらした。味方も敵の不意打ちから持ち直した様で、後方から四門の車載機銃が敵の攻勢を削っている。貨物船へ飛びゆく無数の曳光弾が、濃藍の空を引き裂く。制圧射撃は助かるが、敵戦力の実情が不明な現実に変わりはない。差し当たっては、迅速な上甲板の制圧が先立つ目標となる。

「水分を補給しろ。しばらくは休めない」

「あのどんぱちの真っ只中に行くってのか？」

　小隊長の正気を疑うダニエルが、目を白黒させた。とうにスイッチを切り替えていたジェロームは落ち着き払い、無言でレスピレーターを装面する。

「現実逃避するのは勝手だが、冷静に考えろ。敵の反応から、連隊の奇襲が事前に察知されていたのは確実だ。だのに損害を顧みず、あの空軍中将は俺らに特攻を仰せだ」

「……臭うよな？」

　ジェロームのレスピレーターのレンズが、ぎらりと輝く。三十年も女々しい性質を続けていると、否応なく女の勘というのが身に付く。そこに加えて、ジェロームが野生由来の蟲の報せでお墨付きをくれた。一度は冷め切った肉体に、アドレナリンの第二波が火を灯した。

「エコー・ワンより全部署へ告ぐ。ブリーフィングの内容は忘れろ。動ける者は、片っ端から貨物船に殴り込め」

　ＰＴＴスイッチから手を離し、携帯電話で親父を呼び出す。

「おい親父、作戦指揮のトップにくそ将校が置かれた理由は後で問い詰めるとして、一つだけ教えてくれ」

　顔こそ見えないが、電話口で苦悶する息遣いが悟られた。

「……この状況は想定内か？」

　重い沈黙の後に、クラプトン少佐は言葉をひねり出した。

〈全く以て想定外だ。貨物船に戦闘員がいたとしても、十人にも満たないというのがお上の弁だった。対空ミサイルまで積んでいるとは、

誰も思い至らなかったんだ〉
「それだけ聞ければ十分だよ、ありがとう」
十中八九、この作戦の不手際を理由に、親父は何らかの責任をなすり付けられる。その理不尽が分かり切っているからこそ、今の親父に不要な謝罪の暇を与えてはならない。携帯電話を仕舞い、士気の落ちている舎弟の脇を掴む。
「立てよ兄弟。一番槍の使命を果たすぞ」
気落ちするダニーのヘルメットに、映像記録用のカメラを取り付ける。託された任務がある以上、こいつはもう逃げられない。
「シエラ・ワン、船上の様子は？」
〈甲板からの攻撃は収まってきた。だが、ブリッジ（艦橋）付近で動きがある……。やつら、港に降りて後方部隊を攻撃するつもりだ。俺だけじゃ手に負えない、狙撃に応援を寄越してくれ〉
シエラ・ツーのマシューが戦闘不能に陥った今や、偵察の重荷全てがショーンに課せられていた。
「了解。ゴルフ・チームは狙撃手を一人手配、接近する敵の排除に当たれ」
〈アルファよりエコー・ワンへ。本作戦において、貴殿に小隊レベル以上の権限は付与されていない。各部署への増援は、こちらで編成が終わり次第――〉
「え、何ですって？すみません、通信状況が！」
見え透いた演技で、全体無線の周波数を切り替える。ジェロームが窮地に似つかわしからぬ、にやけた面を向ける。
「士官失格だねえ」
「お前の兄ちゃんだからな」
話の通じないお上が作戦を牛耳るのはしょっちゅうだが、さりとて戦況を目視しているのは現場の兵士である。大概の文句には付き合ってやるものの、刻一刻と変わる戦場では、無益な議論に割く一秒が惜しい。兵士は観覧席の将軍より、現場の指揮官の選択を重んじる。使えない堅物と不毛に殴り合う必要はない。その為に、我々は緊急の周波数を設定していた。後で大目玉を喰らうのは必至だが、体裁

に構っていられる状況ではない。
　十数秒もすると、盟約に従って連隊の兵士が新しい通信チャンネルに入ってくる。
〈ゴルフより全部署へ。狙撃要員を二名配置した。座標の開示が出来ない為、同士討ちに留意せよ〉
〈ゴルフ、支援に感謝する〉
　お上を通信から締め出す判断が功を奏し、ショーンは生き長らえた。この程度の小細工が通じる道理はないが、我々の通信担当もやり手だ。手練手管で時間稼ぎを行い、ブレナンを我々から遠ざけてくれるだろう。各部署の態勢が整う頃合いを見計らい、潜入班へ連絡を飛ばす。
「オクトパス、被害状況を報告しろ。オクトパス？」
　応答はなかった。現実的に考えて、捕虜に取られたとは考え難い。怨敵の見えざる手に、御し難い怒りがこみ上げる。
　ＳＡＭの脅威から、観測ヘリによる低空偵察は失われた。戦闘の主導権は変わらず、正体不明の敵勢力が有している。この不利を打破するには、第一に船上へ吶喊して上部構造を制圧、ブリッジの無力化が不可欠だ。頭数の減少による戦力の弱化は、少数部隊による機動で補う他にない。
「こちらエコー・ワン。船尾のタラップより、上甲板へ突入する。掩護してくれ」
　各部署からの応答を確認すると、ジェロームが背中にたすき掛けした殺戮兵器を構えた。
「尖兵は任せな」
　その手に握る〈ベネリ〉を前に、反論は無意味であった。
　先頭からジェローム、俺、腹を据えざるを得なかったダニーと並ぶ縦列
　を作り、〈ダイソン〉の小型掃除機に似た機材を取り上げる。
「ちくしょう、さっさと帰るぞ……俺は帰るんだからな」
　半ばやけくそのダニーをなだめ、ジェロームの肩越しにダイソンもどき――〈ダネル〉のＭＧＬ―１４０グレネードランチャー（擲弾筒）

を構えた。目標までの距離を小型の測距儀で設定し、船尾のタラップへ六発の擲弾を投射する。直径四十ミリの円筒が緩やかな放物線を描き、船上のコンテナにぶつかって弾ける。射出した弾頭は、殺傷目的の榴弾ではない。暴徒鎮圧に使用される、CS(催涙)ガス弾だ。上甲板から粘膜を苛む霧が立ちこめ、アラビア語の罵声が上がった。

「エコー・ワンより全部署へ。船上に催涙ガスを展開した。これより突入する」

〈エコー・ワン、了解。ゴルフ・ツーが船首側を担当する。船尾を攻略せよ〉

聞き慣れた女性――シェスカ・エヴァンズが、我々の通信網に戻ってきた。どうにかして作戦本部を抜け出し、余っている衛生通信機を調達したのだろう。

俺の合図を待たずして、切り込み役のジェロームが駆け出す。ダニエルと俺がそれに続き、貨物船との五十メーターを詰める。錆び付いたタラップの階段に到達すると、船首側でもCSガス弾の炸裂が立て続けに起きた。ゴルフ・ツーの、ブリッジ攻略に先立っての制圧射撃だ。タラップの段を幾つも飛ばして跳ね上がり、エコー・ワンは白煙の充満する敵陣へ踏み込んだ。

上甲板に上がるや、袖口や裾から侵入するCSガスが皮膚を焼く。銃に装着したライトを頼りに、濡れた船上を音なく移動する。まず取り掛かるのは、狙撃手の死角に潜む敵の排除だ。前方のコンテナの陰から、化学物質に咳き込む男がふらりと現れる。片手には自動小銃。そいつは海中へ逃れようと、船縁の手摺りにを手探りしていた。男の手が手摺りに触れたところに、ジェロームのベネリが火を噴く。至近距離でショットガンの挨拶を浴びた頭から、毛糸の帽子が海へと落ちる。追撃を掛けて、生死を確かめるまでもない。文字通り、男は頭部の上半分をもぎ取られていた。うちの四男坊の精確な射撃に、痛みを覚える暇もなかっただろう。くそ野郎が、一人死んだ。

たった一発を皮切りに、敵の優勢に綻びが生じた。ガスに巻かれて嘔吐する敵を、ジェロームが片っ端から処理する。甲高い発砲音とオレンジの煌めきがほとばしり、ならず者の側頭部がべこりと抉れる。

オイルで濡れた甲板が、別の赤い粘りを帯びる。頭蓋の骨片が足下に散らばり、あらゆる構造物にピンクの脳がへばり付いていた。六発目の散弾が発射される。ショットガンの弾切れでジェロームが最後尾に移動し、俺が交代で先頭に立つ。ガスが薄まった船上を照らす光芒の先、赤黒い染みの付着したコンテナの陰に、何かが転がっている。銃口を向けて近付くと、不快に目許が引きつった。舟艇小隊から選別された、オクトパスの二人だ。ドライスーツに包まれた骸は冷え切っており、土気色の唇を伝う血が固まっている。脇に放られたＭＰ７に、発砲の形跡は見られなかった。

「こちらエコー・ワン。船尾でオクトパスを発見した。二人とも死んでる」

作戦本部は淡々と、潜入班の死亡を復唱した。背後のダニエルにか感情の揺らぎが窺えた。だが、作戦行動に差し障りのあるレベルではない。どの道、これ以上の欠員を許容する余地はない。後で遺体を回収する為、目印に黄色のサイリュウムを残して、戦友の脇を抜けた。

船首側のブリッジからも、ショットガンの怒号が響く。ひと度崩れた形勢は、容易くは戻らない。それに、連隊は敵に情けを手向けない。ショットガンへ再装填するジェロームを背後に、船内と甲板を隔てる水密扉のハンドルに手を掛けた。分厚い丸窓の奥の廊下では、薄暗い裸電球が転々と灯る。廊下の左右には、船員の個室が規則的に設けられている。ジェロームの装填完了が告げられ、俺は水密扉のハンドルを捻った。

「エコー・ワン、貨物船内部へ進入した」

事後報告を簡潔に済ませ、個室を一つずつ調べていく。人員が三人に限られている為に、作業速度は芳しくはなかった。装備も限られている故、個室一つひとつにフラッシュバンを使ってもいられない。安全を確保した部屋には、目印として緑のサイリュウムを床に残す。六つの個室全てに敵はいなかったが、これが幸と映るほど、楽観出来る状況ではない。

個室の並ぶ廊下の奥に下り階段があり、ショットガンを構えるジェロームを再び先頭に、ライトを消してそろりと船の深部へ進む。上方

では尚も銃声が轟くが、下層は不気味なまでに静まり返っている。不衛生な臭いの籠もった階段先はほの暗く、老朽化した壁から青緑の塗料が剥げていた。

配線が剥き出しの通路を抜き足に、入り組んだ船室を確保する。船員の気配は窺えず、トイレやキッチンまで調べるも、敵の姿はなかった。我々三人が訝しみ始めた頃に、ゴルフ・ツーがブリッジ、船の上部構造を制圧した報告が為された。彼らが接触・射殺した敵は十二人で、エコー・ワンが射殺した数と合わせると、二十弱となる。貨物船の規模からして、乗員がそれで全部だとしても納得はいく。反して、それ以上としても何ら不思議はない。事実、ジェロームは先天的な導きから、更なる敵の存在を確信している。ここまで用意周到に我々に泡を食わせ、あまつさえヘリまで墜とした連中が、これで終わりとは考え難い。それに、上層部欲する積荷の目録も見付かっていない。

全体へ状況を中継しつつ、下へ下へと潜ってゆく。ゴミや衣服が散乱する船内は、正しく迷路に等しかった。本来あってしかるべき見取図が事前に用意されていれば、要らぬ苦労だ。労して船倉へ繋がる水密扉を我々は発見し、ゴルフ・ツーがその反対側の扉へ到達するのを待つ。CSガスや汗を吸った肌着が、不快な感触を生んでいる。股間の汗の蒸散に苦心していると、ヘッドセットのスピーカーをショーンが震わせた。

〈ヒルバート、その……〉

秘匿性を破って名指ししてきた弟は、煮え切らない口振りであった。

〈……いや、やっぱり気にしないでくれ〉

わざわざ呼び出しておきながら無理難題仰せだがあるが、今はそれどころではない。ショーンの通信からきっかり十秒後、ゴルフ・ツーが船倉への突入準備を完了した報せが寄越される。通信越しに、隊員の怒りが頂点を迎えるのが察せられた。

船倉と通路を隔てる水密扉に窓はなく、内部の構造は窺えない。鉄扉を挟んだ向こうで敵が待ち伏せを仕掛ける確率は、ほぼ一二〇パーセント。俺がテロリスト側でも、ここで頭数を削る判断を下す。水密

扉のハンドルに手を掛け、ドアの軋むロックを解除する。あと少し腕に力を入れれば、鉄扉がヒンジに従って外開きになる。
「エコー・ワンよりゴルフ・ツーへ。合図で扉を開ける。フラッシュバンを惜しむな。三……二……」
レスピレーターの内側を、粘ついた呼気が満たした。
「一……開け！」
叫びつつ、左脚を軸に鋼鉄の扉をドア枠から引き剥がす。全力で引っ張った扉の先に、雑多な船荷を積んだ船倉が視界を満たす。左右の壁を金網足場が走り、船倉を横切って渡された一本が、壁の二本を結んでいる。俯瞰するとHの形を描く足場は腰丈の手摺りがあるだけで、足を踏み外せば、五メーター下の床に叩き付けられる。対角線を結んだ先に、俺と同じく水密扉を引くゴルフ・ツーが確認出来た。
ドア枠に隙間が生じるや、ダニエルが手にしたフラッシュバンを放り込み、ジェロームが船倉へ躍り込む。間髪入れずにダニエルも武器を構え直し、大音響に乗じてドア枠をくぐった。二人に続いて船倉へ押し入り、踏面の狭い階段を駆け下りる彼らの掩護に銃口を巡らせる。ゴルフ・ツーが開いた扉の真下で、フラッシュバンに網膜と鼓膜を殴られた敵が身悶えている。照準器に敵の胸部を捉え、引き鉄を引き絞る。が、突然足下から火の手が上がり、狙いを外した銃弾は標的の額に風穴を空けた。発火の原因は、突入時のフラッシュバンにあった。マグネシウムの燃焼が床の油に引火して、俺の足下でボヤが生じていた。まだ階段の途中にいたダニーが尻を焼かれ、素っ頓狂な悲鳴を発する。難燃性の被服でなければ、大火傷を負っていた。
上方から敵の位置を報せる為、俺は足場から降りずにジェロームとダニーの支援に当たった。炸薬と炎で白黒の煙が渦巻き、有毒の気体が船倉を満たす。戦闘狂と化したジェロームが狼狽するテロリストを冷徹に屠り、ライトを明滅させながらブリッジ方面へ突き進む。フラッシュバンが空間を打ち震わせ、巨大な密室を混沌の支配下に置いた。爆風で照明が割れ、揺らめく炎が隊員の黒い影を内壁に投影する。叫び喘いでいるのは、犯罪者だけだ。これが、スペシャル・エア・サービスにちょっかいを掛けた愚者の末路である。

フラッシュバンの直接被害を免れた敵がコンテナの陰から自動小銃を突き出すも、特殊部隊が放つ小銃弾に、続々と顎を撃ち砕かれる。軽量な五・五六ミリ弾とはいえ、たかが数十メーターで狙点がずれては困る。俺が射出した二発の弾丸は、狂いなく敵の顎関節とこめかみを撃ち抜いた。小口径高速弾に倒れた敵へジェロームとダニエルが止めを刺し、高低差で地の利を得た我々は、行く先に塞がる敵を着実に仕留めていった。

閉所での強襲が実現し、足場からの情景は狐狩りの如く映った。狩猟との相違があるとすれば、娯楽性が復讐の憤怒にすげ替えられている点だ。我々の仲間は、敵の処刑を粛々と遂行している。表面上は、職務に徹している様にも取れる。されど、ベテランの隊員は知っている。同胞の死後、彼らの胸の内で行き場を失った憤懣は、仲間との傷の舐め合いでしか昇華しない。我々が恐れるのは、凶弾による自らの死ではない。身内の犠牲が心苦しいからこそ激情の手綱を握り締め、彼らの敵を排除するのだ。

サプレッサー着きの銃身から音速を超える弾頭が飛翔し、不安定なジャイロ運動を帯びた飛翔体が敵を殺傷する。皮下組織は勿論、砕けた肋骨さえもが対象の筋細胞・臓器を抉る。断片化（フラグメンテーション）によって著しく破砕した弾頭は、その一つひとつがガラス片の様に体組織を切り刻む。心臓や肺が損傷すれば、酸素を含む血液が脳まで到達しなくなる。諸説あるが、人間は体内の三十パーセントの血液を失うと、俗に言うショック死の危機に陥る。大量失血は即時に恒常性へ深刻に影響し、見当識障害で夢現の境も知れぬまま脳死する。吸血鬼殺しの手法は、現代の人間にも通用するのだ。

兵力が底をついたのか、船体中央に近付くにつれて、敵の攻撃が目に見えて衰えてきた。残党は戦術的な機動を捨てて一つに固まり、我々を寄せ付けまいと闇雲に連射を放つ。弾幕を張るにしても、効果範囲を見誤っている。遂に船体中央でゴルフ・ツーの面々と合流する頃には、敵は僅かに四人が残るばかりであった。残敵は一様に浅黒い肌の中東、或いは中央アジアの生まれで、その内の一人は絶えず嗚咽を漏らし、大便失禁を催していた。他に残敵がいないか見渡し、俺も

船倉へ下りる。
「エコー・ワンより全部署へ。一旦、攻撃を控えろ。この騒ぎのあらましを知る為に、捕虜を取りたい」
一秒と要さず、シェスカは拿捕の権限を考える間もなく寄越してくれた。捕虜に取るなら、情報を持っていそうなやつを選びたい。遮蔽物越しに、各々の人相を窺うと、グレーの作業帽を被った男が最も有望であった。ＡＫ―７４を極端に短縮した『クリンコフ』を持ち、落ちくぼんだ皺だらけの目許には他の三人にない、確固たる抵抗の意志が残っている。訓練された立ち回りと頻繁な指示を見る限り、そいつが現時点で最も指導者に近い立場だ。
こちらの視線に気付いた暫定指導者が、クリンコフで掃射を仕掛けてきた。遮蔽にしたコンテナを小口径弾が叩き、弾片がそこかしこに散る。ＰＴＴスイッチを握り込み、敵の拿捕に備えて呼吸を整えた。
「総員、敵は残り四人だ。一人だけ、作業帽でクリンコフを装備したやつがいる。そいつは殺すな」
〈了解。フラッシュバンの残りは？〉
ゴルフ・ツーの指揮を務める、舟艇小隊の隊長が尋ねた。
「俺が一個持っているだけだ」
〈こっちはゼロ。タイミングは任せる〉
舟艇小隊からのゴーサインが出た。胸のポーチに収めた最後のフラッシュバンを握り、安全ピンを抜き捨てる。全身の筋肉を集中させ、予定された動作をイメージする。自分の中で全てが整う感触を掴み、無線のスイッチを押し込む。
「投擲する」
紙屑を放る要領で、目くらましが手から離れる。空中で安全レバーが弾け飛び、本体が敵の潜むコンテナの裏へ落下する。一弾指の間の後に、暴力的な白光がテロリストを呑み込む。ゴルフ・ツーから二人の舟艇隊員が敵へ接近し、数発の弾丸を差し向ける。ダニエルが遮蔽から大きく身を乗り出し、壁に張り付いた敵へ速射を食らわせる。着弾の度に首を揺さ振った男は、血の帯を壁に引いてくずおれた。
「ボス、今だ！」

ダニエルの合図で床を蹴り、標的との距離を一気に詰める。数メーターを駆けた勢いをそのまま拳に乗せ、耳孔から血を流す男の顎を殴打する。男が反射的に引き鉄を絞る前に、銃を持つ腕を捻り上げて射線を反らす。クリンコフがすぐ目の前で火を噴き、戦闘服越しに発射ガスが髪を焼いた。残弾を撃ち尽くしたタイミングで股間を蹴り上げると、テロリストは激痛に身を折った。下がった頭に膝で回し蹴りを打ち込み、怯んだ隙に腰の捻りでクリンコフをもぎ取る。複数箇所への連撃に喘ぐ男への追撃に、バットに見立てた床尾を振り抜く。木製の床尾が男の左肩をいい角度で直撃すると、肉の奥から骨の砕ける音が漏れた。うつぶせに倒れた両腕をねじり上げ、樹脂製の手錠を二重に掛ける。一本は手首、もう一本は肘の辺りをぎりぎりまで締め上げる。折れた肩を無理くり引っ張ったせいで、男は落涙ながらに英語で罵倒してきた。F爆弾の連呼ではなく、まっとうな教育を受けた人間と思しき言い回しであった。――大当たりだ。

船倉の制圧が本部へ通達されると、上層にいた仲間が押し寄せて安全確保を行い、死体全てに宵越しの鉛弾を喰らわせた。多様な姿で横たわる死体の数を計上すると、船倉だけで実に十三の骸が作られていた。甲板とブリッジの人数を合わせると、親父の得ていた情報とは食い違いも甚だしい。

死体の中に重要人物はおらず、アジア系、中東系、アフリカ系と人種が混在していた。船倉の敵が装備していた火器は何れもAKファミリーで、破片手榴弾がポケットから出てきた者もいた。遮蔽物が充実していながら使ってこなかった点を考えるに、積み荷の誘爆を恐れたのやも知れない。ともすれば、大量破壊兵器の存在も真実味を増す。フラッシュバンで誘爆が起きなかったのは、不幸中の幸いであった。

フラッシュバンで生じた火を消火し、連隊の面々はレスピレーターを脱ぎ去った。ペットボトルの水を息継ぎなしに飲み干すと、人心地がついた。戦闘が終わり、アドレナリン分解後の抗い難い疲労が肩にのしかかる。船室を走査して殺し忘れがないか再確認し、ゴルフ・ツーと我々エコー・ワンは積み荷の調査に取り掛かった。こういう時

こそ、ジェローム君は役に立つ。末弟が「これ！」と、玩具店に来た子供みたいに、数あるコンテナから一つを指差す。それを合図に、我々はボルトカッターやハリガンツール（消防用の多目的破壊器具）を振りかざす。扉の隙間にハリガンツールの刃が食い込み、ボルトカッターで南京錠が破壊され、缶詰よろしくコンテナがこじ開けられる。開扉と共に、埃と古い木材の臭いが漂う。中身を照らすと、親しみ深い深緑色の鉄の箱と、長い直方体の木箱が多数積まれていた。傍らで、ジェロームが鼻高々に胸を張る。はいはい凄いよ、わんこちゃん。木箱の中身を検分すると、予想通りにＲＰＧ―７（ソ連製対戦車擲弾発射機）の弾頭と、その発射筒が詰め込まれていた。成る程、誘爆が怖い訳だ。一同が次のコンテナへとガサ入れに取りかかったタイミングで、作戦本部が無線を寄越した。

〈全隊、至急帰投せよ。繰り返す。Ｄ戦闘中隊は即刻、作戦本部へ帰投せよ〉

何者かに言わされた感のあるシェスカの伝令が切れると、仲間同士で顔を見合わせる光景が広がった。「どういう訳だ」「積み荷の調査はどうなる」「うちの兵站部門が引き継ぐのかも」「どうでもいい。早く仲間を弔おう」様々な疑念と憶測が飛び交い、皆が当惑を示していた。ダニエルは唇を噛んで得心のいかぬ面持ちであったし、実は兄弟でずば抜けて高いＩＱを誇るジェロームが、悩み過ぎて締まりある美男子の顔になっている。よくない流れだ。どうにか表面上は平静を装い、手を打ち鳴らして仲間に傾注させる。

「お局様がそう仰るんだ、四の五の言わずに戻れい」

各自、思うところはあるだろう。しかし小隊長が帰ると言うのだから、思案を巡らせるのは別の部署に任せればいい。そうやって関心の方向を反らしてやる事で部隊は作業を中止し、敵の死体と危険物を捨て置いて足早にデッキ側の階段を上がった。連行される捕虜が何か言いたげだったが、口を粘着テープで封じているので、うんこをひり出す声にしか聞こえなかった。

仲間の背中を見送り、自分も本部へと歩もうとした折であった。最後まで付き従って残ったダニーが、消え入りそうな声で呼び止めてき

た。
「ヒルバートさんは、その……今回の件について、何も聞いてないんですよね……」
根が真面目なダニエル・パーソンズ伍長は、お気楽突撃馬鹿が納得する命令を、考えるだけ無駄というを道理を鵜呑みに出来なかった。そういう感情にほだされやすい部分が可愛いやつだが、若い内から懊悩しがちなのは心配である。
「……敵が二十人以上いるとか、ＳＡＭを装備していると知っていたら、端っから歩兵大隊をぶつけろと、お上に掛け合っていたさ。この作戦は、最初から潜入調査なんか予定しちゃいなかった。うちの親父もあずかり知らない、連隊の外で誰かが手ぐすねを引いている……。奥底では、誰もがそう思っている筈だ。不安なのは、お前だけじゃない」
舎弟の肩をぽんと叩き、今度こそ帰路へ就く。数秒遅れて、ダニエルが後を着いてきた。

腕時計の針が、午前二時を回っていた。足下を銃のライトで照らして埠頭へ降りると、異様な光景を目の当たりにした。先に船を降りていたＳＡＳとは別に、我々と同じ砂漠戦闘服の集団が、貨物船へ大挙して向かってくる。その数、およそ五十人。それだけの人員が、今の今まで火力支援もせず、実働部隊に存在さえ知らされていなかった。誰も戦闘ベストを装備しておらず、手には英軍制式ライフルのＳＡ８０を携えている。我々同じ陸軍らしき団体は、船体中央のタラップから続々と貨物船へ乗り込む。我々と、入れ違いの形で。その被服に、部隊章は確認出来なかった。
「ヒルバートさん、やっぱりこれ変ですよ。だって……」
愛弟子の言葉を黙殺し、平静を装って歩き続ける。貨物船から三百メーター離れたところで、怯えを露わにするダニーへ耳打ちした。
「今回の作戦に関する話は、クラプトンの血筋にだけ言え。絶対に他のやつらとの会話に出しちゃ駄目だ。いいな？」
珍しく鬼気迫る上司を前に、ダニーはこくこくと首肯する。余計に

不安を煽った罪滅ぼしに、そっと肩を抱いてやった。
「もしかすると、かなりやばい動きがあるのかもな」
舎弟は無言で頷き、何もなかった様に元の歩調で着いてきた。大事な子分を惑わせる不穏分子の存在に、ふつふつと怒りが再燃し始めていた。
大分先を歩く仲間の背中を追う最中、数時間中に得た情報と文字列が、頭の中を駆け巡っていた。ダンマーム港。貨物船。穀物。ブレナン空軍中将。パーシーとデイヴ。武器の密輸。大量破壊兵器……。にわかに視界から白と黒以外の色が抜け落ち、軽い目眩を覚えた。これを見逃してくれなかったダニエルが肩を貸し、不甲斐ない上司を立ち直らせた。
「身内だけで十人は死んだんだ。あんたも早く休まないと……」
情けない返事に喉を震わせようとし、それに示し合わせたかの如く、携帯電話が振動した。空いている手で確認すると、ショーンの名前が液晶に浮かぶ。厭な予感がした。通話ボタンを押し込むと、ショーンは先と同じ声音であった。
「どうした、今から本部へ戻るんだが」
〈ああ、その、何だ。さっき言いかけた事なんだが……〉
船倉に突入する直前のやつだ。
「悪いけど、帰ってからにしてくれ。頭がもうぐちゃぐちゃなんだ」
〈俺はまだ狙撃地点にいる。それに、ブリジットに関する用事だ〉
恋人の名で、心臓の活動が急速に促進された。
「……無事なのか？まさか、流れ弾でも受けたんじゃ？」
思わず声が裏返った。電話を握る手に脂汗が滲み、背筋が総毛立つ。
〈いや、彼女は元気だ。怪我もない。だから落ち着いて、今から言う場所に来てくれ〉
ブリジットが五体満足と聞いて、安堵に胃の空気が鼻腔を抜けた。それだけでお花畑になっていた俺を余所に、ショーンが語を継ぐ。
〈そこから右手に、ガントリークレーンが見えるな？北に百五十メーター進め〉

「こっちが見えているのか？迎えに来てくれりゃあいいのに。夜中に狙撃手を見付けるのは骨が折れるぞ」
〈出来ればダニーも一緒に来い。余り時間は取りたくない。ライトは点けるな〉
俺の不平に応じる素振りもなく、電話は切られた。公共機関の受付みたいだ。ダニエルに目で意見を求めたが、怪訝に肩をすくめるのみであった。
月明かりの下、殆どダニエルに寄り掛かって指定された地点に到達すると、狙撃銃を抱えるショーンが物陰から顔を覗かせた。付近のコンテナのに、狙撃で使った折り畳みの梯子が立て掛けられている。立派に狙撃兵の職務を全うした弟は、混迷に淀んだ面持ちであった。
「それで、本部じゃ話せない話ってのは？」
ショーンは逡巡すると、着いてくる様に手振りで促した。その背をダニエルを歩行器代わりに追い、今日だけで幾つ見たやも知れぬ、赤褐色のコンテナへと案内される。両開きの扉の下に、ねじくれた南京錠が転がっていた。
ショーンは一言もなく、コンテナの扉を静かに開いた。光源のない内部に、かすかな人の気配が感じられた。ショーンの手の中で緑色のサイリュウムが音を立てて折れ曲がり、鉄の箱の中身がぼんやりと明かされる。――ブリジット。表情がいやに固く、左頬に泥こそ付着しているが、愛した少女は至って健康に見えた。
「ただいま……怪我はないか？辛かったろう、早く基地へ帰ろう」
ダニエルの補助を離れて、彼女の許へと歩み寄る。一歩、二歩……。彼女をこんな目に遭わせた責任は、少なからず自分にある。まずは謝り、それから強く抱き締めてやろう。戦線後方でどうしていたか、気の済むまで聞いてやろう。
三歩目に右足を蹴り出すと、爪先に柔らかい感触があった。ブリジットの傍らには、コーヒー豆の麻袋が積まれている。同じものだろうと当たりを付けて、足許を確かめた。――こんな未来は、想像し得た筈だった。どうしたって俺は、こうも脳天気でいられたのか。
足下の異物を認識して、瞬間的に感情が抜け落ちた。死体だ。光を

失った黒い瞳が曇る、中東の民の遺骸が二つ。双方が、ＡＫ４７を握ったままの姿で転がっていた。
　親父に拾われるまで、俺はテロリストの操り人形として生きてきた。それが今更になって、糸の切れた人形なんて直喩を実体験している。膝から崩れてコンテナの内壁に身を預け、尻餅をついて座り込む。脳からの信号が、神経細胞を伝わらない。全身に力が入らず、瞬きも、眼球さえもが動かせなかった。
「ヒルバート様……」
　これは悪い冗談だ。幾ら何だって惨過ぎるじゃないか。目を覆いたくなる現実が、彼女との幸福に彩られた記憶を塗り潰してゆく。
　頬に付いた、黒い汚れ。あれが泥の跡なんかなものか。自作した爆弾が、初めて人を殺した時の嫌悪が去来する。自責、後悔、驕り……身を以てしても、贖い切れる過ちではない。
　自分が凶弾を喰らうのに、どうという事はない。だけど、彼女は軍人ですらない。二十歳を迎えて間もない、ただの女の子だ。偶然に俺と出逢い、物好きに俺を愛し受け入れてくれる、少し変わり種なだけの、大事な恋人だ。それを俺は――
「……これが、私の選んだ道です」
　――俺はブリジットに、人殺しをさせてしまった。

奴隷迎合【7】

【7】

もう、どれだけ吐いたか分からなかった。自己の失態が招いたブリジットの惨劇を突き付けられた後、作戦本部の設置された倉庫で、現地の治安部隊を交えてのデブリーフィング（帰還報告・事実確認）が朝まで続いたらしい。その間、俺は小隊長の職務を兄弟に丸投げし、ダニエルを付き添いに海辺で嘔吐していた。作戦本部まで戻るだけの余力もなく、埠頭から黒い海面へと延々、吐瀉物を投下し続けた。チョコレートとナッツで糞尿の混合物めいた澱みが眼下に溜まり、波にさらわれてどろりと揺れる。逆流した汚濁が鼻孔を塞ぎ、海風が運ぶ微生物の死臭が肺に満ちる。おぞましい嗚咽が、払暁前の波音を掻き乱していた。

ダニエルの介抱虚しく、胃腸からのゲル状物質は際限なくこみ上げ続けた。彼は脆弱な上司が海に落ちない様に戦闘ベストの襟首を掴み、そいつがむせ込む醜態を、余計な言葉なく見守ってくれた。蔑みも向けず、陳腐な憐憫も寄せずにいてくれる温情が心苦しく、歪んだ倫理観の自傷行為が激化する。顎を伝う粘液が装備を汚し、ストレス性の汗も相まって、路地裏のゴミバケツにも劣るすえた腐臭を発していた。

そうして一時間ほど気管を痛め付け、遂に液体に血が混じった時分に、嘔吐は一旦の落ち着きを見せた。水平線に朝日が手を掛け、乾いた眼球を突き刺す。この隙にダニエルは塩を含んだ水のボトルを俺に咥えさせ、生命活動の危機に腰まで浸かる肉体の延命をに努めた。水分に溶けた塩気に吐き気が再来したが、死にたくない一心で胃に塩水を受け入れさせた。ダニエルは喉から掠れた風音を漏らす俺の戦闘ベストを脱がせ、嫌な顔ひとつせず片腕に提げた。それから空いている肩を俺に貸して、作戦本部へ向けて引きずってくれた。

「まずは胃を手当てして、栄養を摂らなきゃな。すぐそこで車が待ってるぞ。一緒に戻ろう、な？」

返事をしようにも喉は荒れ、首を振る力も残ってはいない。ダニエ

ルが十数歩目の足を送り出す。視界の片隅を、焼け焦げたヘリの残骸がよぎる。見えざる手に魂を掠め取られ、無事に帰投出来なかった仲間はどれだけいるのだろう。胃に仮止めした生気が、そっくり地面へぶちまけられた。

午前八時。Ｄ戦闘中隊は、ここへ来る時と同じハーキュリーズに搭乗して、キング・ハリド空軍基地への復路に就いた。結局、作戦本部へ辿り着けなかった俺は明け方の埠頭にうずくまり、流す涙もなくすすり泣いた。デブリーフィングを抜け出したヴェストが担架を持ってきて、ダニエルと協力して車へ運んでくれた。本部へ到着すると、連隊の仲間が小隊長の不名誉な姿にざわめく。ヴェストの指示で人混みの真ん中に空間が設けられ、俺はナイロンの布を張った簡易ベッドに横たえられた。兄貴は見事な手際で、俺の左腕静脈に点滴を繋いだ。細いカテーテルを通じて、透明なパウチからブドウ糖輸液――電解質飲料みたいなものだ――と思しき液体が流入する。口から物を受け入れられないが故の、やむを得ない処置だ。これに加えてモルヒネが投与され、間もなく脳味噌に靄が掛かる心地を味わった。チョコレートさえ飲み込めない現状、手持ちで使える抗不安剤は、麻薬の姉妹品だけだった。

数時間後、倉庫からハーキュリーズへと運び込まれた俺に、ヴェストが何本目かのモルヒネを投与した。後に聞けば、輸送機での俺は殆どラリパッパ状態で、うわごとにブリジットを呼んでいたらしい。自分の醜態は記憶に残っていないくせして、周りで繰り広げられる光景はしっかり憶えていた。滑走路を離陸したＣ―１３０の機内は、同一機体と思えないまでに様変わりしていた。見慣れた顔が、幾つも消えている。彼らと同じ数だけ、機体後部に黒色の袋が整列された。誰もが口を固くつぐみ、戦友の収まる遺体袋を見つめていた。

ブリジットは輸送機に乗らず、親父夫妻と一緒のヘリで基地へ戻った。俺を彼女から物理的に隔離する為の、身内による手配だ。脳裏に、件のコンテナの光景が焼き付いている。目を瞑れば、暗闇に佇むブリジットの姿が目蓋の裏に蘇った。血の気なく凍り付いた面持ちの恋人を前に、俺は何の慰めも掛けられなかった。頼りない亭主の身

を案じ、誰より深い傷を負ったに相違ないブリジット。その旦那は妻を支えもせず、自己嫌悪に潰れて単身逃げ出した。最低だ。

霊柩車の飛行中はダニエルが傍らに付き従い、べとべとの俺の右手をずっと握っていた。このまま死んでも、そこだけは腐らずに保たれる気がした。彼に一時間のフライトを眠って過ごすよう奨められたが、目蓋を閉じるとフラッシュバックに寝首を掻かれそうだった。強迫観念が休息の権利を奪い、視界に満ちる現実は何処までも辛辣であった。殉死者の数は、十六に達していた。

空軍基地の滑走路に、輸送機が接地する。車輪から伝わる衝撃が、臓器内の僅かな液体を容赦なく揺さ振る。胃液の逆流に耐えながら機体の制動を待ち、出血するまで歯を噛み締めた。機付長が後部ランプを下ろすや、点滴を繋がれたままストレッチャーに載せられ、ヴェストの舵でゆっくりと兵舎へ導かれる。満身創痍の仲間が、輸送機に横付けしたトラックの荷台へ死体袋を積む。

「今は見るな。また吐くぞ」

クラプトン家一の色男・ヴェストの目の下に、くまが浮かんでいる。同胞の理不尽な犠牲と渦巻く疑念に、誰も眠れていないらしい。加えて、直属のボスである俺がこのざまだ。今日中にノイローゼで精神の不調を発症する者も出るだろう。D戦闘中隊は、俺の居場所は壊滅寸前だった。

兵舎に搬送されてから、更に一時間が経った。開け放たれたままのシャッターから射し込む朝日に、隊員らの曇り切った顔が照らされる。空になった点滴のパウチとカテーテルをヴェストが取り除き、防水の絆創膏が前腕に貼られた。

「兄貴、ブリジットは何処だ……？」

「自分の身だけ案じていろ。彼女は無事だし、親父とニーナが付き添ってる。まだ会うな」

その声に感情は籠もっておらず、他者を慮るだけの余裕がなかった。兄貴でさえこのダメージだ、他の連中は、満足な意思疎通さえも難しいだろう。

「ダニー、ヒルの身体を洗ってやれ」

余力でそれだけ言い残すと、兄貴は自分のベッドに突っ伏した。ダニエルの助けでストレッチャーを下り、九十キロの体重を預けてシャワー施設へと向かった。

数時間前に比べて体調はましになったものの、気分が酷く塞ぎ淀んでいた。数人の仲間が装備を着たまま汗と血を洗い流すシャワー施設で、ダニエルは乾いたゲロで硬化した俺の身体を懸命にこすった。怪我こそないものの、彼も疲れが表面化していた。作戦直後はいつもやかましい施設は、今は水がタイルを叩く音しか響かない。

装備の洗浄から乾燥の用意まで、全てをダニエルが片付けてくれた。諸々の汚れを落として新しい肌着とトラウザスに着替えると、身体に若干の回復が見られた。自分のベッドに腰掛けて、従者と化したダニエルを手招きする。

「なあダニー。報告書をコピーしてきてくれ」

ぎょっとした顔だった。

「あのね、馬鹿言うんじゃないよ。いいからじっとしてなさいな」

「頼むよ。これ以上動けなくなったら、ちょっと前と同じ廃人になっちまう」

俺は住人のいない上段のベッドに視線をやり、食い下がった。

「ブリジットの件を頭の隅へ追いやるには好都合だ。飲み物と、冷えたチョコレートも頼む」

お脳への栄養は、何はなくとも糖分だ。不承不承に、ダニエルは作戦報告書と食料を持ってきた。Ａ４用紙が二十枚ほどステープルされた暫定報告の表紙には、英陸軍の徽章が不鮮明に印刷されている。作成者は、ヴェスト・クラプトン少尉となっていた。事件の概要から読み進め、参加した組織の所属構成を上からなぞる。作戦の最高責任者は、本国のクレデンヒルでテロに備える我らがボス、ブラッド・クリーヴズ中佐だ。その直下にリチャード・クラプトン少佐が続き、Ｄ戦闘中隊と第二六四通信中隊が追従する。英陸軍以外からの参加は、ブレナン中将率いるＲＡＦとＳＩＳの背広組が数人、特殊部隊支援グループを始めとしたスタッフが続く。

潰れたマットレスに尻を沈め、しばし顎を撫ぜる。チョコレートを

舌に乗せたまま、じっくりと粘膜に染み込ませる。神経細胞が活性化し、ノックダウンしていた脳を叩き起こした。ダニエルに隣へ座るよう促し、耳打ちする。

「何処にもあいつらの記述がない」

制圧後の貨物船に乗り込んでいった、例の不審な連中だ。英軍であるなら、報告書に記載がない筈がない。事実確認にこの報告書の作成者の方へ首を回したが、声を掛けるのは止した。ヴェストは左半身をベッドから宙へ放り出して、死んだみたいに眠っていた。

「あの大所帯なら、他の連中の目にもついてますよね……」

写真を撮っておくべきだったと、叶わぬ過去へ未練を噛み締めた。次項で作戦の顛末が俯瞰されており、陸軍の調査部門の主導で積み荷の確認を以て、作戦は終了を迎えていた。――陸軍の調査部門。月明かりの下では、集団の中にこの三箇月ですれ違った顔があったかも分からなかった。第一、その調査部門が何処の所属も明記されていない。臨時に編成されたタスクフォース（任務部隊）なら、その内訳があってしかるべきなのに。

ダニエルが空の木箱を持ってきて、その上で銃の整備をし出す。付近のベッドで起きている者は、俺達ふたりを除いて皆無だった。報告書の次の項に、敵の詳細と被害状況が記録されていた。計三六人の犯行グループは大方の身元が判明し、数名がＤＮＡ鑑定の結果待ちである。自軍の被害は、陸空の合計で十六人。その中にパーシーとデイヴ、狙撃を担当していたマシューの名と階級が記されていた。味気ない印字を目の当たりに、彼らが二度と戻らない事実が心を打ちのめす。ＲＡＦのピューマ・ヘリ一機が全壊、もう一機も軽微ならぬ損傷を受けたらしい。彼らの人的被害は三名。墜落したヘリに搭乗していた仲間は、炎上する機体でどんな最期を迎えたのか。

喉元までせり上がる胃液を押し止め、報告書を読み進める。最後に我々が調査に赴いた大本の目的、積み荷の詳細が連ねられていた。Ｅｘｃｅｌのマス目が縦横に並び、押収した物品と数量、確認が取れている出所が入力されている。自動小銃――一二九挺、対戦車擲弾――三八発、破片手榴弾――八四個……。およそ冷戦期に生産されたと思

しき武器資料を読み流し、枠外の付言に眉根を寄せる。――以上、陸軍より提供。『陸軍』は個人とか、小さな集団を意味する単語ではない。一体、何処の部署の誰がこの資料を作成したのか。報告書の表紙を睨み、チョコレートを口に含む。いけない。この問題には、一人で向き合うべきではない。

ともすれば連隊の結束が瓦解しうる難題を保留し、資料をベッド下のコンテナへ仕舞う。士官らしく報告書を検分したところで、思考は恋人への憂慮に捕らわれたままであった。先の作戦で殺害した敵の内、二体はブリジットの手によるものだ。コンテナに転がる死体は一方が胸を、もう片方は喉を撃ち抜かれていた。間違いなく、死んでいた。無残に殺されていた。速まる脈拍に呼吸を整えつつ、抗不安剤へ手を伸ばす。

銃の整備を終えたダニエルが、作業台の木箱の片付けに目の前を去る。差し当たり、状況の整理が必要だ。如何様な状況であれ、ブリジットが殺人に手を染めたのは事実だ。それも、大の男を二人ときている。一瞬の行為とはいえ、明確な殺意を以て臨んだに違いない。素人が衝動的に、対象急所をぶち抜ける道理はない。お遊びの延長といえ、護身目的の射撃術を指導するべきではなかったと悔やむ。相手が国家に仇なすテロリストだとしても、何の慰めにもならない。

――はて。明晰さを取り戻しつつある脳味噌が、糖を急速に燃やし始める。この慰めは、果たして誰に向けてのものか。不意に浮上した自問に、手ずからこしらえた迷宮へと光明が差す。シナプスが導爆線より早く信号を伝え、頭上に巨大な白熱電球が灯る。とどのつまり、俺は彼女を建前に自分への赦しを請うていたのだ。神を信じない野郎が、己が内に懺悔室を設けていた。いやはや、滑稽じゃないか。

系統だった思考活動が回復した。兵舎で勝手に腐り、無為に悩んではいられない。当事者のブリジットを前に、どんな言葉を掛けてやるかが至急の課題だ。

殺害対象が凶悪犯罪者であっても、初めて人間を殺した兵士は、ほぼ確実にＰＴＳＤを発症する。これこそ大脳皮質の発達と引き替えの呪いと言うべきか、ヒトは同族殺しに対して極めて敏感である。戦

地で敵を殺めた兵士は、起動時間の知れない爆弾を人知れず抱える。起爆スイッチは時間の経過かもしれないし、料理中に指先を切って血が滲んだ瞬間かもしれない。契機がどうあれ体内で爆発が生じるのだから、無事では済まない。脳と精神を吹き飛ばされた人間が、正常でいられるものか。それまで盲信していた倫理観を自ら否定した彼らは、甚大な精神疾患をその身に科す。そんな重苦につぎはぎだらけのブリジットが耐えられると、どうして考えられる。

ベトナム戦争の帰還兵が退役後にＰＴＳＤを発症する確率は、他時期の帰還兵と比較して極めて高い。多湿の密林で共産主義に敗れ、疲労困憊で自国へ戻った米兵を迎えたのは、母国民による侮蔑であった。情報インフラの発達が歪んだイデオロギーを報道し、日和を味わう市民の偽善を煽った。ナパーム弾、枯れ葉剤、ヘリの機銃掃射……。上層部の命令を実直に遂行したに過ぎぬ二等兵らは十年以上続いた戦争の責任として、人権の放棄を強いられた。汚染された生水と泥濘にまみれて帰った彼らに、安寧の場所は残されていなかった。

二つの大戦が未曾有の死者数を記録したのであれば、ベトナム戦争は間違いなくＰＴＳＤ患者数部門でノミネートされる。徹底的な訓練の『改良』により、兵士の発砲率は九十パーセント以上と驚異的な数値を叩き出した。ひょっとすると、一般市民はむしろこの数字に首をかしげるやもしれない。「敢闘精神に欠けている」と文民様は仰せになる。無学な士官共よ、驚くなかれ。第二次大戦当時、前線における発砲率は士気の充実した部隊で二十パーセントに過ぎなかったのだ。ベトナム戦争が異常なのは、これだけに止まらない。六十年代、数多の識字ままならぬ十代の少年が、就職にあぶれて十三週間の洗脳を施された。失うものなどありはしないと信じていた彼らは『悪魔の犬』となるべく、不吉に広く開かれ海兵隊の門をくぐる。だが、衣食住と社会保障を得る代償は余りに大きかった。うらなり面の新生海兵隊員は、現地を知る事前学習もなしに、海の向こうの密林へと空輸された。過去の新兵は、訓練を共にした同期と一緒に同じ戦地へ派遣された。大戦後の革新を経た米軍は、このシステムを破壊した。母国を旅立つ新兵はそれこそ家畜の如く、訓練期間を満了したそばから出

荷された。不味い食事を共にした同僚と引き離され、巨大な輸送機の中で孤独のみを味わう。辿り着く先はベトナム。そこには気の置けない戦友も、信用に足る練兵軍曹もいない。その国の誰も、彼を知らない。物理的に、そして精神的に、若者は孤立した。

心の整理をつける暇も与えられず、高速の航空機で不衛生極まる職場に辿り着けば、初対面の上官が軽侮の視線を向ける。「面倒なのが、またやってきた」二十歳そこそこの先任軍曹は新兵を精々補充品としか見ておらず、そこに上下の信頼など醸成される訳がなかった。その即席軍曹とて、数ヶ月前に赴任した新顔なのに！一年の期限付きで現地勤務する二等兵らは、とどのつまり派遣社員でしかない。階級を傘にがなるだけの指揮官とて、犠牲者の一人であった。はな垂れ小僧に過ぎない現場監督に、望んでもいない後輩を可愛がれと命じるのも破綻した談だ。何を以て首尾良く事が進むと思い至ったのか。アメリカさんがやらかすのは、いつだって驕り先走った時だ。

冗長過ぎる講釈を垂れたが、帰還兵らの再起不能を決定付けたのは執念深いベトコンでも、高火力を誇るＡＫ４７でもない。一年の孤独を堪え忍び、傷付いた同僚とのグループセラピーも設けられず、じっくりと感傷に浸る猶予も与えられなかった国家の奴隷へ、果たして何が手向けられたか。無益な戦いに疲弊した少年らの心を殺したのは他ならぬ母国民、恋人、彼らの家族であった。米国の歴史上、過去に前例のない事象である。拠り所と見出した勲章に唾を吐かれ、「人殺し」と蔑まれ続けた帰還兵は、自らを外界と隔絶した。自らの傷を晒し舐め合う権利を奪われた彼らは、誰にも助けを求めず、ただひっそりと命を絶つ。愛したアメリカから、自分を忘れ去られる為に。

これが、ベトナム戦争におけるＰＴＳＤの真相だ。先の戦争による潜在的なＰＴＳＤ罹患者は、百五十万人いるとされている。その病魔が、目下うら若きブリジットの身に迫っている。やにわに脂汗が額に生じ、手許の電解質飲料のボトルを飲み干す。新兵に必要なのは、親しい同僚と信頼の置ける上司、そして社会の温かな理解である。いつの時代も変わらない、不変の事実だ。

形式上とはいえ、現状ブリジットは軍に籍を置いている。だが入営

以来の同期と呼べる存在はなく、英国社会からは見栄えのする奴隷としての認識しか持ち得ない。状況を鑑みると、彼女の殺人行為を正当化してやれる大人は限られてくる。自惚れた話だが、仮に俺がブリジットを否定してしまえば、あの子は生きる力を失うやもしれない。あの子が俺を中東まで追い掛け、危険な作戦への介入を決した魂胆とは。……明白だ。誰よりも彼女の出生と思想を知る、唯一の存在――ヒルバート・クラプトンの死を恐れるが為だ。

「おいおい凄い汗だぞ。熱でもあるのか？」

コーラの瓶を手にしたダニエルに、ボディシートを差し出される。それどころではない。汗で滑る手で携帯電話を取り、親父の番号を呼び出そうと指をわななかせる。ちくしょう、操作がままならない。

「おや。ヒルバートさん、お呼びだよ」

苛立ちつつ舎弟の指差す先へ首を向けると、ニーナが兵舎の玄関口に佇んでいた。苦い固唾を飲み下し、姉貴の誘導でベッドを立つ。凛とした美貌に、一年で一度見られるかの陰が差していた。ちくしょう、向こうから来やがった。

姉貴に付き従い、軍事都市の幾何学的な構造の内側へ進む。我々の居住区を離れて、もう随分と遠くまで歩いた。数え切れない建築物と検問を経由し、何百という米兵とすれ違う。好奇の目を避け、ニーナは黒いバラクラバ（目出し帽）で顔を覆っている。実際には、ワンダフル・ロシアンおっぱいが迷彩服を押し退けているので、何の意味も成していない。それ、射撃時に邪魔にならない？

何処を見ても代わり映えのない、殺風景な光景が現れては消える間、煩悶とした逡巡が脳を支配していた。ブリジットは不安に苛まれているだろうか。どういった態度で接触を図るべきか。左後ろの側頭部が、じわりと痛み出す。精神的打撃から、絶食状態に陥っていたら？馬鹿野郎、考え過ぎだ。親父も付いているのだから、適切な処置を取ってくれている。

問題は心理面だ。殺人における後悔の念はその瞬間ではなく、決まって遅れてやってくる。報告が多く寄せられているのは、殺しの直後の就寝時だ。記憶に殺害した人間の顔が刻まれ、延々と自己嫌悪の

念がついて回る。自分の行動さえなければ、そいつも食事と睡眠を摂れる日々が続いたのではないか。戦火の果てに、いつか訪れるやもしれない安堵を共に享受出来たのではないか、と。自己の内側で増幅した負の葛藤に抑圧された結果が、廃人化と自殺である。旦那である以前に上官として、それだけは避けねば。ブリジットに言いたい事は山程あるが、如何なる懲罰行為も禁じられる。「馬鹿野郎」「くそったれ」は禁句だ。語彙の足りないおつむには、苦行でしかない。

広大な八角形を、十分も歩いただろうか。胃腸がぎりぎりとねじくれた時分、一枚のドアの前でニーナは足を止めた。一直線に走る廊下の人通りは皆無で、足音が反響するまでに静まり返っている。付近の部屋は資料室に割り当てられているが、最近使用された形跡がない。床にも大きな綿埃が転がる始末だ。

ニーナが錆び付いたドアを殴り、空虚な金属音を響かせる。内側から、親父の応答が為された。返事を聞く前にドアを開いた姉が、俺に顎で指図する。

「用事があるのは、あんただけよ」

冷淡に言い放つと、ニーナは独り来た道を戻っていった。うちの姉様は俺に手厳し過ぎる。姉貴が開け放ったドアの先に、親父とブリジット、金属製のテーブルを挟んでショーンが座していた。弟の隣に空いたスツールがあり、そこへそっと腰を下ろす。四メーター四方の狭苦しい部屋には、テーブルとスツール以外の調度品が何もない。壁時計さえ設置されていない室内に、いたたまれない重圧が充満していた。ブリジットの表情に恐怖や不安に襲われている気配はなく、ただ固く口を結んでいる。少なくとも、会話の出来る状態にはあるらしい。

言葉なくショーンが目配せすると、親父が厳かに口火を切った。

「前置きはなしだ、端っから本題に入るぞ」

「いや、こっちには前置きがあるんだ」

片手で待ったを掛けると、親父は不服げに口髭をくねらせた。

「まず、ブリジットの一件が漏れない様、手配してくれた事に感謝している。世話を掛けてすまない」

親父は聞こえない振りを決め込んでいた。
「……それからブリジット。お前は正しい行いをした。決して表には出ないが、国から賞賛される名誉を果たしたんだ。人を殺めた事実は変わらないが、連隊は絶対にお前を否定しない。いいね？」
歯が浮く台詞だったが、誰も笑わなかった。ブリジットは目蓋を閉じて深々と頷き、唇を解いた。
「ヒルバート様のお気持ちはお受け致しました。ご心配なさらずとも、私は変わりませんよ」
目を細めて微笑む彼女に、数年越しに会えた気がした。
「この度は、大変なご迷惑をお掛け致しました。お義父様には事後処理や情報統制に尽力して戴きましたし、主人に多大な心労を負わせてしまったのは、専属メイドにあるまじき不始末です。それを踏まえた上で、ヒルバート様に厚かましいお願いがあります」
ブリジットは一つ大きく息を吸い、俺に向き直る。何を言われても、受け止める心構えは出来ていた。一拍置いて意を決した彼女の瞳には、力強い光が宿っていた。
「――私を、戦闘中隊に編入して下さい」

奴隷迎合【8】

【8】

一瞬、前頭葉が炸裂したかと思った。「怖くてどうしようもない」「今すぐに罪を吐き出したい」「私は逮捕されるの？」そういう吐露なら、一笑に付してやれるつもりだった。「嫌いになんかならないよ」と、頬を撫でてやるつもりだった。それがまっとうな反応なのだと、殺人への理解に要する時間を設け、贖罪の不要を説いてやる腹づもりだった。

現実はどうだ？脳味噌に猛吹雪が襲来していた。思考に灰色のノイズが掛かり、血液中の糖が凄まじい勢いで消費されてゆく。こんなのは、俺の前に置く。

二〇〇〇年問題を回避出来なかった機械の様に凍り付いた次男坊を見かねてか、親父が焼けて変色したケトルから水を紙カップに注ぎ、俺の前に置く。

「今しがた言った通りだ。この子はな、ヒルバート。お前さんの許可が下りれば、限定的ながら我々の一員となる為のテストを受けられる」

「馬鹿野郎がくそったれ！誰が首なんか振るか！その年で痴呆かちくしょう！」

テーブルに半身乗り上げた俺の肩をショーンが掴み、スツールへと引き戻す。紙コップ倒れ、水がコンクリートの床に濡らした。零れた水とケトルに、血の殺到した顔が写り込む。親父は両手を組み、慇懃な視線を差し向けた。

「平静を欠くな、クラプトン少尉。職業軍人が容易に規範から外れるんじゃない」

「どの口が規範だ不良士官が！入営間もない女通訳をＳＡＳにぶち込む方が、よっぽどとち狂ってるね！」

ブリジットは真面目腐った表情のまま、唇を再び堅く結んでいる。親父はふてぶてしい態度を崩さず、ショーンは何処までも冷静だ。何なんだ、軒並み狂ってやがる。肩で息をする俺に、ショーンが新しい

水を寄越した。
「兄貴の気持ちはもっともだ。俺だって、全面的に賛同してる訳じゃない」
「うるせえ馬鹿！こんな間違いにも気付かないなら、狙撃手なんて辞めちまえ！」
弟は何も言い返さず、親父とブリジットのカップに水を注ぎ足す。素知らぬ風が、立腹に拍車を掛ける。親父が指でテーブルを打ち、両の手を組んだ。
「なあ、ヒル。お前さんは、ブリジットが敵の殺害に至った状況を訊いてやったか？」
説教めいた物言いに、行き場を失った拳が自分の膝を殴る。奥歯を噛み締め、沸き立つ憤怒を押し止めるのに必死だった。親父は鼻息を漏らし、ショーンへ手振りを向ける。弟は、足許のブリーフケースから書類の収まったファイルを取り出した。数枚のＡ４用紙がテーブルに展開されると、彼は感情を殺した声音で状況説明を始める。
「……俺が第二の狙撃地点に使ったコンテナは憶えているな？あそこが、ブリジットが件の二人を射殺した場所だ」
狙撃地点のコンテナ――情報の漏洩を危惧し、事前の取り決めを捨て、急場で設けた攻撃陣地だ。ろくな遮蔽物もなく、彼は裸同然で仲間を支援していたのだろう。突入に参加した誰もが、弟の功労を認めている。口許に手をあてがい、少し血の下がった脳味噌で欠けていた情報を繋ぎ合わせる。頭の中で欠けていた真実が組み上がりつつある中、今度はブリジットが口を開いた。
「私は、ヒルバート様の指示で戦線後方に戻りました。ですが、負傷した方々は手に負える段階ではありませんでした。皆さんに止血を試みましたが、もう流す血が残っていませんでした。私は誰も救えませんでした。手を握って、モルヒネを打つだけしか……」
その先の言及は親父が遮った。誰しも聞きたがる話じゃない。険呑に眉根を寄せる親父が、書類群の一枚――昼間の埠頭の俯瞰写真をペン先でつつく。
「ショーンが新たな狙撃地点に決めたコンテナが……ここだ。貨物船

から、二百メーターと離れていない。ここに梯子を掛けて、狙撃を再開した」
親父の状況描写の最中、ショーンは自身の武勇を誇るどころか、悔悟に唇を噛んでいた。手塩に掛けて育てたマシューの死が、かさぶたも出来ていない心を抉っている。こいつは賢い男だ。悔いたところで、神様がマシューを返してくれやしないのも分かっている。それでも、自らの作品とでも称する弟子の無慈悲な逝去に、得心がいくものではない。
「敵の埠頭へ降りる動きを確認して、俺は狙撃の応援を要請した。ヒルが周波数を変えてから、すぐに補充要員を乗せた車輌が駆け付けてくれた。安心したよ。たった一人で何十ってテロリストを相手取るのは、正気の沙汰じゃない。だから、気が緩んでいたんだ」
指を組んだショーンの両手が鬱血する。
「……作戦決行の前から、コンテナの中に潜んでいた敵がいた。やつらの接近に、俺は気付けなかった。仮に察知出来ていたとしても、反撃は間に合わなかっただろうな。
上甲板の敵を狙撃していると、足下で銃声があった。それで初めてスコープから目を離した」
言いながら、ショーンの肩は震えていた。我々とて、死の恐怖を克服した殺人マシンではない。餓鬼の頃から飛び抜けて臆病風に吹かれる三男は、死んだ敵の残留思念に怯えていた。
「続きは私からお話しします」
トラウマの片鱗を覗かせるショーンに代わり、ブリジットが一枚の書類を寄越す。A4のコピー用紙に、写真が印刷されている。コーヒー豆の麻袋と一緒に横たわる、二つの死体。自分の目許が痙攣するのが分かる。写りは悪いが、赤黒い銃創がはっきり視認出来る。割り切ったとはいえ、恋人が作った死体に自責が湧く。
「負傷者への処置の最中に、埠頭を横切る人影を捉えたんです。遠くて識別出来ませんでしたが、味方とは思えませんでした。勘でしかありませんでしたが、放ってはおけませんでした。ヒルバート様から授かった任を抜け出し、彼らを追いました。

コンテナの間を縫って影を追っていると、サプレッサーを通した銃声が聞こえました」
それからブリジットは逡巡し、埠頭の俯瞰写真を指でなぞった。月明かりを頼り辿った経路に、整理を付けているらしい。
「銃声の主――ショーンのお義兄様を見付けた時、銃を手にした先程の二人と鉢合わせしました。まず近い方の敵へ三発撃って、それからもう一方に組み付いて、無心で引き鉄を絞りました。気付くと敵は喉から血を流して、背中から倒れていました」
表情を凍り付かせたまま言い終えると、ブリジットは物憂げな視線を投げた。
「以上が、本件の顛末です。事後処理は全て、お義父様が済ませてくれました」
違う。俺が聞きたかったのは、そんな事実確認ではない。「怖かった」と、その一言が欲しかった。泣いて、叫んで、助けを求め縋り付いて欲しかった。
鬱に沈み、手を額にうな垂れる。皮肉にも、彼女の発言と狂気の正当性を証明する説には、思い当たる節があった。多くの動物が同族殺しに対して極端な忌避を示す研究結果は、数々の文献が詳説してくれている。同時に、その心理的制約を逸脱する存在さえも。
軍人を対象にした調査によれば、男性の九八パーセントは殺人に強い抵抗を覚えるとある。中脳――脳の動物的本能を司る部位が、歯止めを掛けているのだ。これの枠外にあたる二パーセントは、その道の専門用語で『攻撃的精神病質者』と呼称される。彼らは所謂サイコパスとは根本から異なる存在であり、正当な理由と上官の統制下にある限り、同族の殺傷に二の足を踏まない。故に、人殺しを理由にＰＴＳＤを抱え込まない。組織に忠実かつ任務に実直、兵士として無比の適性である。
それが自分の恋人だと判明して、誰が喜ぶものか。先程と打って変わって脱力し、ブリジットを直視出来なかった。俺とて、血煙の舞う戦場まで最愛の女を引き連れるほど壊れちゃいない。彼女が自身の行為に動揺を見せない説明は付いた。だが、それで戦線加入の言い訳

にはなる筈もない。俺の望みはブリジットが安全な場所で俺の帰りを待ってくれる事であり、惨たらしい人殺しに荷担させる為ではないのだ。
酸味を含んだ臭いが喉に絡みつく。テーブルへ突っ伏した俺に、親父は容赦しなかった。
「この裁定は何も、ブリジットの建言を全面的に支持してる訳じゃない。この子の精神的安定の為でもある」
義父としてあるまじき妄言に、拳がいつ放たれてもおかしくなかった。このまま男ふたりをぶちのめし、ブリジットの手を引いてすぐにでも本国へ帰したかった。
「考えてもみろ。お前がブリジットに救われた様に、お前自身がブリジットをこの世に繋ぎ止めておく楔になっているんだ。どんな理由であれ、お前が死ぬ事態は耐えられないだろうよ」
「それが詭弁の説明になっているとでも？戦場でブリジットが死傷した時の、俺の気も察しずに！」
当のブリジットは全く動じる素振りさえなく、その膝に置いたＢ５サイズの冊子をテーブルに伏せた。
「……少し、お二方には席を外して戴けますか」
ショーンの表情に、驚愕の色が浮かぶ。が、そんな弟の肩を親父は叩き、ブリジットへ何らかの目配せををすると、三男を連れて部屋を退出してしまった。男ふたりの退場と同時に鉄扉が閉じられると、室内に沈黙が垂れ込めた。
一体、ブリジットのやつは何を考えているのか。彼女の死が、俺にとっての破滅を意味しているのを知らぬ筈はないのに。濃くなってきた胃酸が、粘膜壁に沁みる。紙カップの水も使わずに、ありったけの胃薬の錠剤を噛み砕いた。腰を据えてもいられず、席を立って背後の壁に額を押し付ける。
何を誤った？ブリジットとの交際が本格化した時点で、この職から手を引くべきであっただろうか。一理あるが、連隊は俺にとって単なる食い扶持ではないのは誰もが知っているし、他の仲間だってそうだ。そうなると、やはり遠征当初からブリジットを強制的に本国へ送

還しなかった点が大きい。一旦抜け出したものの繰り返される堂々巡りは、渦中の女の声で中断される。
「ヒルバート様のご意見はもっともです。私が戦闘に加わっても戦力にはなりませんし、それが原因で部隊を窮地に追いやるかもしれない。場合によっては、イギリス政府が特殊部隊に性奴隷を編入していたという情報が内部告発される危険もあり得ます。
……ですが、私もただの小娘ではありません。学歴以外は全てにおいて同年代女性より秀でていますし、戦争の現実も把握しているつもりです」
さも他人事の様に、彼女は就職面接みたいな美辞麗句を並べる。恨めしく視線を向けると、ブリジットはこちらへスクラップブックを開いてみせていた。黄土色の紙面に、新聞やコピー用紙の小片が整然と貼付されている。記事の詳細までは認識しないものの、太字の見出しや不鮮明な写真を無意識にさらっていた。
にわかに、おぞましい悪寒が胸に去来した。情報の欠片は、何れも一昨年の九月付の記事を示している。各新聞社は揃って、猟奇殺人の単語を見出しに置いている。それら全てに憶えがあった。風化も始まっていない記憶のフィルムが、鮮明な像を映す。脳裏が秒単位で再現する暗い情景、血の臭い、筋肉を断ち切る感触に、神経が統制を失った。
「私だって、こんな歳で死ぬのは不本意です。ヒルバート様を案ずる前提に、自身を防衛する小狡さも自負しています。だって――」
何より、複数枚に渡って添付された被害者男性の近影が強烈な揺さ振りを掛ける。
「――私は故上院議員、マーティン・アボットの娘ですもの」

奴隷迎合【9】

【9】

間断ない緊張に脳が麻痺していたか、さもなくば多方向からのショックで混乱が相殺されたか。自分でも予想外に、ブリジットが実父を突き止めていた現実から立ち直るのに、さしたる時間は掛からなかった。スツールに腰を据え、紙カップの水をゆっくりと飲み下して数十秒。それで動悸は治まった。

「……いつから知っていた」

詰問に、ブリジットは事務的に応じた。

彼女の弁はこうだ。時を遡って一年前。奴隷調教施設に入る以前の記憶が、ブリジットの身に戻り始めた。意図せず再取得した母親の情報を足掛かりに、彼女は自身の出生を探った。母親の過去の言動を洗い出し、俺の羽振りが急に良くなった頃の新聞記事を漁った。警察が短期間に捜査を打ち切り、マスコミさえ関心を抱かない殺人事件を、彼女は掘り起こした。賢いこの子だ、おぞましい真相まで辿り着くのに、長くは掛からなかっただろう。何も知らないままでよかったのに。

自らの生い立ちと旦那の私的殺人を知り得ながら、ブリジットはパンドラの箱を心の内に潜めていた。自分が何も言わなければ、誰もが幸せなままでいられる。そんな風に、優しくも寂しい想いを秘めて。まだ大学生くらいの少女に、俺は何たる負荷を掛けていただろう。不甲斐ない自身に嫌気が差し、テーブルを殴り付ける。握り締めた拳に、身を乗り出したブリジットが手を重ねた。

「ヒルバート様が気負う必要はありません。これは私の勝手招いた報いです。それに、お陰で今後の指標も見えました。感謝してるくらいですよ」

「それが戦場で旦那のケツを追う無茶じゃなかったら、手放しに喜べるんだがね」

ブリジットは苦笑し、普段と変わらぬ物静かな、それでいて大人を舐め腐った口調で応じる。

「危険を省みず愚父の暗殺を遂げて下さった恩返しに、四六時中お仕えするのは当然でしょう？」
「限度ってものを考えなさいよ……」
説得に困窮した主人に、恋人は駄目押しを畳み掛ける。
「本当はお分かりなんでしょう？ここで貴方に断られても、お義父様の権限を使ってお供しますよ？それでも駄目なら、お義父さまのツテで将軍様に……」
これには呆れて物も言えない。彼女の言葉を借りれば、アボットの殺害こそ俺の勝手な判断と独走である。俺の殺人行為がブリジットの論の根幹にある以上、明確な理由なしに彼女の具申を却下する術はない。言うまでもなく、その理由とやらを見出すおつむはない。
正直なところ、悩み続けるのに嫌気が差していた。そもそもが頭脳労働に向いた生まれではないし、北アイルランドにいた頃から直感に頼って生きてきた。それが昨晩から懸念やパニックの連続で、挙げ句に恋人の衝撃告白だ。ここ二四時間だけで、頭蓋の中身が蒸発し切っている。神様よ、聞こえているなら応えて欲しい。もう、折れてもいい頃だろう？
「なあ、ブリジット。もう一度だけ聞かせてくれ。お前、これからどうしたいんだ」
目頭を揉んで大きく仰け反ると、パイプ椅子が悲痛に軋む。
「ヒルバート様のお側に控えております。いつ、何処へでも」
目を閉じているので姿は見えないが、彼女の表情が容易に予想出来た。ヘリフォードの自宅でマフィンを焼く時の様に、穏やかな微笑を浮かべている。姿勢を正して目蓋を開けば、いつもの恋人がいた。全く、馬鹿なやつ。
「……覚悟しろよ」
軽く頭痛を覚える身に鞭打って苦言を垂らすと、小さな英軍兵士は小憎らしく口許を歪めた。
「とうに出来ておりますよ」
腐臭の混じる、重いため息が零れた。何もかも馬鹿馬鹿しい、そんな風にさえ思えた。たった一日で、倫理観の大部分で風通しが良く

なった。
俺がブリジットの選抜訓練への参加を許可すれば、彼女はすぐさま本国へ送られ、ウェールズの山野で扱き上げられるだろう。その光景を思い描くだけで涙が滲む。ＳＡＳの選抜訓練は、過去に死者も出た過酷なコースだ。感傷的になるなというのは不条理だろう。彼女専用にどの様な訓練メニューが用意されるのか知れないが、まず間違いなく通常部隊とは比較にならない運動量を要求される。苦労性な旦那としては不適格と判を押されて落第して欲しいが、何処に敵が潜んでいるかも分からぬ現状においては、気心の知れた恋人が隣にいてくれるのは相当に心強い。常識なら迷うべき場面ではないが、第三国家でその常識は通じない。
「親父へ報告に行くぞ。あのタヌキ野郎の事だし、結果は知ってるだろうがな」
立ち上がってドアノブを握った瞬間、ブリジットの腕が後方から伸ばされる。白磁の指が、一切の躊躇なく内鍵を閉めた。
「……何のつもりだ」
大脳旧皮質に住む動物が、警報を発している。この部屋を出なければいけない。否、ブリジットと二人きりの状況から抜け出さねば。鍵を押さえる彼女の手を取ろうとするも、逆に手首を絡め取られる。
「……ねえ、ヒルバート様？Ｄ中隊がアラビア半島に派遣されて、どれくらい経ちます？」
強かに迫るブリジットの瞳の奥、とろりと煮えたぎる欲望が垣間見えた。
「数えてみてびっくり、なあんと三箇月です。随分と……ご無沙汰ではございませんかぁ……？」
日本を偏愛する親父が気に入っている諺に、「蛇に睨まれた蛙」というのがあるのを思い出した。
「馬鹿を抜かすんじゃない、こんな場所で……」
「あら、ご存じじゃありません？この部屋、防音なんですよ」
恋人の背中に燃える愛欲の炎にぞっとし、特殊部隊の経験が裸足で逃げ出す。力の抜けた身体が容易く壁へと追い詰められ、ぬらりと濡

れた唇が右耳へ寄せられる。あ、あかんよ！
「いけないぞ、ブリジット君。ショーンとシェスカだって、同じ境遇で我慢してるんだ。僕らも耐えなきゃ」
「他人様は他人様です。別の女性の名前を出すなんて、無粋じゃありませんこと？」
小さな手に、胸ぐらが引き寄せられる。三十キロのベルゲンを背負い、選抜訓練を攻略した日々を走馬燈に見る。乳酸がどれだけ溜まっても走り続けた脚が、今はもう震えて止まらない。おたすけえ！
「火が灯った妻を捨て置くおつもりです？」
「ずるいぞ！こんな時ばかり女を武器にするんじゃない！」
しっとりと潤った手が頬に添えられ、蠱惑的に撫ぜられる。まずい、まずいよ堕ちちゃう。唇が殆ど耳に触れ、湿った囁きが理性を殺した。
「それとも……ヒルバート様はお嫌、ですか……？」
恨むぞアダム、呪うぞイヴ。人間を万年発情期にせしめた罪は大きい。眼前の迷彩スモックに、成熟した谷間が汗を滴らせる。女の子の匂いだ。知性の悲鳴と共に情欲の拘束具が弾け飛び、その暗く淫らな谷底へ滑落した。檻から放たれた桃色モンスターが、緊張のワイヤーを真ん中から引き千切る。もう辛抱たまらん！不埒な制裁対象の手首を捕らえ、そのまま壁に押し付ける。眼下の少女は退路を失いながら、にやけ顔を崩さない。あまつさえ、してやったりと舌を出す始末である。溜まりたまった鬱憤が、情欲へと昇華した。
「きゃー犯されちゃう！」
「ほざけ淫乱新兵！」
不思議なものだ。年齢、身の丈の全てが劣るこの娘に、一生を掛けても勝てる気がしなかった。

奴隷迎合【１０】

【１０】

三日間。ブリジットが中東を発つまでに、俺が彼女に訓練を施せる制限時間だ。親父の権力で臨時の選抜訓練が催されたところで、彼女が試験パス出来なければ意味がない。協力を引き受けた以上は、先達として試験対策に付き合ってやるのが筋であろう。

幸い、臨時選抜で課せられる試練の概要は報されていた。正規のＳＡＳ選抜なら半年は掛かる課程を僅かひと月で履修する為、社会情勢や言語修得の座学は切り捨てられる。作戦地を砂漠に限定するので、ジャングルや極地を想定した範囲も除外される。彼女に要求される技能は近接戦闘・市街戦・小火器の扱いで、専門部隊並みの通信やナビゲーション能力に日程を割く余裕はない。とどのつまり、この訓練は純然たるテロリスト殲滅レディを即席で養成する穴だらけの計画であり、ブリジットは女性参画による軍の予算拡張を目的とした体のいい実験台にされたのだ。他人の恋人を何だと思っていやがる。

心の療養を名目にしたブリジット専属教官の日々は、一夜漬けに等しい七二時間であった。早朝かブリジットと基地内を数キロ走り、休みなしに銃を撃たせる。大量の食事を摂らせたらすぐに射撃場に戻り、再び何千発も鋼板のヒトガタを攻撃させる。徹底した反復演習で、敵味方の識別と無意識の迎撃を修めさせた。

「ぶち込むのは常に二発以上、出来れば四発やれ！」

「弾を無駄にするな、持てるだけしかないんだ！」

「頭なんか狙うな！真ん中に中（あ）てれば殺せる！」

自分の脳が悲鳴に沈む隙を与えない為に、一日を通してがなった。今ここでブリジットに達成出来ない課題を出せば……それとも、事故で骨の一本でも折れれば、自殺めいた望みを断てるのではないか。確かに、そういった囁きに揺れもした。悲しいかな暗い目論みは、土にまみれて銃を握る彼女への見込みに、居場所を奪われた。上層部のモルモットに過ぎないが、ブリジットは連隊に必要とされている。過程はどうあれ、彼女は特殊部隊の一員を、連隊への加入を志した。俺によ

り近い場所まで、歩み寄ろうとしてくれた。
「不必要に身を乗り出すな！弾倉の交換には仲間の掩護を頼れ！」
「五月蝿いだけの脳が急かしたって焦るな！お前の方が敵より早い！」
「弾の残りなんか考えるな！どうせ憶えてる余裕はない！」
怒声を張り上げてブリジットの生存確率が上がるなら、喉が涸れるのなんか屁でもなかった。時たま通り掛かる米兵からは、奇異の視線を向けられる。日が沈んでからもＮＶＧ（暗視装置）を装備しての射撃訓練を続け、ブリジットの銃は何度も整備に分解された。
「装備はこっちが勝ってる！落ち着いて狙え！」
「走ってるやつは後回しだ！恐らく向こうの弾も中らん！」
「敵はプロかも知れない。だが連隊には劣る！」
深夜に二人揃って泥の如く眠り、日の出と共に肉体をいじめ抜く。ＣＱＢ（近接戦闘）訓練用の家屋で、埃だらけになって駆けずり回るブリジットに、何度も涙を零しそうになった。何だって、こんな良い子が俺を慕ってくれたんだ。
「速くやろうなんて考えるな！つっかえなければ問題ない！」
「パニクったらお陀仏なのは敵も同じだ！猛攻で戦意を挫け！」
「いいぞ、最高に人殺しの顔だ！」
食事の時間とて、無駄には出来なかった。奇跡の脳内麻薬――アドレナリンが副腎髄質から爆発的に分泌されると、人体にどういった現象が起こりうるかを仔細に説いた。個人差はあるが、極度の緊張は集中力の低下・時間感覚の喪失・視野の狭窄・大小失禁など、戦闘におけるデメリットが続出する。過剰なカンフル剤の摂取は害悪でしかない。逆に、適量のアドレナリンは認知能力の上昇・運動機能の活性化をもたらす。天然の増強剤は肉体に多大なストレスを掛けるが、文明と引き替えに退化した生存本能を底上げしてくれる。金メダリストの常連でもなければ、ホルモン分泌を司る交感神経系の制御は叶わない。それでも、極限の状況下で心身に何が起こるかを事前に聞きかじれば、律動的な思考を放り出すリスクを減じられる。口惜しい事に、用兵において真に貴ばれる要項の数々は、士官学校の大事なカリ

キュラムを割くに値しないらしい。兵を導く将校がその兵の人心を知らずして、どうして勝利を確約出来ようか。どんぱちの最中で老兵がうんこを垂らしたって、恥ずかしい事ではない。生き延びれば、次は水洗トイレで用を足せる。死体は下着を洗濯する権利さえない。

「お前の敵は連隊の敵だ！仲間を殺させるな！」

「撃たれてもすぐには死なない！這ってでも逆襲しろ！」

「負傷したって、味方がすぐ助けに来る！……スタン、お前自分より小さい女に殺されたぞ！」

午後からは暇そうにしていた小隊に声を掛け、ペイント弾を使用する模擬戦を行わせた。連中は疲労から渋ったが、需品科の兵站部で仕入れたビールをちらつかせると飛び付いてきた。

この業界ではお馴染み〈シムニション〉の訓練用ペイント弾の威力は、実弾には遠く及ばない。とはいえ、実際に銃弾が全身をどつく感覚は知っておいた方がいい。いざ戦場で撃たれた時には、次の命中弾が襲い来る前に射線から身を隠す必要がある。この退避動作を反射で行える様になったら、そいつは大量の名誉負傷章を見せびらかすだけで老後を送れる。訓練が辛いだけ、実戦は容易になる。一時の痛みが、明日の我が身を救うのだ。

ただ計算違いだったのが、訓練兵ブリジットのど根性である。クラプトン兵卒は無数の被弾に屈せず立ち上がり、全身真っ青になりながら照準器に敵を捉え続けた。そして時間は彼女に味方し、執拗な反撃に耐えかねた仮想敵の同僚らは遂に痛みに降伏した。ブリジットの人外じみた執念が、打たれ弱い獅子を下した瞬間だ。どうした特殊部隊！一部始終を観ていたニーナが敗北者を椅子に縛り付け、噴射するビールでのインク洗浄なる懲罰が行われる。受刑者の一人が、発泡麦汁で溺れる感覚によがっていた。英国は変態まみれだ、救いようがない。

二日目を終える時点で、ブリジットはライフルマンならぬライフルメイドへ完成しつつあった。屋内の掃討手順と立ち位置を憶え、移動しながらの射撃も十分な練度に達した。彼女が強くなる分、俺の人の心がすり減った。仲間のいびきが響く兵舎のベッドで嗚咽を漏らす

まいと枕を噛んだ。
　三日目は戦闘訓練も程々に、無線通信での規則や味方との意思疎通の教練に費やした。作戦地で孤立した際に備え、付近を航行する友軍機へ救援を要請する手順を教え、古い車を盗んでエンジンを無理くり掛ける蛮行も伝授した。もっとも、これはＳＡＳ加入のずっと前に仕込まれた技能であったが。
　ＳＡＳ選抜訓練における最大の関門は、気候の移り変わる大自然を相手取った長距離行軍だ。部隊創設から訓練課程の変更は度々あれど、この強行軍だけは変わらない。通称『ファン・ダンス』。本気で連隊を志す兵士に、この儀式を知らぬ者はいない。平たく言うと、時間内に決められた経路を踏破すればいいだけなのだが、この試練から帰らなかった者も多い。屈強な兵士を屠るファン・ダンスの実態は、雄大な自然との一騎打ちだ。刻々と気候の変化する険しい山野を、背嚢だけで二十キロは下らない装備を身に着けて歩く。高所の強風に身をこごめ、指定された複数の中継地点で将校に挨拶して周る。それも、複雑な山岳地図を読み解きながら。オフィスでコーヒーを啜っている限り、およそ要求されない技能のオンパレードだ。かてて加えてこれが月のない夜間にも行われるのだから、そりゃあ死人だって出る。かつて選抜訓練で命を落とした兵士が、霧の夜に合格の証であるベレー帽を求めて彷徨うという噂も、安易に否定出来ない。
　そういう訳で私物のラップトップで〈Ｇｏｏｇｌｅアース〉を開き、左脇にブリジットを控えさせて経路の予測と注意箇所の確認を行った。訓練地に指名される山野は幾つか挙げられるが、十中八九ウェールズ南部のブレコン・ビーコンズ自然公園があてがわれる（ファン・ダンスの名は当地の最高峰『ペン・イ・ファン』から来ている）。主要な三角点を押さえ、紛失に備えて予備の地図を持ち、山の斜面を垂直に登らず遠回りしてでも緩やかな箇所を探せとの講釈を、ブリジットは整然とノートに綴った。
　頭脳労働のストレス解消に射撃で筋肉を解させていると、弾倉を交換するブリジットが問い掛けてきた。
「ヒルバート様は、何を兵士の仕事を捉えられてます？」

特殊部隊に何を問うと思えば、甚だ愚問であった。
「三つある。歩いて、耐えて、寝て……それから考えない事だ」
テロリストから鹵獲したＡＫ４７を再び構え、ブリジットは眼を細めた。
「じゃあ、簡単ですね」
何処の国でも、兵士に向かない人種というのがいる。言われた命令にだけ従っていればいいのに、勝手に四つ目の課題を作ってしまうやつらだ。目の前の特殊部隊候補生の背中が、この数日で急に大きくなった。
走って、撃って、怒鳴って、食って、聞かせて、寝て、また走って……。そうして、付け焼き刃を磨く三日間が終わった。早朝、ブリジットはダニエルと俺の見送りで砂漠の滑走路を発つ。舎弟を伴ったのは、阻止機構としての苦肉の策だ。甲斐性なしが恋人を引き止めるかもしれない暴挙に及んだら、ダニーが身を挺して俺に組み付いてくれる。本当は母国の恋人に抱き付きたいだろうに。
雑多な積み荷を満載する輸送機が発つ直前、ダニエルに少し離れた所で待って貰い、ブリジットと二人きりになる時間を設けた。感情を殺すのに必死で何を言ったか定かでないが、最後に彼女が頬にキスをして「一人でしちゃ駄目ですよ」なんて囁く。反論に喉が音を結ぶのを待たずして、教え子は輸送機のタラップの奥へ消えていった。
翼下に備える四基のターボプロップ・エンジンを唸らせ、柔らかな輪郭のハーキュリーズが悠然と滑走路を離れる。恋人を乗せた輸送機が晴天に呑み込まれ、一秒毎に俺との繋がりが弱まる。輸送機の尻が八倍率の双眼鏡から失せるのを見届け、舎弟に先立って兵舎へと踵を返す。
「早く戻ろう。ここは眼が乾く」
背を向けてわざとらしく点眼液を注し、左手で顔を覆う。もう一言も発せなかった。極端な早足で帰路に就く小隊長に、ダニーが距離を空けて着いてくる。唇を噛み締めると、指の隙間から人間らしい感情が漏れた。
そこからの一箇月は仲間曰く、気質の荒いボケ老人の介護がＤ中隊

の任務に加えられたらしい。クラプトン小隊長殿は常に血走った眼で射撃に没頭し、高濃度のアルコールを摂取しても寝付けず、深夜に仲間が寝静まった兵舎を抜けて走り回っているのを兄弟に連れ戻された。次男の病状を深刻と判じた親父はヘリフォードの連隊本部から軍医のベンを召喚し、昏倒するレベルの睡眠薬が夜間の馬鹿息子に投与された。これが老害への対処か。

そんな始末であったから、俺は現地軍を訓練する任を解かれ、起きている間はカウンセリングを受け、先の作戦でトラウマを負った同胞と傷の舐め合いに従事していた。その場の誰もが他者を責めず、示し合わせた様に上層部への不審を言葉にしなかった。ただ、疑念に怯える視線が全てを物語っていた。士官として緊張の緩和に助力したくとも、不用意な発言は厳禁であった。現状、水面下で動く上層部の企図は知れず、連隊内部で根も葉もない憶測が飛び交う。迷えば兵士は駄目になる。そこに来て小隊長が躁鬱に喚くのだから、これ以上の負債は抱えられない。

先の貨物船襲撃での殉死者の家族から、続々と訃報への返事が部隊に届いた。生き残った仲間は彼らの不条理な死を追想し、涙も流せずに困惑の無表情を貫いた。彼らの当惑と時を同じく、D戦闘中隊に補充要員が配属された。本国が我々に寄越したのは新米隊員ばかりで、左右はおろか自分自身も見えていない具合であった。にもかかわらず、特殊部隊としての日が浅い彼らは、先任の兵士に漂う違和感を察していた。ここはもう、かつてのベトナム戦線と変わりない。

ブリジットの選抜訓練が本国で始まって、二週間が経過した。クラプトン兵卒の訓練進捗を告げる本部からの通達が、六通目に達する。写真の一枚もない書面を一目してシュレッダーへ放り込み、コピー用紙の千切りを灰皿へ空けて火を放つ。空に舞った指先大の紙片が、目の前で燃え尽きた。燃えさしを兵舎のすぐ外の砂に混ぜ、整備を済ませたC8カービンをたすき掛けした。月が雲に隠れており、NVG（暗視装置）なしには基地から一歩も出られないだろう。

「ボス！忘れ物か！」

ランドローバーの運転席から、フル装備のダニーが叫ぶ。こんなに

格好悪い不良士官を、あの弟子はまだ慕ってくれていた。
「歳を取ると小便が近くてしょうがない。その点、砂漠はいいよな。見渡す限り便所だ」
「ああ。砂漠の主成分って知ってるか?ラクダとヤギのうんちだよ」
「そこにテロリストの干物も入れとけ。抜群の肥料として売れるぞ」
紳士らしい気品を漂わせ、ダニーの車輌の助手席へ尻を埋める。これから丸二週間、第一六小隊は再びテロリストの遊撃任務に砂漠を奔走する。小隊がキング・ハリドへ戻る頃には、選抜訓練を突破した教え子が中東へ戻ってくる手筈だ。高出力のエンジンが始動に唸り、前方偵察を受け持つ四台のバギーが検問を通過した。ダニーがアクセルを踏み込むのと一緒に、ＰＴＴスイッチに掛けた指に力を込める。
「アルファ・ワンより全部署へ告ぐ。これより、敵情偵察及び、遊撃任務へ出立する」
〈了解、全アルファの出立を許可する〉
生理でもないのに機嫌の悪いシェスカの応答を合図に、全隊員がＮＶＧの電源を入れる。ランドローバーのタイヤが地を掻き鳴らし、濛々たる砂煙を巻き上げた。急発進した四輪駆動の戦闘車輌が、前を行く偵察バギーの後を追う。攻撃車輌の車列が事故を起こすぎりぎりの速度で走り、後方で軍事都市が地平線の下へ沈んだ。そろそろ頃合いだろう。
「全アルファへ告ぐ、以後十分間、小隊を無政府状態とする」
荒唐無稽な言を発し、小隊の全員が仲間内で取り決めた周波数へと切り替える。上層部の裏をかこうなどと、高等な目論みはない。我々には、懸念や愚痴を吐き散らす場所が必要だった。情報統制が敷かれた軍事都市を任務で離れる間、少しばかりのガス抜きを禁ずる規範はない。
作戦用の無線に、仕事と無関係の汚い単語が飛び交った。ブレナン中将への中傷。貧弱な官給品への悪態。不味い食事を理由にした労働組合結成。シェスカのおっぱいに話題が及ぶと、普段から物静かなショーンがむきになってスピーカーを震わせた。新入りが呆然とするのを歯牙にも掛けず、小隊は貴重な六百秒で二週間分の鬱憤を精算

した。俺は小隊の暴動には加わらず、早々に周波数を作戦用のチャンネルに戻した。通信が途切れた件に関して、作戦本部の追求はなかった。軍歴の長いシェスカはこの道のプロであり、事情を察していた。もっとも、砂漠のど真ん中で自分のおっぱいの姿形が論じられていると知れれば、その限りではないだろうが。優等生ぶった物言いで本部との通信を終了し、助手席に設置された機関銃に頬杖を突く。我が身の破滅なんぞ頭の隅にもなく、新たな教え子の安否だけが気掛かりであった。

払暁を前に、車輌の隠蔽に都合の良い自然物を探しに掛かる。偵察バギーを駆るオスカーが、左右を深い渓谷に挟まれたワジ(涸れ川)を発見し、他の住人の痕跡がないのを確かめる。干上がった河床は常に日陰があり、明け方の時分では寒いくらいだ。急激な豪雨の気配はなく、家畜が産み落とした糞の臭いもしない。満場一致で、その日の宿が決まった。

車輌に偽装を施して寝床を設け、一時的な便所を掘るのに十五分と掛からなかった。最初の見張り二人を選定して一眠りすると、夢も見ない内に時分の見張り番が回ってきた。寝床から偽装ネットの外縁へ腹這いで移動し、双眼鏡を構える。昼間の太陽が眼下の生命を拒絶し、乾燥した大地が見渡す限り続いている。動くものは何ひとつなく。夜はあった霧散していた。環境保護団体は嘘ばかり吹聴する。北京の大気が汚染され、ロンドンの川にヘドロが流れているのは事実だ。それでも、我々は青空なんか欲しくない。二一世紀の澄んだ空気の下に、平和な国などないのだから。

ひと月前の遊撃任務と、何ら変わりはない。日中に双眼鏡の静止画を眺めて過ごし、夜間に敵が拠点を造りそうな場所の付近へ移動する。ＮＶＧの不鮮明な視界で車輌を走らせていると、本部が無人機による敵拠点の発見を報せる。晩を使って指定座標の付近まで移動し、敵と目と鼻の先で野営する。次の夜に勢力の規模を査定し、本部へ指示を仰いで更に一日待つ。この一日が要らない。そして大概、次の夜で敵拠点に襲撃を掛ける。死の危険を顧みず渇望した特殊部隊の生活に、興奮を抱けなくなっていた。作戦の秘匿性からブリジットの現

状は通信で窺えず、見張りに就いていない時は睡眠薬で脳を黙らせた。

夜になると、連隊の中で浮いた自覚はことさら強まった。寝過ぎで気だるい自分に反し、仲間の殺気立った空気に股間が萎縮した。誰もが陰謀論と姿の見えない敵を抱え込み、やり場を失った苛立ちがその血中を巡っている。任務と仲間の死を楯に、彼らは憂さ晴らしの矛先を求めていた。幸と見るべきか毎晩の仕事には事欠かず、作戦本部は特定済みの敵キャンプを我々に報せ続けた。

テロリストにとって、日没は悪夢の顕現に等しかった。事前に得た情報を元に襲撃計画を構築し、攻撃車輌が砂漠の闇を疾走する。寝静まった敵地を四輪駆動の巨獣が取り囲み、ヴェストの合図で怒濤の攻撃が火蓋を切る。狙撃なんて穏やかなものではない。初めから車輌に搭載した重機関銃と擲弾発射器が火を噴き、キャンプ中央に駐まる改造トヨタが無惨な姿で宙を舞う。辺り一帯で悲鳴と嬌声が上がり、テントが爆風に炎上する。アッラーへの叫びが充満する光景に味方は悪態を垂らし、更なる蹂躙を展開した。

襲撃から数分も経つと、敵キャンプは地球上から消え去っている。過去にテロリストが居住していた座標には、瓦礫と死体があるだけだ。怒気の冷めやらぬ味方が死体を不必要に追撃し、書類や情報端末の一切合財がランドローバーへ積み込まれた。用済みのテントと死体には火を放ち、寝床を求めて残骸を後にする。傭兵まがいの十字軍もかくや、ヒトが壊れかけた第一六小隊の通行後に、えせジハーディストは例外なく皆殺しとなった。謀略に殺された仲間の仇討ちと称した復讐が、彼らへ捧ぐ哀悼でなかったのは確かだ。

任務を建前とした虐殺の二週間が終わり、連戦に汚れた車輌が軍事都市への帰路を辿る。道中を通して、新人らは初の実戦に興奮冷めやらぬ様子であった。古参連中の瞳に、光は戻らなかった。彼らは一〇〇に達する死体を捧げようと、失った戦友と心の平静が戻らない現実を悟った。小隊の大半が満身創痍に至り、数日前の俺みたいになっていた。ダニエルは不甲斐ない上司のお目付役を、変わらずに続けてくれた。可哀想な舎弟はハンドルで車輌の舵を取り、部隊運営のままな

らない小隊長の扱いに気を揉んでいた。事実、この遊撃任務の最終的な判断は、俺の兄と舎弟に懸かっていたとしても過言ではない。とにかく、基地へ戻ったらビールを小隊と支援部隊に奢り、積もる話を聴き回らねばなるまい。覇気を失ったベテランが、新人らの若気に勢力を取り戻す可能性だってある。

夕暮れ時の基地は活気に溢れていた。何重もの検問の内側で米兵が腕立てに勤しみ、でっぷりとした坊主頭の伍長がよく分からない動物を丸焼きにしている。海賊版のＤＶＤを売る現地民の屋台で、白人兵士が値切りに頭を下げていた。「ノーゥ！ユウハフトゥペエイ！」店番の子供は一歩も譲らず、持てる英語技能を総動員して値札を指差す。二ドル九九セント、買ってやれよそれくらい。和気藹々を体現する米軍の小集団を脇目に、マークの存在が恋しくなった。

結局、この一箇月にマーク・ラッセル・ペイジの連隊加入は為されなかった。如何なる逆境にも耐えられる彼の忍耐――鈍感なだけかもしれないが――があれば、この内部離散の危機を乗り切る光明を見出せるやもしれないのに。

マークは精神面のみならず、肉体も他に抜きん出た戦士であった。七・六二ミリ弾を使用する汎用機関銃を好み、アフガニスタンの急峻な山岳でも息ひとつ切らさぬ健康優良児だった。彼の機関銃が放つ弾幕は固定砲台と呼んで差し支えない密度で敵を圧倒し、所属するグリーンベレーでは『お喋りマシンガン』の二つ名で通っていた。補充要員に不足を感じる訳ではないが、心の拠り所を押し付けるのはお門違いであろう。ヒルバート・クラプトンは、いつだって女々しいのだ。

ところがどっこい、今日からそんな暗澹たる日々とはおさらばだ。アメリカ様に間借りしている車庫へランドローバーとバギーを納めると、小隊の面々は各々のベッドで荷物の整理を始めた。俺は上層部に提出する書類仕事と報告を簡潔に片付け、その足で兵站部門へビールの催促に出撃する。敵から鹵獲したルーマニア製ＡＫ――ちょっとしたレア物だ――と引き替えに入手したビール籠を兵舎へ届けると、ちょっとした狂乱が起こった。ベッドで眠る隊員も一瞬で寝床を跳び下り、我先にと瓶詰めされた麦の恵みへ突っ込んでくる。興奮す

る気持ちは分かる。でも小隊の指揮官を突き飛ばして床に転がしたままっていうのは、よくないんじゃないかなあ。
ビールを確保した連中は、綺麗に二つの派閥に分かれた。知性を捨てて騒ぎ立てる若造と、傷心の古参連中だ。適度なアルコールが会話を促し、多少なりとも彼らの精神が癒える事を祈った。空のビール籠を片付けてシャワーで身体を洗い流し、少しはましな姿になってから、俺も私物のドライジンをちびちびやる。時刻は十九時を回っていた。大事な荷物の到着予定が、二時間後に迫っていた。
馬鹿騒ぎに興じた仲間は揃っていびきをかき、ダニエルを含めた顔馴染み連中もナメクジよろしく潰れていた。ショーンは自分のベッドで静かに寝息を立てている。その手に、マシューと肩を組んでいる写真が握られていた。ジェロームは……何であいつ全裸なの？急場凌ぎの措置として、やつが着ていたと思しき衣服を掛けてやり、股間を〈プレイボーイ〉で隠す。馬鹿野郎、凍えちまうぞ。
床に散乱する酒瓶を蹴って音を立てぬ様に兵舎を抜け出し、車庫に駐められたランドローバー・ウルフの運転席に滑り込む。滞りなくエンジンが掛かり、ヘッドライトが夜の基地に灯る。付近を歩く影はなく、ＳＡＳの借地一帯が静まりかえっていた。こいつは好都合と慎重に発進し、敷地南側の滑走路へ進路を取る。飲酒運転にはなるが、大荷物の迎車故に致し方なしである。憲兵さん見逃して。
安全運転を心掛けつつ、襟を掴んで臭いを確かめる。戦闘服は洗濯済であるし、汗も流した。久々に合う好きな子に会うのだから、恥はかきたくい。下らない見栄に、間抜けな笑いが起こった。これから最も非道で陰惨な姿を晒すというのに、メッキを塗って身繕いとは。
誘導灯が点々と灯る滑走路脇に車を駐め、使い込んだ双眼鏡を覗き込む。抜群の透明度のレンズには星々が輝くばかりで、輸送機の影は微塵もない。星見て涙する歳じゃないんだよ。
「早過ぎたかしら……」
腕時計の針は通知された到着時刻、二一三〇時を指している。車内で待つ間に滑走路の警備兵に何度か誰何され、その度にＩＤカードを提示する羽目になった。おのれ新入りめ、少尉殿を待たせるとは何事

か。そうでなくとも形式上とはいえ、あいつは俺のメイドだのに。普段は完璧なくせして、肝心な時に限って煩わせる。上空から航空機のエンジン音が襲来する毎に双眼鏡を構えたが、任務を終えた戦闘爆撃機をレンズに捉えては肩を落とした。

退屈と逸りで暴れ出しそうになって三十分後、ようやく股間に響くターボファンの回転が轟いた。煮詰まった憤りに頭部が弾けそうになりながら、今度こそと双眼鏡を眼孔に引き付ける。歯軋りで視界が安定しなかったが、何とか機体の輪郭を捕捉する。ハーキュリーズには、随分とでかい影だ。恐らく、C―17グローブマスターだろう。巨鳥が滑走路に迫り、その図体からは不気味なまで滑らかな接地を見せて停止した。民間の航空機ではあり得ない手際で搭乗員が積み荷を降ろし、続いて英陸軍と見られる兵士が続々と地上へ降り立った。武器に欠陥まみれのSA80をぶらぶらさせている辺り、SASやSBS（特殊舟艇部隊）ではないらしい。三十人ほどの兵隊が列を成して、滑走路から移動してゆく。仲間同士で頻繁に会話している様子が散見されるから、機内で初めて顔を合わせたクチではないのだろう。

そんなのはどうでもいい。降りてきたのがイギリス人でも火星人でも、こちとら関心なんぞからきしない。腹立たしく車の床に地団駄踏み、熱した血の冷却に車外へ飛び出す。と、英兵の最後尾に大分遅れて、小柄な人影がタラップを軽快に跳び降りる。幅が身体の二倍あるベルゲンを猫背気味に背負い、理想的なスタンスで滑走路を数歩行くと、グローブマスターの機内へ向けて大手を振った。可愛いというのは、時として罪だ。むさい男では誘えない油断が、あいつに掛かればちょっと口角を吊るだけだ。その彼女と、望遠レンズ越しに視線が合った。ほうら、ずるい。憤懣がすっかり失せてしまった。いかついライフルケースを片手に無邪気なものだ。空いている手でカービンを抱え、少女はこちらへ駆け寄ってくる。見て、すっごく良い笑顔！つくづく甘い自分に辟易したが、ともあれあの子はこちらの世界へ乗り込んできてくれた。今はその事実を快く受け入れ、ここに至るまでの努力を称賛してやるのが上官の責務だろう。

だぶ付いた戦闘服はサイズの合ったものがあつらえられ、再三の洗濯で使用感が溢れている。そのくせやっぱり顔は日焼けせず、従順な微笑みを湛えたままだ。主人まであと三歩のところで彼女は姿勢を正し、社交界の令嬢もかくや、手慣れた所作で砂色のベレーを被り、見事な敬礼を披露する。

「お待たせ致しました。ブリジット・クラプトン上等兵、只今より第二二ＳＡＳ連隊へ配属となります」

形式なんざ知るものか。力の限り、愛しい新兵を抱き寄せる。真新しいベレー帽が、涙で揉みくちゃになった。

奴隷迎合【１１―１】

【１１】

ブリジットが連隊に加入して、一週間が過ぎた。連隊の生活に新しい風が吹き込むものの、ここ中東は何も変わらない。街では治安維持部隊の兵士が日々死傷し、本土でやもめが涙を流す。近代は減少の一途であった戦死者数は、湾岸戦争を契機に再び上り坂に差し掛かっていた。ソ連の前例を鑑みない米国は、中東からの撤退案を棄却した。道連れを食った英国は、愚鈍な盟友の尻拭いに兵士を増派する。国際法で奴隷の戦争介入は禁じられているにもかかわらず、我々は非正規のメイド兵を頼るまでに追い詰められていた。

とはいえ悪い事ばかりではない。朝方にほの暗い兵舎で目を覚ますと、隊員の枕元にはＭＲＥ(米軍の携帯糧食)が配給されている。兵舎の食糧事情全てをブリジットが管理し、兵隊の心身の安定を慮っていた。各個人に同じメニューが連続で供される不便はない。気落ちした者にはチョコレートを配り、塞ぎ込んでいる兵士の存在はベン・アーリー内科医へ伝達される。当初は俺の監察医として本国から出張したベンであったが、想定を超えたＰＴＳＤ患者が連隊に発生したせいで、しばらくはサウジに拘束される羽目を喰っていた。本人は緊張でボケ防止になると哄笑していたが、第三世界の悪環境に神経を蝕まれないか懸念が募る。

ブリジットの介入は、部隊の健康管理に止まらない。元より現地の通訳として雑務を振られていた彼女は、連隊による現地部隊の訓練にも重用された。出国前に座学を受講しているものの、我々のアラビア語は片言止まりだ。非公式のＳＡＳ入隊以来、ブリジットは単なる通訳ではなくなった。その矮躯に旧ソ連製のＡＫＭを携えて指導を行う、極めて優秀な戦闘教官だ。自分の銃を提げて基地を闊歩するあの子は、低いたっぱと眠たげな美貌を除けばプロの歩兵に違いなかった。

されど、傍からすればブリジットは得体の知れぬ部外者でしかない。過酷な選抜訓練とそれに連続する継続訓練を耐え抜き、血涙の果

てに連隊のベレーを手にした新米らは苛立っていた。陸軍の規則通り髪を団子にせず、何食わぬ顔で兵舎に寝床を構える彼女を、快く思わない輩がいるのは明らかであった。事前に予想された不和ではあったが、端から身内がしゃしゃり出るのも禍根を残す。しばらく動静を見守る姿勢でいると、状況は勝手に進んでくれた。仲間から聞いた噂では、どうやらブリジットへ個人的に嫌みを垂れる、背中を突き飛ばすという、程度の低いちょっかいを加えていた新入りがいたらしい。そのしつこさが、ブリジットさんの逆鱗に触れた。振り向き様に頬桁へ良い一撃を貰い、そいつは口内を三針縫う憂き目に見舞われた。おまけにその後の三日間は、配膳担当のブリジットからベジタリアンメニュー――品質改良の為された現在でさえ廃棄物扱いのＭＲＥが供された。可哀想なやつ。その報せを聞いた小隊長は、ちょっと誇らしかった。

砂漠でのテロリスト遊撃の興奮も冷めやり、新入り連中も小隊の環境に適応したかに見える。自分の内で万事が平常に戻りつつあったが、マークから連絡がない現実に不安が募る。幾ら何でも遅過ぎる。何度か親父を問いただしたが、関知していないの一点張りだ。本国で連隊本部に出入りしたブリジットも、彼に関する情報は得ていないらしい。あの豪傑がぽっくり死ぬのは考え辛いが、いよいよ心配になってきた。通信中隊を通じてマークの引っ越し先へ電話を掛けても、快活な留守電録音が流れるのみだ。妻のジェーンや、三歳のステファニーさえ受話器を取らない。一体、どうなってるんだ。俺の知らぬ間に、ブリテン島はキャトルミューティレーションされちまったのか。

海を越えた疑念を払う為、この頃は夜の酒盛りを辞退して屋内射撃場に入り浸っていた。灰色のコンクリートに囲まれた密室、監視員の他に誰もいない施設は貸し切り同然だ。イヤーマフ（聴覚保護具）を頭に指定されたレーンで弾倉に給弾し、銃床を胸に引き付けて呼吸を整える。右人差し指が、冷たい引き鉄に触れる――銃との一体化。官給品のＣ８カービンから、標的へ超音速の飛翔体が放たれる。人の形を模した標的の心臓部分に、豆粒大の孔が穿たれた。脱力して肺の澱んだ空気を排出し、銃にセイフティを掛けて手許のコンソールを操作

する。標的を吊るアームが射撃ブースへやってくると、こめかみが痒くなった。気晴らしのつもりが、別の些事を抱え込んでしまう。ほとほと困った性分だ。

傍らに置いた弾薬箱から、弾薬ひとつを摘まみ上げる。五・五六×四五ミリ、小口径高速弾。肩書きだけなら立派だが、その弾頭はヒマワリの種ほどもない。弾頭重量は四グラムと、それまでの七・五六×五一ミリ弾と比較して二分の一以下だ。射出された五・五六ミリ弾は、攻撃目標への弾着時にその姿を変える。目標の皮膚を破って体内へ侵入すると、自壊して複数の破片に分かれる。断片化（フラグメンテーション）と呼ばれる現象で裂けた弾頭は、一つひとつが鋭利でいびつなナイフとなり、体組織を抉り断つ。陸戦条約が人体の過剰な損壊を禁じた行く末が、過去最高に惨たらしい代物とは皮肉が効いている。ヒューマニズムを標榜するお偉方は、矛盾だらけの紙切れで科学者を猛り狂わせた。彼らの逆襲が生んだこの弾丸は、撃発で得た運動エネルギー全てを目標内部で消費し切る。この小さな鉄塊には、偶像なき倫理に反した人間の業が込められている。

……と、学者先生方は決まってこいつを評価なさるが、個人的にはすこぶる気に入らない。何しろこの弾丸、ちょっと距離が開くとまず命中しない。弾頭が軽過ぎて、横風や木の葉への衝突で容易に弾道が逸れるのだ。カービンの短い銃身から発射した場合、自動車のフロントガラスを貫通しない。命中時の衝撃まで軽いので、即座に敵が倒れてくれない。新型のＭ８５５Ａ１は現場の不満全てを払拭したと謳っているが、数箇月程度の運用で何が分かるものか。前線で銃をぶん回す特殊部隊が一人としては、多少の反動や携行弾数を犠牲にしても七・六二ミリを使いたい。口径がでかい分だけ、出血量は多くなるに決まっている。

――何千回と繰り返した独り問答で、無意味なのは随分前から悟っている。俺が思う程に五・五六×四五ミリ弾は捨てたものではないし、こいつが秘める殺傷能力は法医学が立証している。命中時の殺傷率は七・六二ミリ弾を裕に超え、その創傷は目を覆いたくなる。携行する弾薬の数が、敵地での生命線であるのも真理だ。それでも、断片

化の確率は百パーセントではない。己の命を託すのに、たったの四グラムは軽過ぎる。

煩悶しつつ薬莢と銃を片付けて兵舎へ戻ると、酷い有様であった。カマボコの内側はアルコールと胃液、消毒液の臭気で汚染されていた。医療バッグを抱えた隊員が右往左往し、床に転がる仲間の手当てに奔走している。相棒の頬の切創を消毒する新顔から事情を訊くに、どうやら小規模な乱闘があったらしい。アルコールが精神療養の範疇を超えて、フラストレーションの堰を切ってしまったのだ。その新顔によれば、発端は古参ひとりの起こした癇癪だと言う。果たせるかな、陰謀論は存在し続けている。少し離れた所で、ブリジットが圧縮包帯と止血帯を手に駆け回っていた。組織としては絶望的な境遇だが、迷彩服の看護婦がいるだけ救いはあるやもしれない。

奴隷迎合【11―2】

二〇一一年九月九日。内戦続くリビアで、カダフィ大佐に対する投降期限が迎えられた。大部隊を投入しない愚鈍な米政府に、元よりない現地民の信頼は失墜した。軍の補佐に就くＰＳＣ（民間軍事企業）への風当たりも悪化するばかりで、現代の傭兵は物資を一キロ搬送するのに寿命を一年擦り減らした。

資本主義国家における兵隊の命の価値は、ベトナム戦争から上昇の一途を辿る。イギリスも例外なく時の煽りを受け、民間への業務委託の比重は上昇した。過去にイラク中部・ファルージャで惨事を招いたＰＳＣ〈ブラックウォーター〉と同じ轍を踏み、内部統制の腐敗した企業との癒着の回避に、我らがＳＡＳは策を打っている。

日中の業務を終えて兵舎のベッドに寝そべっていると、重いエンジン音が近付いてくる。半身を起こして見れば、開け放たれたシャッターの向こうに砂煙が上がっていた。数台の輸送トラックとランドローバー・ディフェンダーが、列を成してこちらへ向かってくる。車列は兵舎前で駐まり、すかさず連隊付准尉が応対に駆けてゆく。輸送トラックの鈍色の荷台と車体ドアに、一対の翼を有する楯のエンブレムがあった。

〈レジメンタル・セキュリティ〉は本部をロンドンに置く、我々の主要な取引相手である。総力戦の大戦時から一転、冷戦期の軍縮で軍人の総人数は激減した。傭兵需要の再燃である。同社は主に中東、アフリカを活動拠点にしており、物資輸送や要人警護・施設警備を専門としている。顧客への絶対的なコンプライアンスと職員の低い死傷率により、内外の評判は芳しい。社員の採用面接には元ＳＡＳのＣＥＯが必ず出席し、その場の直感で合否を通達する。この破天荒な代表、その名をパトリック・クラプトンという。馬鹿たれ、やっぱり癒着じゃねえか！

結局は親族経営が根付いてしまっている内部事情だが、存外に綻びの生じる隙はない。それどころか社員の大半を退役したＳＡＳや陸軍パラシュート連隊、ＳＢＳ（特殊舟艇部隊）で構成している叔父の

組織が、古巣である我々を裏切る可能性は限りなく低い。人事部の書類ミスで一昨年に馬鹿野郎を雇いかけたのはさておき、相当に心強い後ろ楯である。ちなみに我らが連隊長ブラッド・クリーヴズはクラプトン・ツインズと同期であり、故に現役時代から連隊長はごま塩頭であった。可哀想なボス。

車列先頭の黒のディフェンダーから、筋肉質な男が降りてきた。プレートキャリア（抗弾ベスト）の下は白のＴシャツにジーンズという出で立ちで、軍基地にしては現実味の欠けた光景だ。男は連隊付准尉と軽くやり取りし、後続のトラックへ卸下（しゃが）の指示を出した。ＰＳＣ職員が続々と下車し、荷台から兵舎の玄関口へと物資の山を放り出す。個人宛の荷を待ちきれない隊員が、我先にと荷台を見て回る。遠方の朝日の下で、ジェロームが早速〈ペントハウス〉のバックナンバーを掲げて咆哮していた。兄ちゃんは恥ずかしいよ。

ＰＳＣ職員の殆どは既に顔見知りで、目が合うと揚々と笑み掛けてくる。積荷の搬出を終えると、彼らはＯＧとして連隊とくっちゃべり、煙草を何本か吹かしてから基地を後にした。――あの中にネズミが潜んでいるのでは。信用に足ると評しておきながら、舌の根も乾かぬそばから下卑た所感に囚われる程、内心参っていた。

おじきの部下が届けてくれた物資で、数週振りにまともな夕食が供された。ブリジットと通信中隊のシェスカ、加えて我らが麗しき姉貴様の助力で展開されたビュッフェに、古参連中は誇張なく涙した。空腹ではろくな物を考えない。「腹が減っては戦は出来ぬ」と、一日に二四時間以上を労働に消費する日本人も仰せだ。彼らでさえ食事なしに従事出来ぬ戦争に、軟弱な西洋人がどうして硬いビスケット数枚で臨めると言うのか。まあ、腹が満ちて戦争に勝てるなら苦労ないが。

料理が配された長机に、男共が錆の浮くアルミトレイを手に行列を作る。その端に見知った顔が座していた。スウェット姿の中隊長リチャード・クラプトンが、せこせこ握り飯の大隊をこさえているのだ。「暇で仕方ない」というのが本人の弁だが、その目許に黒い影が落ち込んでいる。馬鹿野郎、息子の前でうそぶくな。日本に長年かぶれているだけあって、その手際は鮮やかだ。塩をまぶした手を米びつに突っ

込んだそばから、綺麗な三角形が生み出される。傍らのバットに、寸分違わず規格化された握り飯が儀仗兵みたいに整列した。粘度の高い白米と平生以上に突拍子ない中隊長に仲間は当惑したが、でかい米びつはちゃんと空になった。やたら硬くて旨味のないフリーズドライ食品に、やつらが戻れるか不安だ。それから、以前にも増して頻繁に兵舎を覗きに来る親父と、その理由が。とうに四兄弟だけで抱え込める問題ではなくなっていた。親父の白髪は、目に見えて版図を拡げている。

それからも親父殿は、気落ちする連隊員を慮る行動を続けた。前脚を失った地雷探査犬を兵舎に入居させ、昼間は頻繁に兵舎へ顔を出して道化を演じ、食事もおざなりで累積した執務にペンを走らせる。そこへ加えて情報収集にも従事しているらしく、気が付くと電話を顎に挟んで走り回っている。五十代の折り返しに、オーバーワークなのは明らかであった。

そうして遂に元気中年の代表がノイローゼを表情筋に臭わせた矢先、事態が動き出した。先日の貨物船でふん縛った捕虜が、積荷の発注元を吐いたのだ。我々が辛酸を舐めたダンマーム港の惨劇――その因縁の矛先が見付かった。

奴隷迎合【11―3】

九月十四日の早朝。連隊付准尉から緊急の招集が掛けられると、我々は兵舎のベッドを飛び出して会議室へ駆け込んだ。パイプ椅子が敷き詰められた会議室では、陸軍とＲＡＦ（英国空軍）の高級将校らが既にブリーフィング（要旨説明）の準備を整えていた。当然ＳＡＳ代表のクラプトン少佐の顔もそこにあったが、疑惑のブレナン中将の姿はなかった。戦闘中隊全員の入室を待たずして照明が落とされ、前方スクリーンに〈パワーポイント〉が投射される。脇の演壇に立つ情報将校が、興奮気味にマイクチェックを行った。

米軍の尋問官が捕虜から引き出した情報を元に、同量の金塊に等しい資料群が作成されていた。スライドの内容は貨物船で押収された武器の内訳から始まり、その出所である二人のならず者へ行き着いた。大量の武器を注文したのは『アラビア半島のアルカイダ（ＡＱＡＰ）』の幹部が一人、マフディ・イブン＝ジャリル・アフメドなる男であった。情報将校が事務的にアフメドの来歴を述べ、手許のラップトップを操作する。スクリーンの像に一人の男が映ると、パイプ椅子の兵士にせせら笑いが起きた。遠距離撮影されたた四六歳の小男は、彼らを束の間の優越感に浸らせた。褐色の肌に埋没した眼は異様に小さく、皮下脂肪が頬から染み出そうなくらい全身が肥えている。後ろ手を組んで尊大に構える構図なのに、胸よりずっと前に腹がせり出ていた。俺は笑えない。ニーナの管理なしでは、うちの親父とてそう変わりない。痩せぎすの取り巻きと一緒に写っているＡＱＡＰ幹部の写真は、不健康なアラブ闇経済の縮図であった。頭髪が後退して脂ぎった頭の頂に、マルーン（えび茶色）のベレー帽が乗っている。「被っている」のではない。ただちょんと「乗っている」のだ。醜くでかい頭のせいで、無理に被ればベレーが破れるのだろう。殺害するのに一切の躊躇もよぎらない、公害レベルの不細工だ。三年前に出身のサウジ国籍を剥奪され、現在はパキスタンに籍を置いている。ＡＱＡＰの本拠地たるイエメンの街中に隠れ家を構えているらしく、味方の戦闘爆撃機へこのでぶの根城をたれ込むのが我々の第一目標であっ

た。
「このツラで見間違えるかよ。確認なしで撃てるぜ」
「影武者なんか用意出来ないな」
「五キロ先からでも分かる。望遠レンズよっか、八倍スコープで捉えりゃいい」
くたびれた迷彩服の集団から、そんな軽口が叩かれる。矮小な醜男なのは確かだが、転移性テロ細胞の重鎮には違いない。脇が手堅いのは確実だ。とはいえ連隊に見付かってしまった以上、残念ながら幕引きの時だ。

奴隷迎合【11―4】

情報将校の合図でスクリーンのアラビア半島が消え、次のスライドに切り替わる。途端に、屈強な兵士らの余裕が消え去った。イギリスきってのごろつきが揃って沈黙し、隣のダニエルが息を呑む音さえ聞こえる。投射された灰色のスラヴ人に、連隊の兵士が放心していた。

背面から撮られた長身の男は、何処かを指差している。幅広の肩越しの顔が左半分しか見えないが、おぞましい冷酷さが静止画から這い出ている。画質は荒くとも、網膜にその容貌を焼き付けるには十分であった。類を見ない強圧に、英陸軍の最精鋭らがすくむ。士官の立場から明かせる訳もないが、俺も背筋が総毛立っていた。照明が落ちていたお陰で救われた。

情報将校が大袈裟な咳払いをやり、不良達の意識が現へ戻る。恐怖の伝染を、情報戦のプロの知略が断った。それでも、狼狽を仕舞いきれない兵士が散見されるのは事実だ。場を取り持った情報将校が、レーザーの光芒を走らせる。

「ミハイル・ペトロヴィッチ・バザロフ。キエフ出身の五四歳。元ＫＧＢの武器商人で、先のマフディ・アフメドの武器発注先だ。ロシア正教を重んずる厳格な家庭に育ち、若くして陸軍士官の地位を得る。その後間もなくＫＧＢ第一総局へ異動し、西側へのサボタージュ（妨害工作）等の秘匿作戦に従事。冷戦期から我々を手こずらせていた訳だ。ソヴィエト連邦崩壊の直前に本国から失踪、ＫＧＢ時代に築いたコネを元に地下組織を講じて、世界各地のテロリストに武器を卸す現在に至る。

気質は極めて残忍で、息をするのと同じ感覚で人を殺す。神出鬼没で地球上の至る場所に現れ、軍事衛星が直上に到着する頃には雲隠れしている。直近では先月、やつの位置情報を受けてチェチェンに飛んだロシア軍のＵＡＶ（無人航空機）が、逆に地対空ミサイルで木っ端微塵にされた。真偽はどうあれ相当な身の固めようで、ロシア側も手を焼いている。

本題に入ろう。諸君らＤ戦闘中隊は二手に分かれ、アフメドとバザ

ロフ双方の捜索・監視任務に当たって貰う。航空小隊と機動小隊はアフメドを担当、山岳小隊と舟艇小隊がバザロフを追う。先行部隊として、ＳＲＳ（特殊偵察連隊）とＳＦＳＧ（特殊部隊支援群）が現地入りしている。先方当局との外交処理は手配済だ」

無意識で手許の耐水メモにペンを走らせ、航空小隊に割り当てられた作戦地域の情報を書き殴る。古参の隊員はさておき、若い連中はバザロフ・ショックから立ち直れず、誰も筆記具を手に要点の記録を取れていない。彼らを無闇に責められはしない。雛の成長を待たなかったのは、他ならぬイギリスだ。イエメンの最新情勢は、各部隊長が咀嚼して部下に飲み下させる他にない。

情報将校はボトルの水で喉を潤し、襟を正した。右の目尻が一瞬引きつったのを、俺は見逃せなかった。

「イエメン国境と沿岸部は、二四時間態勢の監視下にある。我々の目を盗んでサヌアを出る事は不可能だ。だが、バザロフは話が異なる。事態を複雑にしているのは、やつが旧ソ連領に根城を構えている点だ。冷戦終結を機にロシアは衰えたが、未練がましくも旧共産圏へ兵を配置している。諸君らの技量を以てしても、特殊部隊の潜入はリスクが高い。ロシア側の穏健派と密約を結べば事は進むが、当方の外務省はプーチンを前に及び腰だ。失礼、話がそれたな」

苦々しい表情をひと撫でして、情報将校はビジネスの顔を取り繕った。もしサッチャー女傑が現役であれば、即座にＣＯＢＲＡ（コブラ：内閣府ブリーフィングルームＡで催される臨時の危機管理委員会）を招集して、先方のアポなしに大部隊を空輸するだろうに。彼女の即断に狼狽えたり、尻込みといった愚行は許されない。俺が背広組の一人であれば、かの貴婦人が臆病風に吹かれた官僚の胸ぐらへ掴み掛かり、見事なチョークスリーパーを掛ける御姿が拝めただろう。「早く兵を出しなさい！」と。来世ではプロレスのヒール役など如何でしょうか。リングネームは『アイアン・マーガレット』で決まりだ。そんなの、ＳＡＳだって失禁する。

奴隷迎合【11―5】

スクリーンからバザロフの写真がはけ、イギリスを中心に据えたミラー図法の世界地図が映る。やがて七つの大陸全てに無数の青い点が浮かび、続いて東欧と中央アジアに赤い点がまばらに出現した。

「青で示したのは、ここ十年間でバザロフが関与する犯罪の起きた場所……赤は実際にバザロフの所在が確認された場所だ。分布から見て取れる様に沿岸部のみならず、内陸や洋上さえもがやつの活動範囲だ。扱う商品は武器に止まらず、臓器売買や要人の誘拐、他の犯罪組織への斡旋行為や仲介……我々がおよそ考え得る国際犯罪を網羅している。出自を鑑みるにロシア国内の協力者の存在は確実だが、知っての通り、かの凍土の軍警には汚職が蔓延している。バザロフが我が国の国益に害為しているのは事実だが、やつ一人の排除にロシアマフィア全部を相手する余裕はない」

あの情報将校は人が出来ている。仮に俺が彼の立場なら、二言目には私情や愚痴をぼやき、ため息の絶えない座談会が約束される。最前線を引退する時分が来ても、司令部への転属は遠慮願いたいものだ。もしそんな辞令が下りたら、書類を改竄してヴェストをその椅子に着かせるのも躊躇わない。

「先方政府との交渉が如何に不利な着地点を用意するか、現時においては不透明である。東欧へ配置される部隊へは、近日中に辞令が下りる見通しだ。その間は現状の任を継続し、ロシア側の決定と英首脳部の判断を待機する。また、当該部隊へは本国での三日間の休暇が与えられる。状況が何処へ転がるか知れない以上、目立つ動きは控える様に。これは引き続き中東に残る将兵も同様だ。サウジアラビアの後ろ盾があるとはいえ、迂闊な言動は慎め」

ポインターを胸ポケットへ収める情報将校が、こちらへ意味深な視線を投げる。ほんのコンマ数秒、それで事足りた。彼が意図するところはつまり、アフメドの捜索に、サウジの支援は期待出来ない――もっと踏み込んでしまえば、我々は今いる国家そのものを信用出来ない局勢にある、と彼は音なき符帳を送った。成る程、おおっぴらに出

来ない訳だ。国家最高機密に属する特殊部隊の、情報漏洩が認められたのだ。無思慮な苦笑も許されず、胃がじくじくとうずき出した。

「具体的な作戦要綱は、追って伝えられる。この場においては如何なる質疑も認められない。以上。各自、予想される任務に備えよ」

プロジェクターとラップトップの同期が切られ、「信号なし」の案内が浮かぶ。照明の点灯も待たずに情報将校は退室したが、連隊の兵士はしばらく席を立てずにいた。先の講説が寄越したのは敵ふたりの名だけで、他は兵隊とは無関係に等しき政（まつりごと）に過ぎない。要するに、何の進展もなかったのだ。東側へかち込みを掛ける政治的な橋頭堡はなく、共産圏へ派遣される仲間の受け入れ体制は整っていない。どうやら航空小隊も砂漠生活が延期になりそうで、心が乾燥イチジクみたいになった。

奴隷迎合【１１―６】

　澱んだ人波に混じって会議室を出ると、廊下の突き当たりでブリジットが背中を壁に預けていた。胸の内のイチジクが、少しだけ瑞々しさを取り戻す。兵舎へ脚を引きずる仲間を尻目に、恋人へ駆け寄る。

「兵舎で待ってりゃいいのに」

「愛する旦那様が、しょんぼりしている気がしまして」

　口の減らない良妻だ。誰の注意も向けられていないのを確かめて、金糸の髪を撫でる。くすぐったげに目を細める新兵に、しなびた心が潤う。

　ブリジットがブリーフィングに参じなかったのには、幾つか理由がある。第一に、彼女は正真正銘に正規のＳＡＳではない。ＳＡＳの選抜訓練を通過した志願者には、継続訓練なる課程が待ち受けている。その必須カリキュラムをブリジットは履行していない。かてて加えて、彼女に課せられた選抜訓練の期間は一箇月と余りに短く、夫の色眼鏡を以てしても不公平は明らかだ。特殊部隊はその存在が「極めて異質」なのであって、決して他と共生不可能な「アウトロー」ではない。部隊入りした後もブリジットが炊事諸々を負っているのは、その辺りの帳尻を合わせる作意がある。

　だが、これらは内向きの弁明でしかない。公式の手続きを受けていない、元より軍人ですらない彼女の禁秘は、連隊内部に封じるのが望ましい。まして身内にスパイの影がちらついているのだ。軍に奴隷が在籍していて、しかも国外で先鋒を務める禁忌が外部に知れたら？国際的な違憲行為を看過する以上、別組織と立ち会う危険に我がライフルメイドを侍らせるべきではない。それに、可愛い嫁さんは独り占めしたい。

「悪いな、仲間外れにしちまって」

　ブリジットは即座にかぶりを振る。

「主の陰に徹せず、使用人が務まりましょうか」

「その矜持に救われてるよ」

一歩引いたプロの女中さんを伴って兵舎へ戻ると、山岳小隊と舟艇小隊の面々が旅支度に取り掛かっていた。数日中に、この兵舎から中隊の丸半分が姿を消す。元より不足していた人頭の半減に、鈍い頭痛を覚えた。荷造りに奔走する面々に楽観の色はなく、周囲を圧倒する覇気も失せている。新人らは突然の異動に当惑を隠せず、先任の下士官に後身の心をなだめるゆとりはなかった。

他方、アラビア半島に残る機動小隊と我ら航空小隊も陰鬱の渦中にあった。現地部隊の教練任務は別部署へ引き継がれ、砂漠での遊撃作戦は中断を余儀なくされた。隊員は規定区画を越えた外出を禁じられ、兵舎の換気扇がフラストレーションで詰まる。戦闘員にあてがわれたネット回線も遮断され、本国からの手紙には執拗な検閲が介入した。各自が物資を自由に調達出来ず、ジェロームはポルノの枯渇で寝たきりに陥った。機密保守の観点から、ショーンは通信担当のシェスカにおいそれと会えなくなった。ヴェストのキノコ絵日記は、三日前を境に更新が途絶えた。要人の毒殺に好都合な猛毒キノコへは、心ない猜疑の目ーー無理もないがーーを向けられていた。彼らは持ち主は誰に言われるでもなく、その手で友人を荼毘に付した。好いた相手が特異な殺傷能力を持つばかりに、彼は自らその苗床たる株を焼却する辛苦に身を苛んだ。雑多なゴミで満ちたドラム缶の中、ドクツルタケの美麗な子実体が焼かれる。純白の花嫁衣装が灰と化し、猛毒の霧が中東の蒼天へ散るその最後まで、防毒マスクを着けたヴェストはドラム缶をかき混ぜた。その日、顔面を覆うマスクを兄貴が外す事はなかった。

雑記ほか

登場人物

【登場人物】

◎ヒルバート・クラプトン（Ｈｉｌｂｅｒｔ　Ｃｌａｐｔｏｎ）

本作の主人公。

生誕日一九八〇年八月十五日とされる男性で、日系に近い肌色と多種多様な民族の混じった容姿の三十台。血液型はＡＢ型。

階級は少尉。行軍に用いない類の無駄な筋肉のない引き締まった身体で、顎の右下から首の中程に掛けて大きな傷跡が走る。

身長一八五・三センチメートル、体重九十キログラム、黒髪、瞳は濃いグレー。幼少よりストレスの多い生活を強いられていたために頭髪の大半が白髪で、定期的に染め直している。

特殊部隊兵士として卓越した身体能力を有し、野戦・狙撃・ＣＱＢ・肉弾戦・サバイバル・サボタージュなど、広範にわたる任務に対応するが、この基礎は奴隷の身であった過去、ＩＲＡのテロリストだった頃に培われた。

◎ブリジット（Ｂｒｉｄｇｅｔ）

生誕日　西暦一九九一年九月十五日、混血のイギリス人の二十歳。血液型はＡ型。

身体能力は高く、力は強いが筋肉が付いているようには見えない。稀有な学習能力を有し、興味の有無に関わらず何でも憶える。年齢の割に酷く冷静かつ現実的。

身長一五九・七センチメートル、体重五七・二キログラム、スリーサイズはＢ８５Ｗ５８Ｈ８３。前作より二年が経った現在はＣカップ（英国基準。アンダーバストは六五センチ。トップ・アンダー差が一七・五センチで、日本基準でのＤ）である。髪は灰色の強いくすんだブロンドで、肩甲骨下部より先まで伸びており、いささか癖っ毛が目立つ。瞳は冷たいグレー混じりの碧眼。

◎リチャード・クラプトン
階級は少佐。半分白髪の五七歳。血液型はＢ型。
身長一七四・三センチメートル、髪色はブロンド、ゲルマン系。
ヒルバートや彼に続いて保護された孤児の父親として、彼らを現在まで育てた。
変態的な嗜好とは裏腹に実力は高く、権威もある。
パックの納豆には、付属のカツオ出汁を掛ける流儀。

◎ショーン
クラプトンに保護された一人、三十歳。
身長一八二・八センチメートル、髪色は黒のゲルマン系。
ヒルバートと同時にＳＡＳに編入。Ｄ戦闘中隊航空小隊第１分隊長。
狙撃の能力を高く認められているが、本人は重機関銃を乱射するのが好き。

◎ヴェスト
ヒルバートと同時にＳＡＳに編入、クラプトンに保護された一人。
身長一八七センチメートル、髪色はブラウンのケルト系。
Ｄ戦闘中隊航空小隊第３分隊長の三二歳。
多趣味だが器用貧乏ではなく、あらゆる物事を完璧にこなす。
天に恵まれた容姿を持ち、ヘリフォードには彼の種子を狙う女が幾らでもいる

◎ジェローム
ヒルバートと同時にＳＡＳに編入。クラプトンに保護された一人で、イタリア人。
身長一八四センチメートル、髪色はブロンドのラテン系。
Ｄ戦闘中隊航空小隊第２分隊長。二九歳。
変態。父親と血が繋がっていないのに変態。

◎ダニエル・パーソンズ
ヒルバートにＳＡＳ加入を薦められた二五歳で、階級は伍長。
身長一七二・五センチメートル、髪色は黒。
面倒見のいい、同年齢の幼馴染の恋人がいて、ロンドンからヘリフォードまで着いてきている。
巻き毛の頭髪に砂が絡むので、縮毛矯正を考えている。

◎ニーナ
クラプトンお抱えの秘書及び愛妻。三十台にして麗しい美人で、非常に恵まれたプロポーションを持つイギリス人とロシア人のハーフ。ブラのカップはイギリス準拠のＥ。
身長一七三・五センチメートル、新雪を思わせる銀髪を持つスラヴ系。
元は浮浪児で、年端も行かない時分にクラプトンに拾われる。
アイドルではないので屁はするし、排便だってする。

◎マーク・ラッセル・ペイジ
元グリーンベレー。以前にヒルバートが中東でアメリカと合同で任に当たった際に、諸所の手助けをした男。
身長一八四・二センチメートル。三三歳。巻き毛のブロンド。
良妻と三歳になる娘がいる。娘は母親似。

◎シエスカ・エヴァンズ
身長一六九・三センチメートル、髪色はブロンドでゲルマン系。
第２６４通信中隊のオペレーターを務める三一歳。ショーンと交際している、包容力のある女性。
ケンブリッジ卒。

◎ジョック・ライオネル・ブレナン
イギリス空軍の中将。六二歳。アラビア半島でのＳＡＳへの協力

に物資補給を含めた航空支援を投入する。
身長一八〇・三センチメートル、髪はブロンド。立派な口髭をたたえる。

◎ミハイル・ペトロヴィッチ・バザロフ
元ＫＧＢの五八歳。旧共産圏で手にしたネットワークを元に、各紛争地へ武器・兵器を密売して荒稼ぎしている。
身長一八四センチメートル。強靭な肉体を有する。

◎マフディ・イブン＝ジャリル・アフメド
『アラビア半島のアルカイダ』幹部。四六歳。

奴隷迎合【1】（改訂版）

【1】

・二〇一一年七月某日　アラビア半島北部

ネフド砂漠の夜更けの空は、雲ひとつなく澄み渡っていた。ビロードのような群青色を背景に無数の星々が瞬き、手の届きそうなほど輪郭のくっきりした半月が、砂一面の荒涼たる地を照らしている。一陣の風が砂丘の谷間に吹き込み、粒の細かい砂が煙をくゆらせる。巻き上がる砂塵が小高い尾根を越えては、すうと尾を引いてたなびき、おぼろげな霞となってかき消える。

砂漠が地球上で最も過酷な自然環境であることは真実であり、こうした幻想的な一面を折に見せることもまた事実である。この乾ききった半島に千夜一夜物語が誕生し、今日まで連綿と語り継がれてきたのは決して偶然ではない。

とはいえ、そうした伝記は説話は概して歴史の勝者が著すのが常である。輝かしい栄華は、それに先立つ後ろ暗い謀略あっての結果でしかない。裏を返せば、明確な記述のない行間には何かしら、民草へ開示したくない不都合が潜んでいる。輝かしい英雄譚の栄光の裏にはそれと等しい、あるいはもっと底暗いな陰が共在する。だが、不都合な秘め事をあえて後世に残す道理はない。

そんな史実の鼻つまみ者がまたひとつ、この砂漠の夜闇に紛れ込んでいた。強化繊維のヘルメットを被る西洋人ふたりは、砂丘の稜線ぎりぎりに目線を据えて、じっと息を潜めていた。ひとりは顎幅が広く、高倍率の双眼鏡を通して稜線の先を睨んでいる。

「シエラ・ワンよりブラヴォー・ワンへ。感明度は？」

双眼鏡を構える男が、顎先で揺れるマイクに囁く。その隣で相棒が、狙撃銃に装着した熱線映像《サーマル》スコープの接眼レンズに目を凝らしている。

数秒遅れて、くぐもった男声の応答があった。〈ブラヴォー・ワンよりシエラ・ワン。感明度は良好。目標に動きはあるか〉

「ネガティブ。三十分前と何も変わらない」

〈うちのボスは三十分前の状況なんか憶えてない。もっと具体的に頼みますよ〉
ブラヴォー・ワンの口振りは不服そうではあっても、頭ごなしに咎めるものではなった。自分にはその資格がないという、遠慮が窺えた。
顎の広い兵士は双眼鏡から目を離すと、狙撃手の肩を叩いて状況報告の任を押しつけた。狙撃手は露骨にいやな顔をしたが、上官に頼られること自体はやぶさかではなかったので、ため息で拝命の意思を示した。
「シエラ・ツーが、目標について供述する」
シエラなる二人組が見下ろす前方には、砂丘に囲まれた縦横百メートルほどの盆地が開けていた。盆地の中央には、長方形のテント八つが密集して設営されている。そこから少し距離を置いて、他より幾らか大きなテントがひとつ張られている。敷地の左端に目を向けると、幌張りのトラック二台と、荷台に機関銃を据えつけたＳＵＶ一台が駐まっている。複数の轍が、なだらかな上り坂を経て盆地の外へと延びている。その粗末な車回しが、砂漠と盆地を繋ぐ唯一の経路だった。坂を上がりきると、二本の鉄杭に太い鎖を渡しただけの検問が設けられており、〝トーブ〟と呼ばれるゆったりした装いの男ふたりが立っていた。
狙撃手はスコープの倍率を落として盆地を見渡した。まったく同じ動作を、三十分前にも取っていた。電源駆動のスコープが、人間の熱特徴を白い影として捉える。狙撃手は熱源の数を勘定しながら、ヘッドセットのマイクを口元へ寄せた。
「……立哨は盆地の四隅にひとりずつと、検問所の両脇にふたり。前回の報告とおんなじだ。銃をペンダントみたいに胸の前で揺らしてる。呑気なもんだよ」
〈でも、武器はある訳だ。ちっちゃくなって棺に収まるボスを拝みたくなけりゃ、しっかり見張るんだな〉
ブラヴォー・ワンの控えめな叱責に、シエラ・ツーこと狙撃手は苦笑した。「分かってるよ。ヘマなんかしない」

〈そう願うよ。じきに本隊がそっちへ行く。目標に動きがあったら、逐一報せてくれ。いいな？〉
呆れと疲れの入り混じった声が通信が終了させると、狙撃手は銃を構えたまま肩をすくめた。
「いやはや、我らが”ボス”は手厳しいね」
相棒の軽口に、双眼鏡の兵士は口角を上げた。
「そのボスに褒められたくて息巻いてるのさ。分かってやれ」
「面倒な職場だね。ここ以外に行くあてもないけど」
狙撃手は一転して表情を引き締めると、盆地の監視に全神経を集中した。高価なスコープ越しの眼光が、あくびを欠いて鼻をほじる立哨に語りかけた。
「ちゃんと拝んでおけよ、間抜け。最後の鼻くそかもしれないからな」
シエラの後方一キロメートルの地点、低木がまばらに生えた川床に、岩脈が落とす陰を隠れ蓑に、十四人の男が活動していた。周囲にそびえ立つ岩脈と砂丘が、彼らの存在を包み隠していた。地面と同色の偽装網を被った見張りが、高みに配置されていた。
集落の中央は砂礫に覆われた低地で、いかめしい装甲車輌四台と、全地形対応型の四輪バギーが円陣を組んでいた。車体はもれなく所々で砂色の塗装が剥げ落ち、ヘッドライトを分厚い布で覆われている。
この男臭い集落だが、実はその誕生から二時間と経っていない。現代に適応した遊牧民と偽るには、男衆の外見はあまりにおっかなすぎた。全員が迷彩プリントの戦闘服に身を包み、杖の代わりに銃身を短く切り詰めたアサルトライフルを携えている。運び手に引き連れているのは痩せたヤギではなく、バッファローをも轢き殺せる〈ブッシュマスター〉の装甲兵員輸送車であった。
男たちは互いに口汚く罵り合ったりせず、自分の作業に没頭していた。毛穴から紅茶とジャガイモの臭いを漂わせているので、英国紳士には違いない。対テロ任務を専門とする戦闘中隊の一部門というのが、この異邦人らの身上であった。
二〇一〇年一二月十七日、チュニジア中部でひとりの若者が独裁政

府への抗議に焼身自殺を図った事件を皮切りに、周辺地域で民主化を掲げる反政府運動が勃発した。後に〝アラブの春〟と称されるこの動乱はイスラム教圏全土に波及し、瞬く間にエジプトのムバラク政権を打倒した。結成間もないコミュニティが独裁国家に終焉をもたらしたことで、各国は軍事予算の再検討に追われた。

ところが、この民主化運動を手放しに歓迎する声は少なかった。統制なき革命運動――自分たちの息の掛かっていない勢力による反乱は、従前のシステムを破壊する外部不経済でしかない。脚本にないハプニングはゲーム進行を阻害するばかりか、後の展開に悪影響を与える。

反政府運動の活発化から間もなく、革命が偽りの三文芝居であったという諸外国の想定は的中した。現地の有力者や軍閥に、崩壊後の治世を正す意志はなかった。政治犯の多くは私財を国外へ移して地下に潜り、ＳＮＳの先導者は数多のテロリスト集団が権力の空白地帯を跋扈し、彼らの標榜するエゴを迎合しない人々を虐殺していた。先の対テロ戦争で衰弱したはずのアルカイダ系組織も、この混乱に乗じて勢力を拡大させた。〝アラブの春〟は、訪れた国々に死の氷雪を振り撒くだけの災厄と成り果てた。

インターネットの普及により、無辜の市民なる概念は失われた。全ての国民は何らかの形でメディアに接しており、過激な表現を用いれば、彼らを国家が潜在的なテロリストとして監視する依拠となる。衆人環視での暗殺や殉教さえなく、数秒間のタイピングで暴動を煽れるのだから、これほど低リスクで懐に優しい大量破壊兵器が他にあるだろうか。唯一の欠点といえば、実際の威力が使用者をして未知数というくらいだろう。媒体次第で地球全土を射程に収める無形の生物兵器、それが情報である。

危うくも安定していた支配の復旧、それを軽率に壊し続けるならず者の対処に、東西列強は不承不承ながら膝をつき合わせての交渉を迫られた。アメリカ主導の多国籍軍を組織する西側に対し、シリアを中心に傀儡政権を擁する東側も我関せずとはいられない。かくして、地球規模の外部不経済の緩和を本願とする代理戦争が開演する訳であ

る。
　この不始末の参加国がひとつ、かつて七つの海を制したイギリスは、嫌われ者を演じるのに辟易していた。幸い、英雄の肩書きを手放したくないアメリカと、悪役であることがステータスのロシアが同じ次元に存在したので、女王の民は脇役に徹せられた。
　イギリスに、動乱を通じて経済圏を拡大する目論見はなかった。爆心地には旧ソ連製の武器が溢れ、暫定政府の機能不全も相まって、新規の販売契約は見込めない。アフリカ大陸への過干渉で火傷を負った経験から、英連邦が本件に積極的でないのは極めて自然な成り行きであった。
　ＵＡＥやドバイ、イエメンといった湾岸諸国の要人を救出し、パイプラインなどの重要インフラの警護を強化……これらの雑務を、イギリスはメディアの追求を避けつつ、しかもアメリカの機嫌を窺いながら用事を片付けなければならなかった。
　幸か不幸か、こうした荒事を十八番とする飲んだくれ騎士団が、ウェールズ近郊に兵舎を構えていた。英国防相は酔い潰れる少数精鋭部隊を叩き起こし、彼らにアラブの春を画策した黒幕の排除と、女王に仇なすテロリスト掃討の任を与えた。英国陸軍が誇る聖剣のひとつ、第２２ＳＡＳ連隊に。
　偽装網を被った四輛の兵員輸送車、その一輛の運転席で、ＳＡＳ隊員のひとりが車載の衛星通信機をせわしなく操作していた。助手席――指揮官の席では、旅行用のアイマスクで目を覆った男が、ダッシュボードに両脚を投げ出していた。狭い運転台で息苦しそうにくつろぐ男を横目に、助手席の兵士はヘッドセットのマイクへ語りかけた。
「ブラヴォー・ワンよりアルファへ。シエラ・ワンの定時報告を受けた。目標に目立った動きはあるか」
　アルファとコードを振られた作戦本部が、芯のある官能的な女声で応じる。
〈アルファよりブラヴォー・ワン。上空からシエラ・チームのストロボを確認している。作戦区域の敵影は、六つのまま変わりない〉

アルファの言う上空は文字通りの意味ではなく、地上数千メートルを飛翔するＵＡＶ（無人航空機）が撮影している熱線映像を指していた。モノクロ映像では敵味方の区別が困難なので、同盟勢力は赤外線灯を装備して同士討ちを回避する。原始的だが、天上から愛国者とならず者を判別するには、それしか術がない。前線にいる兵士の眼球が、未だ最も優れたセンサーであり続ける所以である。

〈各員、次の命令まで待機、その場を固守せよ。それとブラヴォー・ワン、聞いているな？　怠けるな〉

冷淡な声音を最後に、通信が沈黙する。運転席の兵士が、助手席の男に苦笑を向けた。

「……だそうです」

「聞こえてるよ」

助手席の男はのそりと上体を起こすと、分厚いアイマスクを不満も露わに剥ぎ取った。安眠グッズの下から現れたグレーの瞳が、フロントウィンドウ越しの夜空を恨めしく見上げる。夜闇に紛れたＵＡＶを見つけられる訳もなく、男は肩を落とした。

「少しは眠れましたか、ボス？」

運転席の兵士――ダニエル・パーソンズ伍長の問い掛けに、男は呻いた。「お前さんがブラヴォー・ワン代理だった十五分間はな」

男の顎の右から首にかけて、古いぎざぎざの傷跡がのたうっていた。けだるい呻きを伴って強張った節々を解し、本来のブラヴォー・ワンこと、小隊長ヒルバート・クラプトン少尉は軍務に復帰した。

ヒルバートは飲みかけの水のボトルを拾い上げると、少し口に含み、すぐに車外へ吐き捨てた。砂混じりの水が、瞬く間に地面へと飲み込まれていく。不純物にまみれた口内をゆすいで、そこでようやく目覚めの清水を嚥下した。

「まさか、今度もハズレじゃないでしょうね、ボス？」

無香料のボディシートで顔を拭きながら、ダニエルが不安に眉根を寄せた。「三回だ。もう三回も空井戸《ドライホール》が続いてる。みんな参ってる」

彼らの業界で徒労を意味する俗語に、不良騎士団の長は乾いた笑い

を発する。
「焦ったところでツキは来ない。くその塊にケツを突っ込んで、お上の指示をじっと待つ。それが俺たちの仕事だよ」
「でも――」
身を乗り出そうとするダニエルの鼻先に、ヒルバートが一本指を立てた。
「落ち着け、ダニー・ボーイ。これが最後って訳じゃない。然るべき時まで、無事にやり抜くことだけ考えればいい。
水も残り少ないんだ。舌をぶんぶん回すのは、帰ってからでも遅くない」
「じゃあ、物資投下かケータリングでも要請すりゃいいんだ」
「無茶を言うなよ、おじさん困っちゃう」
どうどうとなだめすかしながら、ヒルバートは未開封の水をダニエルに掴ませた。
小隊長の安全志向に、舎弟は満足していなかった。まだ二十代半ばのダニエルは、その若さゆえ戦果に飢えていた。ついでに、アイルランド民謡めいた呼び名も好いておらず、その唇は鋭利にとがるばかりである。
ダニエルが躍起になるのも無理はない。この二週間、彼ら第十六航空小隊は国際テロ組織・ＡＱＡＰ（アラビア半島のアルカイダ）の幹部を捜索・拿捕する任にあたっていた。軍事衛星やＵＡＶから不審な集落の発見を受けると、彼らは夜を待ち、そしてヘッドライトも点けずに、指定された座標付近へと急行する日々を送っていた。
小隊はこれまでに小さな敵拠点を三度を襲撃するに至ったが、いずれも軍上層部のお眼鏡に適う収穫は得られなかった。襲撃が実行される日は、まだ幸運な方である。高空からのカメラ映像だけでは、そこがテロリストのキャンプかどうかは断定できない。特殊部隊員が実際に現場を偵察すると、捨て置かれたテントの残骸だったり、驚くほど家屋に似た岩だったりということもある。
この二週間において、彼らはテロリスト見習い二八人を圧倒し、それと同じ数のＡＫ―４７を破壊していた。世の軍人の大半が敵との

戦闘を経験しないまま退役する現実を鑑みれば幸運に違いないが、血気盛んな年頃の戦闘員の溜飲が下がるはずもない。
若手たちが痺れを切らしている最大の理由は、彼らに残された時間であった。今回の遊撃任務に際して、作戦本部は二週間という明確な期限を設けていた。十二時間後の彼らがいるのは砂漠ではなく、北へ三〇〇キロ離れたキング・ハリド軍事都市の兵舎である。泣いても笑っても、明朝には自軍の拠点へと急ぎ帰らなければならない。
基地に戻ったからといって、またすぐ遊撃任務に出られる訳ではない。そこからの二週間は、別のＳＡＳ小隊が遊撃任務を帯びることになっている。ダニエルたちが再び敵地襲撃に携われるのはさらに二週間後、あるいはもっと後になってからかもしれない。それまでは戦線の後方で要人警護や現地の兵士の訓練といった、実りのない苦役が待っているのだ。
――こんなことをするために、特殊部隊に志願したんじゃない。そう逸る子分の気持ちもよそに、ヒルバートは狭い車内で柔軟体操を始めた。肩周りの筋肉がほぐれるより先に、シエラ・チームからの無線通信が届いた。
〈全部署へ通達する。孤立したテントに動きが見られる〉
敵に最も近い目が発した仕事一辺倒な声に、ダニエルは息をのんだ。
〈テントから男がひとり出てきた……どうも妙だな。精査する、ブレーク〉
「次の送信まで他の者の発言を禁ずる」という意の通信用語に、襲撃隊の緊張が高まる。斥候隊の次なる言葉を聞き逃すまいと、ダニエルはヘッドセットを耳に強く押しつけた。隣のヒルバートは、悠々と肘の関節を伸ばしていた。「さて、どうだろうねえ」
二十秒の沈黙を経て、シエラが追加の情報を寄越す。
〈さっきの男だが、初めて見るやつだと思う。熱線映像では人相の判別は困難だが、腰を折っていて、だいぶ年かさな感じだ。すぐ両脇に、武装した男ふたりを連れている〉
ダニエルの鼻筋を汗が伝う。「護衛だ。重要人物に違いない」

「気が早いぞ、若いの。どこぞのじいさんが月光浴に出ただけかもしれん」
上司のまるで取り合わない口振りに、ダニエルが憤りの視線を投げた。勢い任に反論しかけ、そしてはたと口をつぐんだ。暗がりの中で、ボスが勝ち誇った笑みを浮かべていた。
盆地の動向が追って報された。〈複数の人影が他のテントから出てきた。数は六……いや、七人。全員、例の男の前で横一列に並んだ……説法か何からしい……おっと、もう終わったようだ。
例の男が、孤立したテントへ戻っていく。付き人ふたりも一緒だ。待て……やつは左足を引きずって歩いている……〉
男の仕草を聞いた途端に、ダニエルの目がぎらりと輝く。興奮に鼻腔の拡がる舎弟をよそに、ヒルバートはいかつい軍用ラップトップを膝に置いて、蓋を開いた。
〈三人がテントに入った。整列していたやつらも自分たちのテントに戻り……いや、そのまま盆地の外周へ散開した。見張りの交代時間らしい。今まで立哨を務めていたやつらが、テントに向かっている。他に目立った動きはない〉
シエラの報告がひと息つくと同時に、ヒルバートが通信機の送話スイッチを押し込んだ。
「その男の映像は？」
〈もう送ったよ〉
ヒルバートが視線を落とすと、ラップトップが一件の動画ファイルを受信していた。ヒルバートの操作を待たず、ダニエルが脇から腕を伸ばし、ラップトップのキーを叩いた。
低輝度の液晶画面いっぱいにモノクロの熱線映像が表示され、シエラ・チームが見たままの光景が再現された。二分足らずの映像が流れる間ずっと、ダニエルの鼻息が車内に反響していた。
ヒルバートは映像の確認を終えると、満足げにほくそ笑んだ。老人の動画ファイルを上空のＵＡＶ経由で作戦本部へと送信しながら、送話スイッチを押し込んだ。「シエラ・ワン、お前はどう思う？」
〈どうだろうな。我々が探していた男かもしれないし、そうではない

かもしれない〉
「お前の勘に訊いてるんだよ」
ヒルバートが苦笑していると、作戦本部のメッセージがラップトップに寄越された。
――照合の結果、ＨＶＴと断定。
味気ない文言であったが、それで事足りた。
ヒルバートは口角をいびつに持ち上げた。「シエラ・ワン、一時間後にそっちへ届け物に行く」
〈新鮮なキュウリのサンドウィッチを頼む〉
「お前らへの差し入れじゃないよ」ダニエルへ目配せしつつ、語を継いだ。「ＶＩＰへのルームサービスさ」
小隊長の意地悪い声音に、ダニエルの砂まみれの顔が輝いた。
「ブラヴォー・ワンより全部署へ。お上のお許しが下りた。帰る前にもうひと仕事やるぞ」
宵闇の岩脈に、静かな活気が満ちあふれた。戦闘員は各自が銃の点検に躍起になり、装備品が正しい場所にあるか確認作業に執心した。他の隊員がアドレナリンを抑えられないでいるのを、ヒルバートは日中の熱気で溶けたチョコレートバーを囓って見物していた。
作戦本部がＨＶＴ――高価値目標と指定した人物はＡＱＡＰの幹部のひとり、ハミド・イブン＝ハーディ・ジャラールなる人物であった。ジャラールは爆弾製造を専門するテロリスト養成顧問であり、他の幹部とのパイプを有すると目されていた。
そしてこのジャラールの拿捕こそが、ＳＡＳが中東に派遣された最大の理由であった。
ヒルバートは数人の隊員を盆地の中央に集めると、作戦地図を地面に広げて襲撃計画の立案に取り掛かった。焚き火めいた光源で外部に存在を主張しないよう、遠方から視認しづらい赤色のＬＥＤで地図を照らした。
「襲撃に参加するのは十人だ。残り四人はここの固守を続けつつ、不測の事態に備えて待機する。……どうも、文句があるやつがいるな。聞きたくないけど言ってみろ」

「うちのチームがお留守番なのはどうしてだい？」
ヒルバートの向かいで、イタリア系の隊員が首をかしげる。その男は盆地に居残りを命じられた四人のリーダーだった。
男の質問に、ヒルバートはにべもなく応じた。「三日前の襲撃でお前らが暴れている間は、ヴェストのチームが留守番だった。順番が回っただけだ。
それに、このＶＩＰは丁重も扱わにゃならん。手厚く迅速……そして穏便に。お前を連れて行ったら乱交パーティになる」
イタリア系が肩をすくめて引き下がったので、ヒルバートは要旨説明（ブリーフィング）を仕切り直した。
「目標へは徒歩で向かう。三日前の、第二次大戦みたいなやり方は忘れろ。機銃をぶっ放しながら装甲車でテントを轢き潰すのは、あれっきりだ。……まあ、悪くない体験ではあったな」
方々で乾いた笑いが上がり、この暴力を考案したイタリア系の男に、したり顔が浮かぶ。
「……とにかく、この仕事は静かにやり通す。暴力のぶつけ合いはなしだ。
目標への侵入だが、正面から行う。隠密とは程遠いが、地雷原が敷設されている可能性を考慮して、安全策を採る。
まず敵の歩哨を無力化して、検問所を確保する。見張りとして検問所にふたりを残し、他の八人で下っ端のテントをひとつずつ制圧する。雑兵の掃討を終えたら、ジャラールのテントに押し入って、やつを捕らえる。要するに、敵の根城にこっそり忍び込んで潰滅して、ＶＩＰを拉致するって寸法だ。
繰り返しになるが、プロフェッショナルとして貫け。